

藤が井上の銀行救済を非難した頃であらうか。金解禁の問題に就いても、豫算の問題に就いても多年わたり合つてゐる。この二人は頭もあるし筋の立つ理論を戦はすので議會論戦中出色のもので、私は、官報速記で読んで、いつも興味を感じたことを忘れない。殊に金融資本主義の立場を井上が代辯し、産業資本主義の立場を武藤が強調してゐた點、わが資本主義發達史の上から見ても注目すべきものである。

殊に昭和四年七月十日民政黨入黨以後は闘士として、政治の本舞臺に立ち、常に立役者であつた。武藤、三土、砂田、大口等々の對陣もさることながら、あの財政家そろひの民政黨内で大藏大臣として濱口、若槻をさし置いて財政上のリーダーシップを握つた點は刮目に價する。第一次減俸案提出のとき濱口が挫折したのに對して彼は可成り不平であつたらしい。

殊に協力運動で安達と正面衝突をなし、民政黨の大屋臺を一舉に占據するだけの氣魄をさへ見せてゐる。弱腰の若槻をつつぱつてあすこまで争つたのは一つに井上の力であることは既に周知のことだ。

總辭職の日に、井上安達會見のとき、「君は政黨のめしを喰つたことがないではないか」と云

はれ代議士に出ることを内心決意したと云ふのも、かれの負けん氣の現はれである。或ひは内心俺は政黨にめしを喰はせてやると考へたかも知れない。解散後選舉區候補地として神奈川第一區、静岡駿東郡、その他大分、大阪等引く手あまたであつたのにもかれの政黨人としての人氣は素晴らしかつたことがわかる。かれ自身はその中でも大阪を一番に考へてゐたかと推察される理由があるが、「今衆議院に出ては總裁の野心からと人が云ふて黨内が落付かぬから他の機會に」と言つてゐるさうだ。總裁はかれの野心ではない。井上總裁説は民政黨内既定の事實なのであつた。

多年の知音でもあり、先輩でもあつた高橋と、去る議會で大論戦をやつたのは内心苦しかつたであらうが、金本位を死守した井上の信條から云へばやむを得ないことであつたらう。

闘士井上の一生は、かやうに意氣軒昂たる奮闘の歴史である。才幹あるが故に先輩が引立てたのであらうが、また闘志あるが故に先輩とも激争した。その銀行家としての經歷は山本達雄によつて開かれ、高橋是清によつてのびた。正金總裁、日銀總裁をかくて勝ち得た。しかし高橋と弗賣弗買で大論争をやつた。後藤新平によつて山本内閣に入り、高橋により再び日銀に

入つてゐる。更に山本達雄を通じて濱口とも近くなり、一宮、中野を仲介に安達とも交はつた。その濱口内閣入り、民政黨入りはかくて成就した。が、遽ち安達を破り、若槻を支持して既に次期總裁の貫録を示した。また近衛文麿を経て西園寺元老とも連絡を有した。かゝるゆき方は政治家の誰れしもやる所で、寧ろ井上の實力と一本氣が常に邁往せしめたものと見るべきであつた。

しかし政治家として本舞臺に昇つた時期は好適なものとは云ひ難い。ブルジョア經濟學者にとつても殆んど理解の出來ない一般的恒久的恐慌の唯中に於て、緊縮政策を續行し、行財税三大整理に没頭し、不人氣なデフレーション政策をとるべく餘儀なくされたのがその本舞臺の役割であつたからだ。正貨は流出し去り、歳入は不足し、豫算は編成困難で、しかも非募債主義は破れ、減税どころか増税をさへするに至つた井上財政の大破綻は、寧ろ没落資本主義の窮狀の暴露に外ならなかつたのである。

私はその政治家としての登場が餘りに遅く、且つその去ることの餘りに速やかなのを嘆ぜざるを得ない。絢爛としてゐるやうで、寧ろ苦惱の多かつた短かい政治生涯ではなかつたか。

理論のないポリテイションではなく、財政知識と理論とを、ともかく把持してステーツマンたらんとしたかれは不運なる政治家と謂はなければならぬ。私はかれに於て資本主義没落期政治家の陰慘なる華麗を見免すことが出來ない。

五、人としての井上

イタリーに於て、ニツテイ・ジョーリツチがいかにかにファツシストによつて取扱はれたか？ 帝政ロシアに於てウイツテがいかにかに苦悶したか？

私はそれらの政治家の論著や、回想録を読んで過渡期政治家の立場のいかなるものかを知つてゐる。それらの人物には改造建設期の不遇なる政治家とちがつた意味での悲哀が流れてゐる。かれらには沈黙がある。かれらには忍従がある。不決斷と逃避とがその逃場である。トロツキーの如き絶叫はない。ヨッフエの如き自裁もない。また西郷の如き謀反もない。私はその意味で江木、幣原、若槻、または犬養、三土、高橋等の諸政治家をながめてゐる。主觀的にはそれぞれ元氣をもつてをらるゝとは思ふが、客觀的には私はかれらの裡にニツテイ・ジョーリ

ツチを發見せざるを得ないのだ。

妥協と逃避をなさずしてその主張に忠實なる場合には、エルツベルゲル、ラーテナウの運命が横はる。わが井上前藏相は實に果敢に轉換期政治家の確信に直進して斃れたるものだ。

井上邸の爆弾事件は、おどかしであつたとしても、筆者の知れる限りに於ても、昭和六年十一月末と今回の二度危機が訪れた。否その危険は昭和六年三、四月の初から常に伏在し、將來も亦その危険から解除されてゐるとは云へない。かゝる過度期に於て、デマゴグは別として眞面目な政治家は、心理のどこかに實に可憐な隠遁所をつくつてゐるものである。

井上が「大臣をやめたら坊主になる。そして失業群の罪亡しをやる」と云つてゐたさうだ。ある人が宗旨は何かと聞いたら「經濟宗さ」と答へ、また「マルクス宗さ」と冗談を云つた。それで、この坊主話しは半ば以上はヨタであることがわかり、寧ろひそかに防弾衣をつけてゐたと云ふデマの方を信じたくなる。しかし坊主となつても、百萬長者の坊主で、御殿場わたりの見はるかす富士の裾野の別荘生活位のものであるとしても、又全然ことばだけのヨタだつたとしても、かやうな弱氣が折にふれ心中を往來したことは事實であつたらう。

かれの隠れたる趣味の一つが芝居を見て一人窃かに泣くことであるのも、同じ現はれであらう。合邦浪宅の場とやらを見て潜然と泣く前藏相を想像することは、傲岸なかれの一面に對する冒瀆のやうにさへ感ずるが、恐らく事實であらうと思ふ。

人間井上は、芥川龍之介の愛讀者である。漱石よりも澄江堂をすくところにも、そのセンチメンタリズムが見られるではないか。かれは四千部からある藏書の裡に坐して芥川の冷たい温かさを愛したことであらう。と云つて書齋のかれが文學青年だけでないことは云ふ迄もない。オーストリアの基督教社會黨の宰相ザイベルやレンテン・マークによつてどんだの獨逸財政を救つたシャハトをも學んでゐる。更にソヴェット經濟を研究し、いかに五ヶ年計畫を資本主義統制經濟に利用せんかと苦慮してゐる。狼に衣を着せたやうな統制經濟であるとしても……何んと云つても、かれは當世政治家中の學者である。原脩次郎が巡査であり、犬養首相が新聞記者であり、三土が文法學者である以上に、かれが金融經濟の學者であることは否み難い事實だ。

しかし筆者の推察する所では、かれの學問の深さは江木の政治學、幣原の外交理論に及ばな

いのではないからうかと思ふ。帝大図書館の新舊圖書の中政治理論、立憲制度、殊に選挙法に関するものは大抵讀破してゐる筈の江木法學博士と、外交の理論と歴史には驚くべき讀書をしてゐると思はるゝ學徒幣原ほどの、しつくりした學究肌ではないと想像されるからである。しかし少なくとも若槻首相よりは學徒として優れてゐると考へる。私の推量する所によると、若槻はノートを一讀して要領よくこなす質の秀才で、斗酒なほ辭せぬかれの酒量ほどに學問に感溺してはゐないと思はるゝからだ。

ともかく學究井上は金融經濟の理論家であり、且又實際家でもある。單に公經濟に於てばかりではなく、私經濟に於ても卓越せる理論と實際とを兼ねてゐると思ふ。

減俸問題を押し切つた財政家井上は、私經濟に於ては押しも押されもせぬ百萬長者であつた。甚だ私事にわたつて、氣がひけるが、昭和三年度査定の所得税額は三一、七四二圓であつたらしいから、その年収は恐らく一七九・八〇〇圓に達する筈である。この位るの年収と、少くともその十倍以上の財産とは、あれだけの財界經歷と政治的地位とからすれば、當然であるかも知れない。澁澤に並んで澁澤第二世と云ふほどの資産ではないであらう。しかしこの當然

政治理論、立憲制度、選挙法

はブルジョアの當然であつて、決して大衆的當然ではない。否大衆にとつては同情のもてない別世界のことだ。

此點は、筆者が卒直に人間井上に感ずる所の不滿不信である。

またこの點は減俸に就いての彼れの人間の自信を打ち壞したものでなからうか？ 野人小泉又次郎が遞相時代、昭和六年六月頃、ある席上で「ヨウ減俸の大將」と聲をかけ、流石の大將をたじたじたらしめたと云ふ話がある。又自からもその雅號清溪を改めて元峰としようかなどと冗談に紛らせてゐる。永平寺の元峰師は俗物と同名になつて迷惑であるかも知れないが。しかしかれには一遍の俠氣があつた。嘗つて暗殺された外務省の阿部政務局長の遺族を養つたりしてゐるのがそれだ。これは一遍の俠氣で、社會的な正義でないけれども、決してわるいことではない。……

大分縣大鶴村に明治二年に生れ、井上簡一の養嗣子となつた人間井上の生ひ立ちは、乍併、決してブルジョア的ではなかつたらしい。風呂焚きが下手だと母親に叱られた少年井上、本を讀み乍ら唐臼の番をしてゐる中に、うっかりして、米を粉にしてしまつた少年井上は、凜々し

都の真中で、全都、全世界の環視の前で……。

こんどだけは、殺害者に黒紋付を送る勇者もあるまい。

それは、この兇犯者が徹底的に憎悪すべきであると云ふ理由からよりも、寧ろ被殺害者が堂
堂たる政界の有力なる政治家だと云ふ理由から……。 (1932.2.11)

い存在であつたに相違ない。酒もやらず、煙草も喫はず、讀書と碁とゴルフを趣味とし、清
福なる家庭の人としての父性井上、東大理科在學中の秀才益雄君を失つた父性井上も政治家に
はめづらしい爲人であることは否み難い。

かやうに、よき人間井上も、政治家としては純然たるブルジョア政治家であり、そしてステ
ーツマンとしても未完成で終つた。

六、その死の吟味

殺戮者は農村の窮乏を云つてゐる。それにはたしかに一理ある。しかしそのこと、井上民政
黨選舉委員長射殺との因果はよく分らぬ。殺戮者には理論的理解はなかつたらう。たゞ、血盟
團一派の腕として働いた。

犯人にファッシズムの意識行動を豫想するに資料が充分とは曰へない。が、少なくともか
るファシズム的雰圍氣の感染者であることは想像し得る。

ファッシズムとは、その雰圍氣だけでも、およそかくの如きものであることが示された。帝

犬養毅宰相論

一、闘士犬養人間犬養

宰相犬養毅はいかなる人か。筆者は、率直に、人間味の豊富なこと彼の如きは、現代政治家中稀なりと思つてゐる。私は先づ人間犬養を描いて見よう。また闘士犬養を髣髴させて見よう。それはある程度宰相としての犬養を論ずるの準備となり得るであらうから。

私の網膜に映ずる犬養は一つの短篇集である。と云ふよりは、秀抜な警句であるかも知れない、かれの闘争史、かれの議會闘争はその要所々々に實に簡潔な寸鐵語を記録してゐる。論理的な體系的な議論を陳述すると云ふよりは鋭く短かい匕首を打ち込み打ち込み、五十年の政治家生活を通つて來た。

藩閥政府に對し、個人に對し、辛刺骨をさす皮肉と罵詈をなげかけて來た。しかし、かれ自

から云ふやうに、「惡を憎むこと天下自分より甚しきはない」と云ふことが當るかどうかは別としても、懲惡の熱情から出た惡罵であることは認めていゝと思ふ。

明治廿五年品川内相の選舉干涉に對しかれは第三議會で彈劾演説を試みた。そしてその干涉振りは無政府（島田三郎氏の用語）以上であるとし、「無政府でない、實に猛惡な政府である。殘虐なる政府である」と痛罵してゐる。「無政府どころではない、此殘虐のこゝろを行つた政府に向つて無政府と云うたのが何を誣ふるのである。我々は内閣總理大臣並に其處に列席される所の内閣大臣に申すが、（……と恐らく例のフォークのやうな指で指さしつゝ）何を誣ひたのである、誣ひたと申すならば此事實は是丈ある、一々證據がある」と舉證に及ぶのである。

かれの無政府論は有名な演説であつた。この演説に於ては藩閥に對する闘争心燃ゆるが如きものがあつた。

「海軍大臣樺山君は、最も傲放なる最も暴慢なる言葉を用ゐて、日本帝國二十五年の平和を保つたのは此の薩長人の力であると言はれた。その暴慢なる言葉を用ふる人が、現に天下萬目の認めて以て斯様なる殘虐斯様なる人殺しをやつたと云ふことを、己れ確かにやつて居るなれば、

何故己れがやつたと傲慢には出られなかつた。如何にも臆病ではないか」と詰め寄つてゐる。「錢厘の微と雖も減ずるを得ない」と減税を拒否する伊藤内閣に對しては「新形の拳銃に似て」……「連發する毎に命中する」頗る小氣味のいゝ不信任演説を試みた。そして終にこれを斃してゐる。

桂内閣に對してもその優誕により政治的進退をなしたに對して、「議會を障壁とし……を彈丸として國民に宣戰するもの」と攻撃してゐる。この有名なる「彈丸演説」は山本内閣のときの態度と併せて、昭和七年初頭の政變に於けるかれの行動を自縛自縛する結果となつたが、當時の藩閥追迫の意氣込みは買つてやらなければならぬ。

政友會に合同したとき大石巖巖居士が「憲政の神も今は四谷の野狐かも知れない」と云つたのに對して、負け嫌ひの犬養は一文を草して「曰く大石居士多年野狐群中（大石が禪に凝れるを指す）に没頭す、未だ嘗て人を看す、人を看ては輒ち駭き走つて叫ぶ。野狐來、野狐來と。」木堂居士一たび鷹尾を揮つて大喝す曰く、這個老漢、吾れ汝の爲めに公案を擧せん。如何ぞ、是れ木堂西來の意、鳶飛んで天に戻り、魚躍つて淵に戻る。喝（大正十四年五月）と。言葉だ

けではかれはなかなか敗けてゐない。しかしこの改革合同は彼の政治的生涯中、最も批難の多かつた致命的な行動であつた。が、右の文意は大石の批評に答へてこの苦境を押し通らんとする意志づくがよく出てゐる。犬養が大正十四年五月十日革新俱樂部代議士、前代議士地方支部代表者の聯合會席上に於て述べた「改革合同の理由」を見るとこの意志づくがよく理論化されてゐる。「魚躍つて、淵に戻る」と云ふ公案の意味もわかる、その要旨は『改進黨以來四十年の歴史より見て、常に政友會を敵視したる既往に顧み、今俄かに合同を求むるは、甚だ困難の注文であるが、大局より達觀し専ら國家本位の見地に立ち、毀譽褒貶を一切度外に於いて猛然として一大決斷に出でたいのである』といふのがそれである。この決斷に入る前程たる客觀的の見透しはどうか！ かれは次の如く見てゐる。

『普選に由つて無産階級より續々選出せらるゝであらう。されど第一次、第二次の選舉では其代表は猶議院の一小部分に過ぎぬであらう。何となれば大選舉區でなきたために又運動費制限の猶餘裕を存する爲めに、又其他の事情よりして一時に此種代表の大に選出せらるべしとも思はれぬ。然らば既成政黨は如何と云へば、普選が行はれたればとて決して急激に減退するものでは

ない。假令結局は減少するとしても俄然と一時に變化するものではない。斯く觀じ來れば舊勢力より新勢力に移りて其完全に活動する迄には少くとも七、八年乃至十年は要するであらう。『此の七八年乃至十年間過渡時代の政治は、依然として舊勢力に由つて運用せらるゝであらう。果して然らば吾人は如何にせばよきか、舊勢力は一切顧みず、如何なる悪政を行つても吾人は不關焉として傍觀すべきか將た吾人の力を加へて之を改善して過渡期に處すべきであらうか、是れが尤も大切なる現實の問題である』此の中間過渡期が、内外の形勢に鑑み尤も重要期間たるにも拘らず、舊勢力若し依然として新勢力の悪感を刺戟する如き行動を以て政治を運用するに於ては、或は早晚激烈なる大衝突を惹起するに至るであらう。吾人は他黨の責任なるが故に一切關せずと棄て置くべきであらうか、又出來ない迄も之を改善する爲めに努力するのが國家に對する責務ではあるまいか。』と。

この見透しはほゞ當つてゐた。しかし、革新黨があゝの形體のまゝ——即ちともかく二十人前後の所屬議員を擁する世帯は張れなかつたとしても、少數な急進ブルジョア第三黨として批判的役割りを演じ得なかつたであらうか？ かれが多少の關心をもつてゐたらしい無産者の政治

的進出が、かれの見るやうに、遅れるものとしたら、まだまだブルジョア・ラディカリズムの少數政黨を率ゐて政界を縦横した方が、胸もすくし、政界のためにもなつたかも知れない。而しもつと基本的に見て、資本主義の獨占集中の過程がどんどん加速度になりかゝつてゐた當時に於ては、ブルジョア・ラディカリズムをほんとに支持する階級的背景がなくなり、旺盛な新興階級の潮流は澎湃として無産運動の方へ奔流して行つたのであるから、革新黨独自の存立は稍危ふくなりかけてはゐた。犬養自身でもこの大勢の歸趨は見てゐた筈だし、それに政友系に近い秋田清らが合同の膳ごしらへをつくつた上からは、あゝなつてゆくのが自然であつたらう。唯民政系の關直彦、濱田國松（今政友）らとの對立から云つても政友會への合流は成行と見られた。しかし、無産階級進出を前にして悪政を緩和せんとする合同理由は、既成的勢力への合流を粉飾するものに過ぎなかつた。

大正十四年五月八日かれはかう述懐してゐる。「金無しでは勤まらぬ政黨の首領だ」と。「此際吾等の衷情も察して貰ひ度い」多年貧乏太郎を苦しみながら……自分は常に鍍毒事件の義人田中正造に少しく輪をかけた（？筆者）やうな態度で來た積りだ」しかし今はもう「今後同志と

行動を共にするのも困難である」ゆゑに舊俱樂部員を自由な立場に置かんが爲めにまづ政友會と合同して最後まで活動する積りである」と。

これが犬養の有名な「金がなくては政治は出来ぬ」聲明である。當時のかれの心事としては熱湯を飲むに等しかつたかも知れない。政友入り決定のとき舊同志の高柳覺太郎は隱退を聲明し、「廂かりて主を母屋にとられけり」と一句をものし、犬養もともに一坐共に流涕したと云ふ。この政革合同は彼の政治的生活の一大轉機であつた。かれの所謂「政權爭奪機關」たる既成政黨、床次の所謂政權爭奪株式會社たる政友會に没入併合され終つたときは、流石の犬養も弱はつてゐた。栗本鋤雲の「木強ければ共す」に基くと謂ふ、木強の人、木堂犬養も纏綿たる情緒にさいなまれたらしい。

さきに國民黨から、五領袖、大石正己、河野廣中、島田三郎、箕浦勝人、武富時敏らが犬養をすて、桂公の同志會の傘下に走つたときも、随分難局であつたらうが、政革合同のときほどでもあるまい。

栗本鋤雲翁が「犬養子豪膽不屈、常使人冷然汗下」と稱した大木堂も、進歩黨——憲政黨——

憲政本黨——國民黨——革新クラブと經來つた政治的生活をこゝに卒爾として中斷せざるを得なかつた。

犬養健が嘗つてその當時のことを「父を語る」の中に書いたことがあつた。

「僕は隱退の聲明を發表した折の父の顔をよく覚えてゐる。父は床屋に行つて久し振りに髪をかり、木堂の書が骨董屋で暴落したといふ新聞記事を読み乍ら僕を省みて冗談をいひ、さも空腹に耐へぬやうに晝飯の菜を頬張つてゐた。いかにも肩を下した子供らしい様子であつた。僕は著述家の直感力をもつて信じたのである。僕の父はこの瞬間全く政治を斷念したのである。金のために政治を斷念したのである。僕の歎息は深いものであつた。あのやうな歎息は一生涯二度と經驗することはあるまい。」と。

「畸形的政治家」と評されてゐた犬養木堂ではあるが、奇節居士として一生を終らねばならぬ約束があるわけではない。ブルジョア政黨政治が原敬内閣以來ほゞ完成し、閥族官僚の勢力も殆んど既成政黨に合流し去つた當時に於て、殊に護憲三派運動により舊官僚最後の超然内閣たりし清浦内閣を打倒し去つた後に於て、犬養黨が有力な既成政黨の中に參加して行つたとして

も特に攻撃すべきことではない。一面から見れば多年藩閥と闘ひ、且つ二大政黨に對し批判的役割をつとめ終はり、ほどその大成を見たところで加入して行つた結果になつたものであるから、必然的の行程であつたとさへ見られる。

現代既成政黨中、百練を経た政治家として、かれの政友會内に於ける地位はその後次第に重きを加へて來た。かれの入黨は田中總裁のときであつたが、その没後後任總裁問題の起るや、鈴木系、床次系の抗争は終にかれの總裁出馬を見るに至つた。森恪が黨の意向を負うて訪問し懇請したのに對し黨のためならばやらうと、氣輕にかれは起ち上つてゐる。當時かれは總裁として金があるまいと問はれたのに對し、「金なら腰のきんちやくに入つてゐる」と腰を叩いたと云ふことである。殊に第二次普選を「濱口か犬養か」で争つたとき、めづらしく少し金を作つたが、餘り人がもらひに來ないので俺を貧乏だと思つて誰れも寄りつかぬわいと皮肉を云つたさうだ。どこまで負け嫌ひなぢいさんかわからぬ。

政友會總裁就任祝賀のとき、同郷の平沼淑郎がかれの碁、刀劍、書畫、骨董の鑑識を讚美したのに答へて、「わしは貧乏と苦勞とで七十年暮らして來た。碁はわしが三田學生時代金持の友

人が飲み食ひにゆくの、わしは貧乏だからたつた五錢を握つて碁會所通ひをしたので、人並になり、書畫、骨董はたゞ人のものを觀賞して歩いてめきゝが出来るやうになつた。つまりこれも貧乏の餘德です」昭和六年、六月五日」と答へてゐる。かれの趣味生活も貧乏の賜であつた。況んやその政治闘争場裡に於ける機略權變、驚悍執拗の質も、かれの不遇なりし四十年政治生活の賜でなければならぬ。闘士犬養はかくの如き環境のもとに成長して行つたのだ。

昭和六年末犬養内閣成立し昭和七年第三次普選に大勝し、老來益々矍鑠たる元氣である。

闘士犬養は狼の仇名があるほどだ。第三次普選に於て民政黨からは「ドル買犬養」と攻撃され、大衆黨からは「三井の養犬」と痛いところをつゝかれてゐる。しかし、選挙後の臨時議會に立つや風姿颯爽、あの切れるやうな感じの手を打ふりながら民政黨に逆襲をやる。闘志依然として滿腹である。かれと並び進んだ改進黨の諸名士多くは没落し、河野死し島田逝いて、いまは尾崎、武富位るしかのこらぬ。武富老い尾崎は孤影獨り歐洲の旅に出で、今歸路にある。獨り犬養は大政友會に總裁として陣營勢ひに充ちてゐる。

かれが嘗つて島田三郎を評して「月經の上つた政治家」と酷評したことがある。また尾崎行

雄を評して「尾崎は若い頃から氣取りやで身振りのうまいことは、役者のやうなものでのう」と冷評してゐる。

その口のわるいことは、政治家中に類例を求むればフランスのクレマンソウ位のものであらう。全くかれはクレマンソウ型の政治家であるが、クレマンソウの諷刺が文學的にして、その闘争力が猛虎の如きものあるのに比べるとやゝ遜色があらう。

犬養の闘争力は尖鋭ではあるが、どこか洗練されてゐる。犬養の諷刺皮肉は辛辣であるが、厭味が多い。クレマンソウには犬養の狼の如き變轉自在の機略がない。ひた押しに暴れ廻るのである。しかしクレマンソウの諷刺は優美にしてウイットに富み滋味が流れてゐる。

犬養が嘗つて、月賦償還の家を建てた知人に扁額をたのまれて月浮樓と書きのめした話があるが、これなどは上出來の方でその皮肉の多くは政争上の武器としてふりかざさるゝ場合が多く輕妙な味が尠い。

と云ふのも、クレマンソウと犬養との間に横はる重大な差異があるためである。それは、犬養は本來黨人である。クレマンソウは獨往者だ。犬養には、かばう人間と、皮肉る人間の區別

がある。クレマンソウにはそれが無い。云ふべきことがあれば誰れでもやつつける。ところが犬養は、一種のボスで味方にはやさしい人情家であるために、その皮肉にも政黨色がつきまとい、政治的武器となる傾向がある。尾崎はたつた一人で獨往し得るが、犬養には子分もつきまとい子分もひきつれ度い方である。

矢野龍溪嘗つて犬養、尾崎評を試みて曰く。

『犬養はその頃から精悍の氣眉宇に溢れて明快なる性格で、大用の材たるを思はしめたが、塾（慶應）に入ったときはもう漢學の力が相應にあつて見識を備えてゐたので子供らしい洋學の初歩などは馬鹿らしく思つてゐたらしく、従つて勉強家と云ふ型ではなく矢張り東洋豪傑であつた。尾崎は大人の風があつて常に洋書を読み英國の大政治家などに私淑してユーロピアン・ステーツマンと云ふ風であつた、』と。

これによつてもわかるやうに、犬養は政黨首領たるべき素質があり、尾崎は一人立ちの政治思想家的風格がある。犬養が猛虎の如き孤立の英雄型政治家たるクレマンソウと異なる所以も此處にある。

人間犬養は、かやうに一面に於て鬭争心が強いが人情家としての一面をもつてゐる。敵には強い父ですが内輪のものには、表面の父だけを知る人には想像の出来ないやうな面白い人情味を持つてゐます」と小犬養は語つてゐる。岡山時代の舊友の息子が道樂をしたときに二十幾枚も書を書いてやつたり」するのもこのためであらう。

また大正十四年政界隠退聲明當時同じ小犬養は次のやうに語つてゐる。「數日後に押かけて來た隠退防止の面々を、今から考へれば氣の毒であるが、僕は心からにくみ」萬事過ぎ去つた後のつゝましい平和をすら許さぬ徒としてにくんだのである」と。嘗つて文藝春秋誌上に「手習ひをやめぬ犬養木堂」と云ふ文章があつたが、

その中にも「翁がみち子さん——健氏の息女——を相手に戯れてゐるのをみた人が『まるで猫の子みたいになつてゐたよ』と評してあつた。

犬養現夫人千代子を中心にする清和夫人會等が政友會の基礎構造(?)をなしてゐるなどと云ふ風評もこの人間犬養の側面であらう。大宰相原敬の風格と比較して清和會のことを考へると一寸微笑を感じさせられる。と云つて人間犬養は決して弱くはない。森幹事長、鈴木喜三

郎と組んだ恰好は鬭犬群像の感さへある。

二、チャーナリスト犬養及びかれのイデオロギー

筆者の見解によると、かれは先づチャーナリストである。少なくともチャーナリスト的天分の多い政治家である。

かれがチャーナリストとしての世に知られたのは、矢立てを腰にさして西南戦争に従軍記者として活躍して以來のことである。

かれの「戦地直報一、犬養毅郵寄」なる文章は有名だ。簡明な従軍記事である。「本社より派遣せる戦地探偵人、犬養毅の實地目撃或は聴取にかゝる細報を左に掲ぐ、明治十年三月廿七日報知。實地の景況看客の耳目に新しきを信じ悉くこれを寫す」とある。

當時報知は郵便報知と云つた時代である。報知は町田を最後として八人の大臣を出してをり大隈、犬養、原の三人の總理を出したのもめづらしい。殊に記者大臣中犬養の新聞記者として

の活躍は最もすぐれてゐる。

「十年三月九日、旅窓の下に認む。この日風雨深夜に入りてまだ止まず一行を書する毎に黄沙池硯を埋め、墨汁爲めに澁る。蓋し、戦餘の塵灰猶撲々として收まらざる也」と。いゝ文章である。殊に十年四月五日の田原坂戦記は力が入つてゐる。

「彈丸雨の如く注ぎ來り、路傍の樹木に中り弗々として皆聲あり、特に官兵の傷を負ふて退き來る者に逢ふ。曰く子は誰ぞ。答へて曰く、新聞記者なりと。官兵は余輩の神色自若なるに驚き且つ教へて曰く子が服装に官の章なし、恐らく吾黨に誤り撃れん」。若き新聞記者木堂の高麗鼠の如き活躍ぶりが想見されるではないか！ かれは、しかし、單純な従軍記者ではなかつた。戦禍に對する素漠たる感情を催してゐる。

「四月廿日、古人新に戦を歴る地を記して千里蕭條として雞犬聲無しといひたるが、實に满目慘然として云……」と嘆ずる。「この間、最も盛んに賣れるものはスカイ（娼妓の方言）なり少しく姿色ありていはゆる鐵中の鏘々たるものを選ばんとせば前宵若くは拂曉より約せざれば得ず。その中等以下の者は一宵の間に臂は千人の枕に供し唇は萬客の嘗むるに任かす。故に貧

民の婦女ある者は醜美を論ぜず争つてこの救急の策に出ず、嗚呼、昨日血雨酷風の修羅道場に陥り、今日は醜態痴情の煩惱地獄に墮落す。皆前世の因縁乎」と。レマルクの西部戦線に似た戰場風景である。大木堂の文筆には非凡な觀察眼がひそんでゐる。小犬養が白樺派文士として、タッチのさわやかにして、感覺のすやかな新鮮さを以て鳴つたのも、此の文筆的遺傳と見るべきであらう。小犬養の「二人の兄弟」愚かなる父」等この諸作は小板垣の「自由黨異變」等が素人の域を脱せざるに比して、堂々文壇中堅の腕前であつた。唯小犬養が、その文筆をすて、秘書官政治家となつたことについては、筆者も少しく異見をもつがこゝでは觸れまい。

犬養木堂が、三菱の後援で東海經濟新報を出し、保護貿易主義を執つて、田口鼎軒と論戦を交えた。しかしこの勝負は學問的には田口に分があつたと見るべきである。また屢々述べた政界隱退決意のとき、かれは富士見の山莊、白林莊に籠つて明治大正政治史の執筆を志してゐる。かやうに、かれのチャーナリストとしての、また評論家としての素質は普通の水準を遙かに抜くものであつた。然らばその根據に横はるかれのイデオロギーはいかなるものであつたか！ かれが藩閥官僚の一大敵國として、ブルジョア・デモクラシーのために、鬭争したことは既

に周知である。かれがブルジョア・ラディカリズムの闘士としての數十年の鍛錬を今、宰相として發揮すべき廻り合せになつてゐるのも決して偶然ではない。しかしその役割は下向期に於ける保守的性を帯びざるを得ない。これは歴史的必然ではあるが、又何んと云ふ歴史的皮肉ではないか？

かれのイデオロギーの根幹は自由民権論にある。それに民族主義的傾向が結合してゐる。かれが内に藩閥官僚と戦つたが、孫逸仙黄興を後援して第一革命に至らしめるのもこの民族解放運動への理解と同情に出発する。

かゝる反藩閥的傾向は同時に反軍閥的傾向をもつに至る。かれの一年兵役論、師團半減の從來の持論はこゝから生れてくる。

大正十一年十月頃木堂縦談として、かれは次のやうに語つてゐる。

『軍備偏重を攻撃するのはいゝが、軍人を餘りいぢめるのは考へなければならぬ。……丁度毒藥のやうなもので、盛りやうでは藥にもなれば、毒にもなる。これを、どう云ふ時に盛るか？ 醫者の手際だ』とえらい鼻息であるが、今日にして思へば隔世の感なきを得ないではないか。

對支那政策にしても、對軍部態度にしても舊犬養に比し、新犬養は換骨奪胎別人の感なきを得ない。

若しその根本的のイデオロギーがもとのまゝで、行動のみが妥協的であるとすれば、それは餘りにあざやかなる韜晦であり、本質的に變はつたとすれば豹變も亦甚しい。

しかしかれの本質は多角的な面をもち、多彩な色調をもつ點が特長をなしてゐるから、一筋縄で律せられぬところがある。昭和三年頃であつたか、『實際にハンマーを握つたりくはを持つた人が澤山出て來なければいけない。いろいろの人の演説をきいたが労働者の演説ほど純眞なものはない、かういふ純眞さが議會に反映しなければ議會の健全なる發達は望まれない。』と云つた事がある。小犬養の「父を語る」の一節にも『私としては父を無産黨の黨首にしたかつた。あの枯淡な色を今の無産黨に植ゑて見たかつた。しかしそれには父は餘りに年をとりすぎてゐる。しかし私は青年として、また、文學者として暇さへあれば現代の若い人々が何を感じ、そしてどんな方向に動いてゐるかを父に語つてゐる』とある。安部犬養兩者を比較して見ると、この一節も餘り無理とも思へぬが、イデオロギーの點、その經て來た履歷等を考慮に入れなけれ

ば無産黨首もさう文學青年の望み通りにゆくものではない。たゞ、この事例なども犬養毅の多角性と變通性の一例になることは否み難いであらう。又此點こそかれのイデオロギーが理論的な一貫を缺きチャーナリスト的な器用さを持つとなすべきものである。機略犬養は、かれの自負に反し、遠く田中正造に及ばざるものだ。

三、かれの經歷

犬養毅、幼名專太郎。父は源左衛門と云ひ郷士であつた。父の時代に浪人したのであるが、祖父は備中庭瀬の板倉に仕へて儒者であつた。その遠き祖先は吉備津彦命の隨身犬養建命に發すと云ふことである。

十五歳のとき諸氏百家を讀破して寺子屋を開いたと云ふから、よほど早熟であつたに相違ない。十七、八歳から小田縣(岡山縣)廳の筆生となり、時の權令矢野光儀の知遇をうけた。廿一歳のとき十五兩を持つて、上京し英學を研究した。湯島の共憤義塾に入つて勉強した。當時の新人福澤翁に私淑し、慶應義塾に入學した。しかし貧乏で學資がないので、側ら報知新聞に

寄書してゐた。

かれが辭書を購ふ金がなかつたので、「短語の長さを物指で計つてその譯語を考へた」と云ふのは其頃のことであつた。また上述したやうに、明治十年西南の役が起るに際して、慶應を休學し報知新聞記者として、從軍した。戰場を縦横に馳驅してゐる中に、軍中にて赤痢にかゝりズボンの尻に大穴をあけて、のこのこ歩いてゐたと云ふことだ。

その頃かれは、軍人にならうと云ふ氣を起し、谷干城から何時まで軍人の世の中でもあるまいと云つてとめられたので思ひとまつた。戦争後歸京して再び慶應義塾に入つたが、卒業直前にどうしたわけか退學してゐる。明治十二年に至つて東海經濟新報社を創立した。同十四年に、同學の矢野文雄、尾崎行雄と共に官界に入り、統計院權少書記となつて働いてゐたが、僅々三ヶ月で大隈參議らと共に藩閥のために退官せしめられてしまつた。明治十三年には秋田日報の主筆として約一年間同地に住まつてゐる。

明治十五年改進黨組織さるゝや入黨して中堅となり、自來かれの波瀾重疊たる政治生活が始まるのである。藩閥攻撃と憲政擁護の旗のもとに奮闘しつゞけて來た。改進黨——憲政黨——

憲政本黨——國民黨——革新クラブ——政友會と政黨は幾變轉してゐるが、毎回當選して今日に及んでゐる。明治廿五年第三議會松方内閣彈劾上奏案賛成の處女演説以來議會内外の雄辯家をもつて知られた。

若かりし頃の犬養に岡山時代、名妓艶吉との間にロマンスがある。豊崎はまささんと云ふとりもち役の話に『先生は別に男前であると云ふではないし、金があるといふでもないが、どこか變はつたところがあり、氣前が非常によかつた。艶吉がそんなところに參つたといふわけだ。』と語つてゐる。かれの經歷には此外今岡山にゐる先夫人の陰鬱な物語りがある。しかし政治家としては此種の話は寧ろ少ない方で、苦學の話の方が出色である。さきにのべた横文字を物指しではかつた話しの外、慶應義塾時代の勉強振りの話しがある。それは福澤翁は十時消燈後の勉強を許さなかつた。それでこつそり卓の下にランプを持ち込んで、ゴザで光の漏れるのを防いで内職原稿をかせいだものさうだ。それも月六、七圓の収入であつたらしい。

夏冬ブツ通しの拾一枚、煎餅布圍一枚で、押し通した。食糧の如きも日一錢の焼芋ですますこともあつたらしい。それにしては、實に多趣味である。書家であり刀劍鑑定家である。かれ

自身貧乏の餘徳と云つてゐるが、矢張り才分の致すところと見なければならぬ。書は米元章、黄山谷の書風を好み、康有爲に感化さるゝところもあるらしい。刀劍の鑑定も亦一家をなしてゐる。その刀劍の買方と云ふのは犬養式である。

小犬養が語るやうに、『自分の欲しいと思つた刀には見向きもせずにあれこれいろいろ値をつける。一體父は刀劍に目が利くので商賣人でも父が値をつけるのを喜んでゐるのですが、イザ買ふ時になると抜き打ち的に、あれを買はうと見向きもしなかつた奴を取つて行くんです。だからいゝ刀を安く買つて集めてゐる』わけである。

またかれは隠れたる南洲研究家でもある。かれは『西南戦争を機として實際上の封建制度が崩れたのぢや。維新の革新は十年後の西南戦争においてはじめて成る』と語つたことがある。筆者も明治維新は新興ブルジョア擡頭を背景にした封建制度の自壊作用的な政治革新で、十年の役が新興ブルジョアジーの前衛たる鎮臺兵と反動的士族との戦ひで、これをブルジョア政治變革と見るべきものと考へてゐる。かれの場合は實際に事に當つて見聞し當時を経験せるだけ尊重すべき見識と思ふ。

四、宰相木堂

木堂會が成立した大正十一年四月、長野縣上田市で北信木堂會の發會式の時にかう云つてゐる。

『私自身は、死ぬまで決して悪事はしない積りであるが、棺を蓋ふて名定まるで他から見たら何う見えるかも知れず、また死ぬまでにどう變はるかも知れない。自分は無論信ずる所はあるけれども、他人は何と見るかも知れないし、若しも亦此先きに行つて變化でもしたら随分險呑なものだから、と最初は固く此名——木堂會——を辭退したのであるが、是非ともと云ふので其儘になつてしまつた。』と。

『またその趣意書の中に「高風清節」の四字を以て、私を賞讃して居るが、これは顧みて甚だ當らない。唯私の多少他と異なる點は昔から一貫した主義主張を守つて渝らないでゐると云ふだけであつて、これは高風清節でも何でも無い。當り前のことである。』と。

木堂のこの内省的持味は既成政治家中出色のものである。この言説は大正十四年の政革合同

二三年前のことでかれの行路に一抹の疲勞が漂つてゐたためであるかも知れない。この反省的な、批判的な態度は他人に對しても自己に對しても加へらるゝ。が、このよき一面は他の反面に於て政治的不活潑を伴ふ恐れがある。殊に當局者として無性者である缺點を引き起しやすい。端的に云ふならば政治批判者としての適性であるが、政治實行者としての缺陷となる恐れがある。實際最もよき批判者解剖者は最もよき實行者であり得る。卓越せる實踐家は拔群の理論家でなければならぬ。これは政治家の理想型ではあるが、現實にはこの二つの資格は分化し易いものである。而してわが木堂犬養は、ブルジョア的政治批判者としてほゞ及第者であるとは云ひ得るが、實踐家として、殊に宰相として適當してゐるかどうかは全く未知數に屬する。

若槻は分かりはいゝが實行力が弱く、濱口は實行力はあるが分かりがにぶいと評され犬養は兩者を兼備してゐるやうに傳へられてゐるが、果してさうであらうか？ 私はこれを遽に信じ得ない。中江兆民嘗つて犬養木堂を評して、次のやうに言つてゐる。(一年有半)

『犬養木堂、其狀貌を相るに精悍の氣盎然外に溢る。是れ定めて膽氣有る可し、其目光炯々たるを以てすれば、是れ定めて機智餘有る可し、然り而して其の自由黨と相追逐する。動もすれ

ば、先を制せられて、未だ大に氣を吐く有らず。惟ふに其人や、餘りに東洋的に、餘りに三國志的にして、事を事とせず、寧ろ晝眠以て三顧を待ち、寧ろ蝨を捫して主人を驚かすを喜びて、意地きたなく進取するを好まざる可し、然れども終に是れ得易らざる才なる可し」と。

兆民は木堂の無性癖、横着癖を指摘してゐるやうに思はれる。そして、この兆民の指摘する所は大體當つてゐるらしい。今日の狀勢に於ては勤勉な既成政治家は難局にあせり抜くにちがひない。かかる政治家は多くファツシヨ的傾向に向ふ。政友會内に於ても森格の動きは獨り角力の感はあるが、實に目覺ましい。これに反して宰相犬養は老武者の落着きと云ふか、生來の横着と云ふか、實に悠々たるものだ。幣原ならば、事毎に、几帳面に抗辯せずにゐられぬであらう場合にも、かれは風馬牛をきめこむ。小心な若槻が強度の神經衰弱にかゝるであらう時に、かれは注意力だけを炯々たる眼光にこめて懐手をしてゐる。行政家若槻、理論家幣原に對照して、かれはすぐれたる政機の把握者たる感がある。かれは急進的なファツシヨ傾向に對し反抗もしない。が、賛成もしない、靜觀に近いが何となく手段を藏してゐる。

先づ昭和六年末、協力運動の起れるときがこの態度であつた。ある批評家はあの一幕は久原

が安達をだましたか、犬養が久原をだましたかのどつちかでなければならぬと見る。が、問題はそれほどハッキリしたものでないところに真相があるらしい。少なくとも犬養は少しも自己をいつはつてはゐない。彼れははじめから單獨主義を明瞭にしてゐる。が、そこになんとなく一種の動かざる機略が藏されてゐる。昭和七年正月の内閣の進退問題のときもさうだ。殊に總選舉前一月末から勃發した上海事件に對する處置、滿洲新國家に對する處置は、少しも軍部にさからはないが、内心反對意見を藏してゐるやうだ。積極的には動かないで、拱手傍觀し乍ら、まとまりをつけてゆく。かれの宰相としての手腕は、この種の機略に於ては異様に巧妙なるものがあるを吾人は發見する。しかし、積極的に政局を動かし政策を施行してゆく力はどうか？此點甚だ疑問と謂はなければならぬ。それは必ずしも没落資本主義第三期では何事をもなし得ずと左翼的に達觀せる爲ではない。亦強く積極的に動けば自からファツシヨ化を強度にするこゝとなるからとて、これを避けてゐるためでもない。木堂自身の批評家的傾向と潔癖隱遁的傾向によるものではなからうか。

あるものは、木堂の態度を評して、出来るだけ永く總理をつとめればいゝと云ふ氣持ちだと

云ふ。總理や大臣の地位を双六の上りのやうに考へるのは政治家の共有性だが、木堂に此の通癖が現はれてゐるとすれば、筆者はその地位を保つことの却つて長からざることを感ずるのである。

政友會内閣に於て、いま高橋財政、芳澤外交を根幹とする犬養指導部に對する反感が鬱積してゐる。森格の動きがその一端を暗示する。平沼内閣説がその一つの現はれを示す。また鈴木、鳩山、森とリレーのやうに總裁をひきつがうとする所謂鈴木系に對しては、久原、望月、秋田らの對立勢力が拮抗する。かやうに政友會は今や上下關係に於ても、横の關係に於ても可成りの危機を孕んでゐる。此危機は、惟ふに、滿洲經營の困難が表面化し、産業五ヶ年計畫の實行難が具體化し、併せて恐慌深化が如實に痛感せらるゝであらう昭和七年末に、勃發する可能性が多い。

犬養首相はかゝる政治的趨勢に對して、いかに對應策をもつてゐるであらうか？ それは單なる個人的機略や、過去の政治的經驗だけで乗り切れる性質のものではない。

雨後の筍のやうに、わさもののファツシヨ小會派の簇生するに應じて、これを反動的勢力の

前衛としつゝいかに政友會のファツシヨ化が進行するか？ その進行の操舵者として老犬養がいかに處置してゆくか？ そしてかれはいかに議會的ファツシヨの指導的政治家たり得るか？ これが恐らくは木堂後半世のクライマックスであらうと筆者は觀察してゐる。かかる政治的段階に於ける宰相犬養の器がいま試験臺に上つてゐる。

しかしこの恐らくは最後の試練も、木堂がこれに合格すると落第するにかゝわりなく、大衆的には殆んど意義のないことである。否寧ろ成功した場合には、民衆的反感が集中せらるゝであらう。そして不成功に終はつた場合には既成政治家の後備役に編入され終はるであらう。

筆者はさきにかれを一つの短篇集であると云つた。しかし他面から見ればかれの政治的經歷は前篇及後篇の二篇から成る。わが資本主義政治史であるとも云へる。

前篇とは即ちブルジョア・ラディカリストとして、プチブル大衆から親しまれたかれの前半生であり、政友入黨以前である。

後篇とは政友入黨以來殊に首相の印綬を帯びて後を、やまとするその晩年である。後篇に於ける成功は、前衛黨たるプチ・ブルファツシヨとしての前篇の意味を決定し、後篇に於ける失

敗は脱落し、後退せる自由主義政治家の挽歌に外ならない。親しみやすき前半生と、いかつい後半生とが、交錯する。かれの傳紀史家は、この悲劇的要素と喜劇的要素を貫くかれの機略をもちあつかひかねるであらう。それは奇妙なるコンビネーションではあるが、わが資本主義の上向及下向の必然性を背後にもつのである。たゞ、筆者が前篇のみの愛讀者であることは云ふ迄もない。(1932.5.2完稿)(この稿は五・一五事件直前に書いた。)

犬養健の木堂觀

犬養木堂翁は人氣の人である。いゝ意味にも、わるい意味にも、人の注意を引きつけて離さぬだけの魅力がある。

その大選舉區比例代表案の主張、陸軍々縮の根柢など政友會を革新黨化するのではあるまいかといふ意味でセンセーションを起させると又一方、解散をのぞむものは『無産黨と安達位のものさ』などと空うそぶき平氣で解散回避に組し、多數を喪失せずして近く臺閣をねらう老膽さに見らるゝ、悪い意味に於ても凄味がある。

この兩方面は一個犬養翁のみの關心事ではなく、我國保守黨政治の將來の岐路を髣髴せしむ

るもので、問題は一般の關心事でもある。

まづ政友會を保守黨と見る。堀切氏や島田氏の自由主義へ還れの主張の存するのは政友會に流れる一脈のゆかしさではあるが恐らく大勢を支配するだけ優勢ではあり得ないであらう。そこで政友會は保守黨であると見るが、さてその將來が田中大將時代にその片鱗を見せたやうなフアツシスト的反動政黨となるか、或ひはボルドウィン流の新保守主義、進歩的保守主義をとるに至るか？ 此問題が將來に横はつてゐる。兩者とも程度の差に過ぎず、ボルドウィンでもフアツシストとは結局に於て云へても、現實の政治には可成りひらきがある。

犬養翁の性格的人間の人氣が、此の將來の保守政治の様態に關聯する公人としての、爲政者としての、人氣と錯綜混和して焦點に集中されてゐる。

※ ※

馬場恒吾氏の人物評、河野密氏の犬養木堂小論等々讀みごたへのある木堂評が少くない。東朝紙に連載された犬養健氏の『父を語る』——好奇心に答へて、——はその最も生き生きしたものである。人間木堂が浮彫りのやうに描かれてゐる。革新クラブが政友會に没入した際の印

象を起して、『僕は隱退の聲明を發表した折の父の顔をよく覚えてゐる。父は床屋に行つて久しぶりに髪をかり、木堂の書が骨とう屋で暴落したといふ新聞記事を讀みながら僕を省て冗談をいひ、さも空腹に堪へぬやうに晝飯の茶を頼張つてゐた。いかにも肩を下した子供らしい様子であつた。僕は著述家の直感力をもつて信じたのである。僕の父はこの瞬間全く政治を斷念したのである。金のための政治を斷念したのである。僕の歎息は深いものであつた。あのやうな歎息は一生涯二度と經驗することはあるまい』(前出)と。

※ ※

文藝春秋の筆は『手習ひをやめぬ犬養木堂』のなかに、翁がみち子さん——健氏の息女——を相手に戯れてゐるのをみた人が『まるで猫の子みたいになつてゐたよ』と言つたと叙してゐる。愛孫に絶對的に溺愛してゐる人間木堂が、息健氏によつて、かくも思ひやり深く當時の苦境のさまを描かれてゐるのは偶然ではない。そして木堂の此の一面が木堂會を成立せしむる理由でもあり、子分に引かれて政友會入りをするやうになつた原因でもあらう。

※ ※

けれども健氏の云ふ様な革新クラブの没落理論は一應は成立する。即ち既成政黨ともつかず無産政黨ともつかぬ過渡期の自由主義政黨が『極めて自然の法則に従つて』解體する——そしてその結果が改革合同であつたとする考へ方は根據がないではない。

しかしその際考へられる問題が二つある。

その一つは革新黨があゝの形ち——兎も角二十人前後の所屬議員をもつては存續し得ない状態であつたからとて、二、三人の小團體としても存續し得ること明瞭である事。

その二はたとへ革新黨が没落すべき命數にあつたとしても果して政友會へ没入することが妥當であつたらうかと云ふこと。たとへ從來の國民黨の大分裂、桂公の同志會との對立關係があつたりして、成り行き上自然であつたとしても此の事は問題であつたらう。

はじめの點に關しては關、大竹、清瀬氏等の殘留組がその可能を明證してゐる。そして、此際翁が何故此の態度に出でなかつたか、疑問として否遺憾として殘されてゐる。何故ならば二人でも革新黨は明政會などちがつて創業時代の自由主義の力を感じしめ、革正運動等で可成りの役割りをもち、レーゾン・デ・エトルをもつてゐるからだ。

第二の點は右ほど重要ではないが、政友會の岐路として現はれ、今日に至つて忽然として具體的になつて來てゐる。

そこで二、三人の小黨としての存在理由を認めることにより小修正を加へつゝ、健氏の革新黨没落理論を容認するが、それが直に政友への没入を肯定する前提とは考へない。

だから翁の隱退の決意は理義の上から當然のことであり『さればこそ數月後に押かけて來た隱退防止の面々を、今から考へれば氣の毒であるが、僕は心からにくみ』萬事過ぎ去つた後のつゝましい平和をすら許さぬ徒としてにくんだのである』と健氏は叙してゐる。そこで翁の入黨事情は秋田氏等をはじめとする子分の活路のための情誼に基く行動と見る可くその外の何もでもないと云へる。

※

※

『ひさしを借りて母屋を取つた』などと下等な説明をしたがる世間の犬養びいきを健氏が排拒するわけも翁のこの眞實な姿を直視したればこそである。

中江兆民居士の寸評に『三國志的』なりとあるは『自由黨と相追逐する』際に『動もすれば

先を制せられ」ることや『事を事ともせず、寧ろ晝眠以て三顧を待ち、寧ろ蝨を捫して主人を脅かすを喜びて、意地きたなく進取するを好まざる』結果を生むだけの意味ではない。寧ろ新野徐州に守りを失した劉備が孔明のいさめを用ひず號叫追隨する十萬の百姓と共に行を共にし、總敗軍の亂軍中に死苦を味つた趣きを指示するものと見る方が面白い。

古島古一念が孔明の達識を以てしても、なほ革新黨の俗流を制し得なかつた點が注目し得るであらう。

※ ※

兆民居士學堂（學堂）を評して、

『尾崎學堂の進歩黨を去りて政友會に入るや、他に意識有りたる可きも、外より之を察すれば其入閣に急に和して、先年共和演説の餘毒を拂拭するには伊藤侯天寵の渥を慕ひ、侯に頼り以て身を立つるに如かずと慮かりたるものにて、其露と謀を連らぬる云々は、特に一時世人を瞞着せしに外ならざりしと、此想像にして眞に近き乎』と。今や尾崎翁晩節全く湘南に悠々自適、秋ありて猛然虎威を示す、しかし犬養翁獨り非難に價し、尾崎翁之れを免ると見るのは皮相の

見である。居士のこの寸評はこの意を諷するものである。しかもなほ今日に於て犬養翁の行藏が多少の非難あるは全く一つに子分の有無に歸着するであらう。

蓋し兩翁の如きは自由民權の舊き指導者としてその操持の最も固きものであることは——永い間には多少の誤謬があつたにしても——何人も疑はぬところだからである。

※ ※

河野密氏が何ほどの『操守』を有ち『理想』を有ち『信念』を有ち……そしてまた情に流され、野望に歪められながらも、尙蔽ふ可らざる人間的な『高調子』に犬養木堂の政治的の全生命があると云ふのは當つてゐると思ふ。

氏も『今日の日本は決して策士を要求してはゐないのである。もしも犬養が一個の策士に過ぎぬと分つたならば、たれしも猛然起つて排斥すべきである』と謂ふ彼此の言は方に一貫した論旨に歸着するのを發見する。

※ ※

併し乍ら翁を昇ぎ上げた政友會は、惡名除けの護符を頂くに似てゐるが、『資本主義の無政府

的狀態』なる言葉をそゞろに想起せしむるものがある。

無政府的混沌を翁がいかにもリードし乗り切つて行くか？ 臥龍ついに昇天す可きか、鳳雛と

共に地に墮つ可きか。

三國志的興味を感じざるを得ない。(1930.1.17稿)

伊澤多喜男の政治的立場

一、時局と伊澤

伊澤多喜男は齋藤内閣成立に就いて、黒幕の人として、随分暗躍した。驚くべき鮮やかな手捌きであつた。伊澤一人で内閣を製造したやうに見るものもある位だ。内閣製造の神様と云ふものもある。

政治の表面と裏面ほど複雑に錯綜せるものはない。政治の表面は、水面に浮く氷の八分の一か九分の一位の分量しかない。殊に日本のやうに封建的要素や、ブルジョアの本隊や、プロレタリア的分子が入り亂れてゐる政局に於ては殊にさうだ。封建的ブルジョアの分子の精鋭分子がファッショ化し、プロレタリア層の一部をも巻きこんでゆく現状では益々紛紜を極める。

伊澤多喜男は自他共に許す官僚だ。第一次山本(権)内閣のとき縣知事を務め、大隈内閣で

警視總監、加藤（高）内閣頃臺灣總督をやつた。かれの、表面的經歷の主なるものはこの位のもので、あとは殆んどコーカス（黒幕政治）の人として働いてゐる。民政黨員ではないが、黨外シムバ委員長格で何くれとなく世話をした。

だから、かれは官僚と云つても、純粹な官僚ではなく政黨の外廓的地位にある。云はゞ民政系官僚だ。ブルジョア政黨と結盟せる官僚の錚々たるものだ。

五・一五事件以後、新内閣のゆき惱んだとき、かれは決然と起ち上つた。平沼内閣と鈴木政友内閣を左右に切つて落すべく、かれは山本（權）内閣と齋藤内閣の二つをつぎつぎに考案した。齋藤内閣の一石よく二鳥を落して平沼、鈴木共に蹉跌せざるを得なかつた。このゆき方でわかるやうに、かれの政治的立場には一つの基準がある。それはフアツシヨの色濃き内閣に反對すると云ふことである。かれは、平沼ほどの奸雄はゐない、平沼内閣が萬一成立すればその翌日から倒閣運動を起すと豪語した。これを他の半面から見ると、政黨政治擁護と云ふことになる。けれどもかれの政黨政治擁護は、鈴木をやつたやうな單一無垢なゆき方とは違ふ。そこに多分に官僚的機略を藏してゐる。つまりかれ個人の政治的屬性をそのまゝ反映して、政黨に官

僚をプラスした内閣で行くと云ふ両面をもつてゐるのである。その上、民政黨本位である。だから民政黨に官僚味をつけて、政友會をも押へやうとする。純粹な政黨擁護ならば、護憲三派運動のやうに、政友の單獨内閣主張を支持する方向に民政黨を引張つてゆくのが正道であらう。かれのコースはかやうに迂餘曲折してゐる。こゝにかれの政治行動に於ける多分の主觀性が見出されるわけである。それは主觀的な時局觀とその對策とも云ふべきものであり、また同時に、自身の性格的主觀性とも見られる。

性格的な、餘りに性格的な官僚政治家！

二、伊澤の政治的風格

かゝる政治的風格は、一面、縦に深味のある人間的風味をもつものである。

三高（もとは高等中學校と云つた）時代からの親友濱口に對する情誼と友情の如きはその死に至るまで續いた。創痕なほ癒えぬ濱口の議會登院を心配したかれの友情を人は知つてゐる。又不遇なる友人下岡忠治に對する助言と云ひ、反對黨原敬との靈犀相通する知音の如きも亦、

かれのよき一面であつた。又、黨政治に對する官僚系同情者としての自覺は、大臣病多き政黨員の間にあつて、大臣にならぬ方針を貫いて來たことは珍とすべきである。實際大臣になる機會は一度や二度ではなかつた。加藤(高)内閣時代、若槻第一次内閣のとき、濱口内閣のとき、又最近齋藤内閣成立の場合等々がそれだ。尤も齋藤内閣のときは伊澤か湯淺倉平が入閣するから協力は御免だと政友會が頑張つた。ゆめ入閣は事實上出來なかつたかも知れない。が、かれにその野心があれば、組閣本部にそんなら政友の協力を謝絶しろと云ふ硬論もあつた程であるから、無理の利かぬこともなかつたらう。

濱口内閣から第二次若槻内閣への過渡期に於て幣原首相代理擁立を率先してやつた。ゆめ、一部からは、これは安達總裁運動の押へだけではなく、内相をねらつてゐるためだと考へられたことがあつた。黨人系に對する反對、官僚的な人間評價がかれの肚裏にあつたことは否み難いが、内相になりたかつた。ゆめと見るのは、上述したかれの態度から考へて、誤りであると思ふ。だからかれは大臣病ではない。この觀察は公平に見て正しい。が、かれは大臣製造病であつた。

かれの政治家的風格のよき方面は、狭いけれども深い友情、大臣になりたがらぬこと、そして又金錢に淡泊なことである。かうした點がなかつたらいかに痛酷な手腕を藏するかれであっても、政局を引きまはすだけの信用を得る筈がない。さきに云つた通り、民政系を引具して山本(權)擁立で鈴木、平沼と闘ひ、薩派が却つて齋藤に傾くや、これに合流して一舉に大勢を決したばかりではなく、齋藤内閣に犬馬の勞をとつた財部、丸山達よりも遙かに多い發言權を握つて、山本(達)を内相に引き出し、直系の後藤文夫をその風袋として割込ませたなどは過半かれの働きであつた。山本(達)が閣員の顔觸に不平で二の足を踏んだとき最も引とめに努力したのもかれであつた。

けれども、かれのよき一面は同時に、他の半面に於て決定的の缺陷を暴露する。人物評價の標準が主觀的であると同時に官僚臭味を伴ふ。政局觀察が達觀的な廣袤をもたずに、權略的な狹隘を示す。必然の大道をゆかしめずして、權道の危路に導入する。

かやうな缺點は客觀的には、許し難い存在となる場合が多い。こんどの場合でも、先づ第一に鈴木を進路をふさいだ。鈴木の蹉跌したのは、かれの責任と云ふよりも軍部との抗争が主要

原因であるが、出来上つた内閣の製造者が伊澤であると云ふことになる、鈴木系から一番恨まれるのは軍部よりも伊澤と云ふことになる。また第二に安達の入閣を拒んだ。協力主義の時代になつたのだから、公平に見て、安達を入閣せしむるのが當然であつた。丸山らの積極的主張があり齋藤もこれに傾いてゐたのに、若槻は此點に釘を打つてから、それでは入閣の相談に應じようと云ふ態度に出てる。昭和六年末の協力運動が若槻内閣を斃したことは云ふ迄もないが、この民政黨の黨利的な考へから協力主義に手加減するのはをかしい。また第三に、民政黨内の政黨人の主張を可成り無視した。また第四に官僚系の優秀分子たる永田をはみ出す結果になつた。湯淺は伊澤も極力推薦し、齋藤も伊澤よりも、この人の方をより多く信頼してゐたが、これは湯淺の頑張りで實現しなかつた。

かやうな幾多の無理を伊澤一人に歸するのは、これまた無理であるけれども、その何分のかの責任はかれに負はされる。またかれの躍動がめざましくそのきまり手が水際立つてゐただけに適當以上かれのせいにする傾きもある。縁の下の力持ちと云ふものは損な役割りである。およそ政治は權力に關係する。大小ともに權力を中心にして動くものだ。

ところが、大臣と大臣製造業とどつちが權力的であるかと云ふと、見方によつては、大臣製造業の方がずつと權力的だ。大臣は權力の淺表性を、製造家は權力の潜伏性を代表する。それぞれ權力の別途を見せるものだが、潜伏性の方が底力を感じさせ、過大にも見積られる。だから、大臣病は無邪氣で稚氣があり、大臣製造病は底意地で霸氣がある。従つて、大臣病の方が權力病として治癒し易くもあり、病狀も軽く、製造病の方が潜伏的で根治し難く病膏盲に入つた方だ。それは企業家や生産業者の方が商人よりも資本家のお本尊なのと同斷である。

實際、誰れが見ても、若槻男爵よりは、平民宰相で押し通した原敬の方が上手だからなあ——と云ふわけ合のものである。

そこで、わが伊澤多喜男がどう云ふことになるかと云ふと、——恨まれることになる。政友會系は、口には出さぬがあれあ邪魔をしたとにらむ。安達系も伊澤が、と内心考へる。民政黨員でも大臣や次官になり損なつた組は不平を伊澤にむける。原(修)は俺に一言の相談もなかつたと、ハラを見せてしまふ。推薦された大臣でも、餘り、伊澤系伊澤系と云はれるといゝ氣持しがしない。感謝はするが變な氣持にもなる。沉んや選に洩れたり、入閣のあての外

れた官僚系は無視されたと思ふ。

殊に一本氣の少壯急進者は、勸告者を送らねばやまぬ。

と云ふわけで、一種のソウスカンを喰ふことに歸着する。もともとから貴族院當りでも、かれが黨臭あり、潜謀家と云ふことから、殿様の間でも警戒されてゐた。その上、かうなつてはいよいよ四面楚歌に圍まれた形ちだ。

しかし、かれも亦一種の見識をもつて立つ政治家である。幾度か大臣をことわり、身は一個の貴族院議員に甘んじてゐる。そして、自己の才幹を過少評價して、自から陰の人たる本領に立つて、有能な傑物を助けてやらうと覺悟してゐる男だ。この位るの批難にへこたれることもあるまい。かれは今後もこの流儀で押し通すかも知れない。幣原隱退し、濱口、井上斃れたる後民政黨官僚の優秀分子は殆んどなくなり、かれ一人孤壘を守つてゐる。桂、加藤(高)仲小路、下岡、後藤(新)大浦の大先輩以來の官僚系圖も次第に下ぼそりになつてゐるとき、かれの苦衷も亦察すべき點がある。殊に政友會官僚は水野、川村(竹)はじめ殆んど黨内に消化されてゐるから、民政系官僚は官僚自體の最後の生き残りである。

だからかれの政治的風格は、歴史的存在たる點に特長がある。

三、處士横議・策士縦横の時代

フアツシヨが急進展し、ブルジョア政黨がひた推しに推されてゐる。その間隙に白馬の逸過するが如き鋭どさを見せて、政黨と舊官僚を結びつけたのが、かれ伊澤の大仕事であつた、がその役割は時代の進展をすゝめることになつたとは云へぬ。一寸牽制した形になつてゐる。それは歴史を進めるものでなく、それに巢喰ふものであつた。

しかし、この歴史進行の現段階は好ましいものとは云へない。そして盲目的意思の陰暗なスツルム・ウインド・ドラングの裡に、遠い將來の曙光を見失つてはならない過程であると云へよう。それは「行爲」自體があらゆる種類の合理主義を破碎しつゝ進む時代である。

乍併この進行に對して、將來の見透しからはなしに、過去の政治的慣行から作爲し加工せんとする企てはおよそ無益である。況んや自己の政治的、社會的立場の本質を少しも阻碍するものでなく、却つて、修正し強化するものである所の進行に對して、官僚的小刀細工を加へる

ことは、矛盾である。現下政局の處士横議と策士縦横の多くは、この種類の細工に屬する。わが伊澤多喜男の動きもその最たるものゝ一つである。けれども、かれ一人の舞臺ではない。その多岐多種なること今日の如きは一寸類が尠いと思ふ。

齋藤内閣成立が三菱政變であるとすれば、五・一五事件直後の牧野（伸）、岩崎（三菱）若槻らの會見はその重大契機であつた。その筋書きの作者が最もすぐれた裏面的人物であつたと云へよう。それが伊澤であつたか、どうかは寔聞にして知らないが、少なくとも、同系統の人物であつたと見られる。

民政系、三菱系を中心とする一群の勢力は、その背景とする政客伊澤等の出沒によつて、將來もなほ一陣容を形成する。これに對する内部的對立物として、安達復黨運動参加により、將來、狭量の幹部から白眼視される危惧のある小泉、松田、小橋、鈴木、野田、野村の一派がある。

政友系、三井系も亦同様の立場にある。協力主義の旗の下に、政友會所屬を失念した感ある高橋藏相は床次、三土、望月、岡崎の支持をうけてゐる。これに對し幹部派鈴木系が不満なる

ことは云ふ迄もないが、急劇に高橋除名を斷行することの不利を知つて自重してゐる。これに反して、急進的な態度を持って、高橋離黨勸告等を主張するものに森一派がある。森恪はもと鈴木系の前衛闘士であつたが、政變後の立場は軍部に近く單獨内閣に反對した。そのため鳩山と正面衝突し、鈴木とはそれほどわるくはないが、鈴木の下に動くものとは云へない。急迫せる時局に敏感で、國民窮狀匡救運動にすゝまんとする。これには少壯議員や農村議員に傾倒するものが多い、かれらはその手はじめに高橋糺弾、内閣破壊の一路を往かんとする。

秋田清はいま、議長として自重的態度をとつてゐるが、望月等との舊來の關係は存續せるものと見るべく、此派のために活躍した場合にはその謀士振りも鮮かなものであらう。そこで政友會は、鈴木鳩山系、高橋床次系、森一派との三派鼎立し、臨時議會を機縁に活潑な動きを見せるかも知れない。

民政黨では、上記した如く、伊澤の外、丸山、後藤（文）らの新日本同盟の一派、又は、本陣の永井、小山（松）等が控へてゐる。しかし民政陣では、その黨部に於て闘士謀將の品切れの形ちである。安達復黨派の中堅分子の多くは休黨状態である。

更に國家社會黨、日本國民黨等の赤松、平野、下中等も凄味を見せてゐる。

ところが、こゝに見免せないのは、小泉（策）式の浪人政治家である。小泉が比喩のない知謀と機略を藏してかれを中心に浪人の往來繁きことは知る人ぞ知るが、その素志とねらひどころを掴んだものはゐない。しかし一鼓して立てば風雲をまき起す祕術の士である。豪放大川周明は蹉跌したが、もと同系統の安岡正篤は丸山、後藤、吉田（茂）、等をつらねて金鷄學院閣をつくり、官邊、重臣間に獨特の存在となつてゐる。又農民運動の長野朗も亦一個の存在である。

これら浪人政客の中、秋山定輔の名も逸することは出来ない。長島隆二等政界の不平組を集めて虎視たんたるものがあり、坊間傳ふる所によると三A同盟を結ぶと云ふ。三Aとは秋山、安達、荒木三者で、來るべき内閣の準備であるさうだ。しかし三角同盟にしては秋山の一角が弱すぎるし、又その眞偽のほどもはつきりしない。むしろ新黨系では、中野、山道の劃策が最も中樞的動力となると見るのが妥當だ。しかし此一派にも、大塚（惟）等の官僚優秀分子の支持がある。

國本社系は、軍人を除けば政客の見るべきものは尠い。が池田（三井）等が、政友會だけで

なく、これにも加入して會員であることを忘れてはならない。

合縦連衡の祕策亂れ飛び、政局はこゝのところ、戰國策一卷を必要とする。しかし、處士、謀士いかに多く、且つ錯綜纏綿を極めても、大勢を決するものは客觀的の動きである。農・民都市中小商工業者、労働者の問題と、滿洲問題との關聯並びにその歸趨がこれを決定する。時潮に乗れるものは勝ち、遅れたるものは破れる。

伊澤多喜男よくこの時流を突破し得るかどうか？ 幾多政界有志と共に、動亂期政局のオリムピアードはいま始まらうとしつゝある。

かれも亦一個の存在である。（1932.7.10稿）

政界ダーク・ホース論

一、ダーク・ホースの變遷

藩閥官僚が明治時代以來政界のヘゲモニーを握つて、自由民権運動の大濤に押されながらも永い間その地位を保つた。大臣たり宰相たるものは長閥か暮づるに限られたのがこの時代であつた。直接のお連枝でなくても、何かの因縁をつけて此の枝幹にからみついてゆく薫かづらのやうなゆき方をしなければ陽の目を見ることが出来ない。長の山縣、桂の系統、薩の大久保、松方の系統と云つた調子であつた。ところが長の伊藤博文が自由黨と結んで政友會をつくと共に藩閥政治の一角は急角度で民衆的勢力に近づいて行つた。殊に大正政變のとき桂が同志會をつくつて政界に飛び出すに至つて、長閥の殆んど全部が政黨と妥協するやうになり、藩閥政

治は事實上解消するに至つた。嚴密に云へば、ブルジョア政黨が封建的勢力の一殘存勢力たる官僚と結んで、ブルジョアジー官僚の政治的同盟を結んだと云ふことになる。

そこで明治大正を通じて多年、政界のダーク・ホースとして瘦我慢をしてゐた政黨人は俄然政界の表面に躍出して、わが世の春にめぐり會つたわけである。そのエポックをつくつたのが原敬の内閣であつたらう。太宰相になるまでは、まだ貫祿がどうかなど云はれたこのダークホースもなつて見るとたいしたもの、閣僚の椅子をきめる手際からその冴えを見せた。今は中耳炎で隱退の形になつてゐる中橋徳五郎もその時まではバリバリの元氣で、椅子に文句をつけたのを、電話一本でいやならやめとけと云つた調子で豫定の椅子に坐はらせたのが原敬のやり方であつた。

薩長政治時代、福澤諭吉らと明治政府轉覆の陰謀をやつたと云ふ嫌疑で永い間早稻田翁として名物化してゐた大隈が憲政會を足場にして大正の大宰相となつたのも、原敬のちよつと前のことである。

長州系の政治家は時流を洞察する才智をもつてゐたゆめか、伊藤、桂を先達としていち早く

政黨と結んだ。これに比べると薩摩系の政客はモーションが遅くとり残された形ちであつた。今日に於ても五、六十名に達する貴族院薩派の一團が政變毎に動きまはる程度で、餘り見るべきものがない。政友會一方の重鎮たる床次がいつも見透しがつかず政黨巡禮の疲れを休めてゐるのはまだいゝ方である。薩派中床次より人望のあるらしい樺山資英の如きも温順の資質をもち乍ら牙えを見せず、日魯漁業あたりの世話役をおつつけられてゐる。齋藤内閣出現のときでも薩派の大御所山本權兵衛があれだけの呼聲のあつたのに、この火の手を消しにかゝつたのはむしろ薩派の人々で、その意味は翁を西園寺元老の後継者たらしめんとするにあつたと云ふから驚かざるを得ない。

かやうに政黨時代に於て巧拙さまざまなゆき方があつたにせよ、官僚系統は次第に衰頽し、政黨官僚のみ顯位にありついた。政友會は歴史が古いだけに官僚がよく政黨に消化されてゐたが、憲政會民政黨は改進黨の明治インテリ黨だつた關係と、官僚政黨人妥協の年月淺きために、黨中樞部に優秀な官僚が蟠居してゐた。或ひは同志會成立そのものが桂の國民黨割取により製造されただけに政黨人がむしろ受身の立場にあつたゝめと見られよう。

二大政黨時代は、藩閥時代のダーク・ホースたりし政黨人の時代で、官僚の殘存物が暗黒面にはみ出された。

ところが、昭和六―七の年の政治の變局に當つては、漸やく舞臺が半轉して、官僚の乗すべき間隙が多くなつて來た。現首相齋藤實にしても、大命降下の瞬間までダーク・ホース中のダーク・ホースであつた。かれの陣營には政黨もなければ、直接かれの歸屬する結社も、藩閥もない。しかもなつて見ると、堂々たる内閣首班である。

此の空氣を醸成したものは在野浪人を中心とする中間層、ファッションの急進勢力であつた。が、此の勢力は政局を廻轉し切るまで成長しないで、これを半轉したにとゞまり、殊に五・一五事件以來その動向が阻止された。従つて官僚系、後豫備政客がファッションがひの超政黨主義、舉國一致論で波亂の政局に危なげながら泳ぎ出て來るのである。まさに政界ダーク・ホース時代が現出されつゝあるのはこのためである。

ダーク・ホースは政黨、官僚、ファッション鼎立の現勢に於て、その各々の脚柱をめぐつて、三々五々薄氣味のわるい堂々めぐりをしてゐる。

そのいづれが、目的を達するかは観客に分らないばかりか、その雑群中の當事者にも實は分つてゐない。政局推移が現に二大政黨交代の軌道を外れて、無計劃性を顯著にして來た。それを内閣の無政府生産と云ふかどうかは知らないが、右の三脚勢力のコムプレクスできまるだらうと云ふ以外の方法がなくなつて來た。

歴史的に願望すればダーク・ホースは專制期、藩閥時代、政黨時代を通じてそれらの種類・型態をもつてゐた。そして現在では、統制力の強いファツシヨ政權未到の段階で、從來各種の政治勢力が相剋し、提携し、錯綜しあつて、ともかく政府をでつち上げて行かうとしてゐる状態である。従つて、各種ダホ政客の滯貨時代であり、又いつ兌換されるかどうかのわからない不換紙幣政客のインフレーション時代でもある。

およそ政界ダホは競馬で云ふアナをあてたときに投機價值も一番多いわけで、觀衆は、その興味に牽引されざるを得ない。従つて偶然性が非常に多いのである。ラグビーのプレーに見るやうに密集からはぢき出されたボールが俄然ダホの手に入らぬものでもない。が、その球をもてあましてタツクルされてしまふ場合がある。嘗つて明政會もこれに似た場に置かれた。これ

をスリークォーターのショートパスでトライまでゆき、またはF・Wの集團的ドリブルでゴールに達する場合は、偶然的に見えた球が生かされたわけだ。

兩派がガツチリと押しくらして明大チームのやるやうなスクラム・トライを政友會がやり得るかどうか？ これは必然性の多いプレーのやうなのに、今の政友會には偶然性にしか期待し得ないとも見られる。……と云ふわけで、ダホ戰術に於ける偶然性と必然性の問題は樂に解決出来ることではない。

齋藤内閣成立の場合は上記した如く非常に偶然性であつたが、さて一度組閣して今日までのい、來て見ると、平沼内閣その他のより強力な内閣よりもあたりさわりが尠い。政界に於ける動、反動、陰謀、陽謀のさ中に於て、一度大波動を起せばその振幅は益々大となる危惧のある場合に、なさざるどころなき人物よりも、なすところなき齋藤の方が適任であつたのかも知れない。大衆の満足に價すると云ふ意味の適不適は此際全然問題外で、ブルジョア政界のセキユリティーから見ての話であることは斷わる迄もない。

齋藤首相は、犬養式に向ふ張りの強氣がなく、若槻流の弱腰でもない、じつとりと坐り込ん

だかれ特有の重味をもつてゐる。だから、ダーク・ホース押へにはもつて來いのはまり役と云へよう。

かれを推した元老西園寺の達識を昨今ほめるものゝあるのは、そのためである。左、右、中間ともに時局に満足してゐる者は殆んどないと云つていゝ位だのに、この不平が時局に對する不満の聲となつても、かれを痛罵する怒聲とならない。この點は田中義一の場合と正反對をなしてゐる。

しかし暗流は依然として潜流してをり、各種暗躍、陰謀も根絶し得ないかも知れないから、明暗の政相は今後なほ注視に價するものがある。

第一、第二、第三と色々の文書も亂れ飛んでをり、その目標は多く次期政局擔當者を中心にそゝがれる。だが、神武會以後擡頭せる明倫會の新運動等も多く立憲政治修正の方向を示し、従つて急進ファツシヨ傾向よりは現内閣類似の舉國內閣運動がいま政界の大勢をなしてゐる。

二、ダーク・ホース列傳

宇垣一成は平沼騏一郎と共に、斯界の注意人物の筆頭にある。反宇垣運動の盛んである所以は、勿論、昭和六年三月以來の宇垣の行動を問題としたからであるが、その主なる原因はかれの政治的地位が、從來よりは稍有利に展開し來つた感あるがためである。某重臣を中心にする薩派一部の宇垣擁立説や民政系の櫻内、頼母木、伊澤、貴族院の青木、渡邊らの運動があちこちに取沙汰されて、ひところの平沼内閣説の如く、相當有力視さるゝにいたつたゝめである。

しかも在野在朝の急進的傾向を制御して、所謂軍部統制方針の次第に成功するにいたれる事情や、豫算案の成行等は、荒木系に對する宇垣の立場を多少有利に導き來ると見る觀察も行はれてゐるから、宇垣反對の氣勢が、從來通りだとは斷定出來ぬと云ふのが、宇垣擁護派の思惑かと想像される。

しかし、一方の畫策者たる富田幸次郎も一先づ民政復歸と決定し、國同揺れも一段落となつて、民政黨情も小康を得るに至つたゝめ、宇垣擁立の火元もそれほど熾烈ではない。又齋藤支持の薩派一味が宇垣支持に無理をする筈もなく、貴族院一部もたいした原動力とならぬと見れば、依然政友の反對と、人材を人的に結成せる荒木系の反對とを重く見なければならぬ。由

來ダーク・ホースは風評だけでもせよ、棚ざらしになると、その凄味も實現可能性も薄れて來るものだ。中にはそこをねらつて、反對派のものが喧傳して歩く場合すらある。頂度競賣屋の心理の如きものだ。

平沼も政友幹部派、元老、民政等四面楚歌で呼聲が次第に低くなつて來た。またボンと叩いて外の値段が叫ばれるまでにはなつてゐないが、その派の政治的策謀者たる白上祐吉の蹉跌以來とみに陣營寂寥を極むるに至つたのは事實である。殊にその政治的才幹はいゝ意味では試験前だと云ふが、わるい意味でも未知數として疑問を抱くものが多い。少なくとも特種機關たる司法部で人生の大半を過したものの、政治家的資格は特別の偉材でない限りものずきに試験して見るべきものでないと云へよう。

政友總裁鈴木と、民政總裁若槻はダーク・ホースとは云へまい。鈴木は、絶對多數黨の首領として單獨内閣説を把持してゆづらぬのはさもあるべきことで、野田蘭藏、菊池中將、又は森恪の平沼||鈴木結合運動に靡かなかつたのも筋が通つてゐる。政局通の一部ではその態度を頑愚と評するが、元老、軍部、一般の氣受け等を可成り省察した結果かも知れないと思はれ

る。

理義に忠實ならんとする若槻も齋藤内閣成立のときは頗る曖昧であつた。政權が必ず鈴木にゆくと見られた頃鈴木内閣こそ至當と云つてゐたのを狀勢が變はつてからコテ塗りしてしまつた。加藤高明ならかう云ふ態度をとるまいと云つた人があつたが、その通りかも知れない。民政黨總裁として統制力をもつてゐたのが濱口雄幸までと斷定するのも速斷にすぎるが、現在民政黨の活力がむしろ黨外の伊澤、後藤、丸山の一角にある事實は否み難い。

安達謙藏去り、井上準之助兇彈に斃され、江木翼逝いて後、民政黨内にダーク・ホースの骨力をもつ者は絶無と云つていゝ位だ。永井は博辯宏辭を以つて鳴るが銀鞍白馬組に屬する。

政友會には永井と似た立場にある明朗寛達な鳩山の如きもあるが、亂陣の雄が頗る多い。森恪はダ・ホ組の錚々たるものだが、事志とたがひ、病を得ていま銚を収めてゐる。勇猛さに於ては政客五指の中に入るべきであらうが、犬養内閣時代以來やゝ獨り劍舞に終はつた傾きがある。久原は森に比べると餅の如き粘着力と執着性を持ち、無軌道を走つてしかもオミットされぬところは無類のダーク・ホースである。かれは政治的定石はゆかないが、經濟的奇手を忘る

ることなき逸材であつて、今後かれの手の上げ下げは機に應じて政治相場に相當影響を與ふるものがあらう。

古島一雄は貴族院に去り、木下、田邊らも鳴りを静めた。桂の女婿長島隆二も今は大世帯政友會にゐるが、手の内を人に知られすぎて、動きがとれない。秋田清は議長席に練達ぶりを發揮してゐるが、議會淨化などで收まる人物とも思はれず少數ながら四國中國の一勢力を提げて、一仕事をやる時機があらう。

兩大政黨の外には合縦連衡の奇策を抱く處子雲の如くで、その横議華やかなるものがある。國民同盟委員長安達は平沼、宇垣と並ぶ程度の大黒馬である。齋藤内閣割込みは成功しなかつたが、三十餘名の黨員を引具して、パーペンの國權黨的地歩を占めてゐる。

平沼との關係に於ては白上の蹉跌以來困難の度を増したが、清浦、内田、と同郷關係の聯絡もあると云はれ、内田内閣説では、かれを一大支柱と見てゐる。内田は滿洲國承認前後から國を燒土としてもとえらい元氣で、各方面に評判がいゝさうであるが、どんなものか。むしろ政友會代議士にして壽府特派の松岡洋右の方が、外務關係者側の首相級人物であるかも知れない。

い。松岡は大言壯語の開放的性格でもつて、さば／＼とジュネーブを片づけて來ないとも限らない。滿鐵副總裁時代誅首された前社員から狙撃をうけ、却つて此の男を許したり、知らぬ藝者の身の上話しに千圓ぼんと投げ出したりする三國誌的風格をもつてゐる。此の調子でカラハンあたりと日露不可侵條約の基礎でもつくれば意外の成功と謂はねばならぬ。

松岡はかやうな東洋的浪人型で、敵が尠く、支那旅行中代議士に選出されたりする無縫の天分を持つてゐる。鈴木といふことは勿論だが國同の安達ともよく、朗快さに於て鳩山に似てゐるが却つてその進路は豁然として四通八達してゐるやうだ。

國同の中野正剛は玄洋社の壯士型に見られてゐるが、頭山、杉山系統よりも進藤喜平太に近く、學究評論家的方面を多分にもつてゐる。『政争三昧に半生を徒勞して眞の修養を忘れてゐたから』として英佛語の新刊を勉強する（東日）のも此一面を表はしてゐる。田中内閣攻撃以來軍部の一部から嫌はれてゐても滿洲を一巡して、歸つては南去北來の活躍を試み鬪争力は森格と並んで双璧をなしてゐる、たゞ松岡とちがつて、敵が多く、國同内でも、民政に近い山道と指導方針を異にして、國同の將來については却つて重荷を背負つてゐる。

三木武吉は中野、山道と共に民政黨の早大出身少壯派の三巨頭たりしもの。今二三名のミキ、グループを率ゐて、『三笠艦のやうな民政黨に乗り込めるか』とばかり悠々自適してゐる。不人情もの多い民政黨系にあつて、濱口の葬式萬端世話してのけるところはかれの特長だが、市政の小世話と同じに、かれの歩幅をせばめる恐れもある。冷徹、清澄な頭腦をもつて笑はぬ眼光を以て四壁をにらんでゐる三申小泉策太郎とは、よき對照物である。

小泉には知者の身軽さがあり、西園寺ものでもかきながら、じろじろ政局を眺がめてゐる。明治文化研究に興味をもち其集まりの一席を設けたりして、政治は厭になつたなど云つてゐるが、一生政治を忘れ得る人ではなく、何かあると雷獸のやうに落雷にかけつけてゐる。だが、筆者は古島古一念に對すると同程度に、その麗筆に於けるほど高くその政治眼を尊重すべきや否やに迷つてゐる。

所謂政界に於けるダーク・ホースにはこの外幾多論すべき人々があるが、筆者は一轉して更に廣き視野に眼を移さう。

大川周明は以上の陣列につかず離れず特種の地歩を占めた。しかし、あゝ云ふ結果になつて

一時戦列を去つた。大川系と尖銳に對立した北一輝は支那革命外史の著者として知られてゐる。右翼陣營内のセクト主義はヒロイズを中心にして、團體間の軋轢は想像以上に酷烈である。その統一戦線は大衆的壓力がないだけ非常に困難であらう。

安岡正篤は北、大川と伍して一方の大立物である。詩文に長じ、政治的鬼才ももつてゐる。しかし、金雞學院を中心に初老官僚の元締の感を與へ、又屢々上層政客ととりちがへられる。かれの大川、北との對照は永井、鳩山の中野、森に於けるが如きもの、あることは否み難い所だ。しかし、三十四、五歳の若さで松本學、吉田茂（協調會の）丸山、後藤、大塚、池田等々優れた中老、少壯官僚と多かれ少なかれ聯絡あることは異數の事例である。ある評者は由井正雪に比してゐるが、これは當るまい。従つて丸山鶴吉を丸橋忠彌に擬するのはなほ當らないらしい。この一群は伊澤多喜男、その他上層政客との連絡もあり、官僚系ダーク・ホースの策源地帯に當つてゐることを注意しなければならない。

社民轉向派の赤松克麿は爽快な活力をもつ實行家であり、又論客でもある。しかし、才氣餘りある感を與へる。同郷の無産派謀士細迫兼光の冷靜沈着の行藏と並べると好對照をしてゐる。

る。赤松派も轉向する迄が價値があつたので、轉向してしまへば餘り利用されないのではないかと見る批評家もあるが、うがち過ぎた嫌ひがないでもない。しかし、彼の性格はそこまで考へるほど悪辣でもなく、又さう見透すほど透徹してゐない。彼に求むるところは奔放な機鋒にある。従つて、行詰りに逢着することなく、無礙に進退の自由を保持することである。それは轉向の自由を意味する。また逆轉向の自由をも意味する。下中彌三郎派は赤松派と別れたが、かれは本來アナ系的自由思想の持主である。故に割合に澁滞しない。今日では寧ろかれの百科大事典の完成に意義を見出してはゐまいか？

社會大衆黨の安部磯雄はダーク・ホースとはおよそ縁の遠い性向である。却つて麻生久、淺原健三、淺沼稻次郎、田所輝明にダーク・ホース的色彩を見る。若し比例代表制でも制定された場合には——事實その可能性は乏しいが——十名や二十名の政黨になり得るであらう。このときは麻生らの鬱積せる活動力が躍進するであらう。三輪壽壯、河野密、河上丈太郎は寧ろ正路の人として篤實な動きをつけてゆく可能性が多い。大山郁夫去り、塚利彦の病臥する現在はこれらの社大黨闘士が麻生、淺原を中心に縦横するであらう。たゞイギリス労働黨やドイツ

社民黨の如く一時期を劃し得るや否やに就いては依然として疑義がある。

左翼政黨の佐野學、鍋山貞親らは終身懲役の判決をうけた。山本、岩田、野坂等々は依然地線下の存在として知るに由なき状態である。それはダーク・ホースと呼ぶにも適當しない。餘りに地底深き擴がりの影である。

三、ダーク・ホースと無名戦死

歐洲戦争の後、各國に無名戦士の墓や、記念碑がある。ヴェルダン要塞ドゥモン堡壘附近には百萬のフランセイとアルマンの枯骨が沈んでゐる。數十名の生埋兵士の場所として銃剣がさながらに林立する一帯の荒地も残されてゐる。

この萬骨の枯れたる地域やその葬むられたる墓、碑にのぞむ者は、寒波の心臓を冷動せしむるのを感じる。

政界は政客、闘士の戦場である。現今の政治往來はさほどの眞劍味を感じさせず、冷嘲の感情を催さしめることが多い。が、本來政權をめぐる政治行動は戦地に劣らぬ闘争を展開するの

である。

志を得ずに終はつた野心旺盛なダーク・ホースもあらう。が、心からよりよき政治のために下積の埋草になつた青年闘士も多い。等しく政界の無名戦士の墓に歸るのである。

鬼哭啾々と云ふ言葉があるが、筆者は誇張でなしに、政界の鬼哭を聴くもの一人である。昨日の友人は今日の政敵である、憎悪、困窮、失意の自殺、大量的の壓死は政治をめぐる悲哀の現實相である。

めざましく跳躍しゆく政界黒馬の片影に、踏みにぢらるゝ大地のあること感ぜざるを得ない。半面に、大衆の貧困と、疾病と、失業とが横はる政治だ。ダーク・ホースは心して進まねばならぬ。(1932.11.8稿)

宇垣一成の政治的立場

一、朝鮮總督としての宇垣

宇垣一成は今朝鮮總督として邊陲の地に重責を帯びてゐる。

その朝鮮總督としての重味は決して歴代總督に劣るものではない。どつしりしたかれの風貌、人格は總督としての貫祿に價する。統監、大伊藤以來朝鮮總督の地位は内閣總理大臣に優るとも劣るものではない。關東廳長官や臺灣總督が内閣の代る度毎に、内地地方官のやうに解任されるのとは違つてゐる。北海道拓務の長官だつた黒田清隆の時代、臺灣總督後藤新平の時代は遠い過去に屬し、獲得植民地の地域が擴大され、消化されてゆくに従つて、内地に近い帝國領の長官の地位は次第に地方長官化して行つた。

乍併朝鮮總督の地位はいまだ臺灣總督の如きものとはなつてゐない。一つには大陸政策の本營的地域に當る朝鮮そのものゝ然らしむるところだが、二つには、そのために總理級又は超總理級の人物を總督として配在してゐるからである。

滿洲問題が進展して、大陸政策の前線地域たりし滿洲が漸やく大本營的意味をもちはじめた現在に於ては、朝鮮總督の地位果して舊の如くなるを得るや否やは疑問である。

東方會議に於ける、又田中大將の抱ける一大圓弧を描ける大陸政策をば、自己の大野心とすべく宇垣は餘りに常識的であり、或ひはドンキホーテでないと云へるであらう。宇垣は軍人出身の總督ではあるけれども、かゝる對外硬政策の策源地としてその地位を考へてはゐない。此點寺内が援段政策に畫策するところあり、西原借款の如き陷穽に落ちたやうな素人臭いところはない。かと云つて、親露政策をとつて國際政局に大方針を立てた伊藤博文の如き役割を許さるゝ局面にも、彼は際會してはゐない。寧ろ齋藤實の文治政策に稍近く、朝鮮人の經濟生活第一主義をとる立場に立つてゐる。尤もその實現は到底出來もせず、又着手し得ないと思はれるが……。

歴代總督中潔白無比の點で、朝鮮人から畏怖されたのは、武斷政策を厭惡された寺内だけであり、齋藤をはじめ多くは寺内の如きものではなかつた。殊に、無罪にはなつたものゝ、山梨の如きは拙にして又醜なる典型であつた。

宇垣は、山梨の如き非難をうけてはゐない。此點齋藤よりは無難であるらしい。が、國內政局への關係では齋藤よりは遙かに風評を立てられてゐる。それは一つには朝鮮總督の地位が、今日の滿洲全權武藤のそれの如くでなく朝鮮よりも内地政局に近接してゐる點に歸着する。又二つには宇垣自身の政治家的風格が然らしめることに基くのである。宇垣は田中の如く老大なプランに自己陶醉しない。又山梨の如く蹉跌するほど鈍器でもない。かと云つて齋藤のやうに自然生岩礁の如く踞坐することもやらない。かれの全神經は中央政局に集中し、引く手あまたの政局の因縁に結ばれてゐる。宇垣を朝鮮總督としてよりも、豫備總理大臣と見る方が普通となつてゐるのはそのためである。彼がこの貯水池の堰を破つて奔流し來るのはいつであらうか？ 又それは可能であらうか？

筆者はこの本問題に入る前に政治家としての宇垣を一應觀察して見なければならぬ。

二、政治家としての宇垣

宇垣が青年將校時代、日清戦争が勃發した。このとき大本營附きで脾肉の嘆に耐へぬ彼は、參謀次長川上操六に迫つて出征を希望してやまなかつたさうだ。出征は實現せずして止んだが、この點をもつてかれを純乎たる武辨と解することはあたらない。かゝる實例は無數であつて宇垣の逸事又は特長とするほどのことではない。

宇垣は武功に於てよりも軍政治家としての手腕を以て知られた。西園寺内閣時代内閣倒壞の原因となつた二ヶ師團増設案にしても、第一次山本内閣時代の軍部大臣文官制絶體反對にしても軍政治家宇垣の若かりし頃の仕事であつた。かれが清浦内閣、護憲三派内閣以來第一次若槻に至る迄の間陸相として軍政の最高樞機を握つたのは、岡市之助、田中義一等先輩のひきがあつたにもせよ、一つにかれの軍政治家としての資質ありたるためであつた。この閱歷は軍人宇垣をして軍人政治家列傳中の正統たらしめたものである。

軍人——軍政治家——政治家のコースは、軍閥華やかなりし明治時代から、大正政變以後昭和

に至る迄の、かれの先輩の踏める道程であつた。岡山縣出身のかれは軍閥の中心勢力たりし長州系の如く好調子で一貫しはしなかつたが、かれの政治家的風格はよくその間に處して、のびて行つた。軍政治家たる彼は先例に洩れず政治家たるべくさだめられてゐたのだ。かれが長期に互る陸相時代に牢乎たる宇垣時代をつくるに至つたのは決して偶然ではない。明治維新が封建的要素を清算し得ず、新興藩閥軍隊は、土佐、薩摩の一部が板垣、西郷によつて逸脱したのを例外として、そのまゝ官僚藩閥政治の巨柱として永く政界に重きをなした。

わが政界に最も著しく現はれてゐる封建的要素は、かゝる軍人出身の政治家を押し上げて、自由民権運動の大濤にもまれ乍らも、よく政界を左右するを得しめたのである。かやうなわが國政治の特種性を諒解することなしには、軍人政治家の、従つて又わが宇垣の、政界に於ける擡頭を理解することは出来ない。勿論その立役として選ばれる、群を抜く素質をかれらもつてゐた點は認めなければならぬ。が、これにのみ原因を求めるとは誤りであつて、寧ろ、かれらが偉かつたからではなく、かれらを偉くさせる所の背景が存在したためと考ふべき場合が多いのである。

宇垣が宇垣なるが故に、よりも先きに、宇垣が軍人なるが故に政界の巨象たり得たる點を留意し置くべきである。

本來軍部政治家は長閥の傳統を尤なるものとした。と云つて常に長閥のみに傑出せる者が集中してゐたわけではない。

山縣有朋が大御所として軍部政界を通じて陰然重きをなした時代でも、野津一派は對立して譲らなかつた。桂太郎はその直流として軍部の中心勢力をなしたが、政界に深入りし、同志會を組織して終に伊藤の政友會に於けるが如く政黨への合流を敢行した。寺内正毅は辛くもこの直流を支へたが、そのなす所は失敗が多く、政友會原敬に喰はれた形であつた。これは寺内が武辨として優れてゐたが、政治家としての素質を缺き、且政治家がすきでもなかつたのに山縣の推挽に餘儀なくされた爲であつたらう。又丁度政黨政治の昂揚期にぶつかつたことが彼を不成功に終らしめた根本原因と見るべきである。

従つて山縣時代について軍部に一時期を劃したのは田中義一となすべきである。桂、寺内は山縣時代の勢力下にあつたために一時代をつくるに至らなかつた。田中時代に於ては、かれの

縦横の覇氣はシベリア、濟南出兵等をつぎつぎに強行して獨往した感があるが、此時代としても山縣時代の野津の如くに、對立的勢力がないではなかつた。決して正面を切つた對立關係ではなかつたが、宇垣の隱忍せる成長力は田中時代の一潛勢力であつたに相違ない。

所謂宇垣時代は、山縣、田中時代とちがつて、むしろその中間の桂式に近き政策態度を執つた。山縣時代を政黨勃興に對立せる時代とすれば、桂は政黨との妥協政策をとつた。田中はこの藩閥政黨協力の基礎の上に軍部的政治を行はんとしたとすれば、宇垣時代は同じくその基礎の上に立つて政黨的政策を實現せんとしたものだ。此點筆者が宇垣を桂と對比して、桂に宇垣の類型を求めんとする所以である。

兩者の態度は其時代の政治的潮流の然らしめたものだ。山縣は藩閥官僚政治の餘勢を驅りたるもの、桂は大正政變當時の政黨擡頭に叩頭せるものである。また田中は歐洲大戦中のシベリア出兵の餘威に乗じて、アメリカの反作用及び支那國民革命進展に蹉跌せるものであり、宇垣はその後をうけて濱口内閣時代の軍縮氣勢に呼應したるものである。ところが宇垣の軍縮は結局成功しなかつた。それは宇垣時代を劃せるかれの場合に於ても一

つの反對勢力が軍部内に次第に優勢となり來つたがためであつた。と云ふのは荒木一派が軍部内に於て、天保錢以外の軍人膚の人氣をさらつて、多く少壯派の支持をうけたがためである。殊に陸相を退き、朝鮮に後退するに及んで宇垣時代去つて、荒木時代に入り、滿洲事件も宇垣の拱手傍觀裡に進展するに至つた。かくては益々宇垣の影は軍部にうすれて行つた。……

宇垣は加藤高明内閣時代四ヶ師團を縮減し、濱口内閣時代軍縮手腕を期待されたと云ふが、これは彼の政治家的識見が強烈にその方針をとるに至つたためと見ることは出來ない。既に述べたやうに、西園寺内閣當時軍事課長として二個師團増設を強調したことを想へば、軍擴と云ひ軍縮と云ふも、共にかれの向性の然らしめたものではなく、時流に對するかれの適應能力の産む所と見るべきである。

端的に云へば、護憲三派、加藤、若槻（第一次）濱口等の諸内閣を通じ、かれの陸相時代が多く憲政會と關聯するところが多かつたために、かれの態度も勢ひ自由主義的となり、その政策も軍縮的となつたものと思ふ。

かゝる政治家的特性は、恐らく、桂太郎に酷似せるものがある。ニコボンと云はれた桂ほど

露骨ではないが、宇垣にも愛嬌のある牽引力が潜んでゐる。骨力に於て、桂を凌ぐものはあるが、策略に於ては桂に及ばないかも知れない。桂を議會に於ける彈劾演説に於て、氣死せしめんとした尾崎行雄も宇垣には傾倒してゐたと云ふから、尾崎老いたる結果でないとすれば、宇垣の魅力桂に超ゆるものがあるかも知れない。桂に結んだ政客に箕浦、河野、武富ら國民黨五領袖があつたやうに、宇垣に近づく政客にも頼母木、富田、牧山、山道、砂田、岡田らその數に乏しくない。

宇垣は桂とともに軍部政黨の中間地帯を縫ふところにその行藏の特長がある。そのために、一面、軍人にして軍人らしくなく、政治家にしては政治家らしくないと評される。うまくゆけば兩者を併せて、軍部政治家に嘗つてなかつた成功率を示すかも知れないが、これは疑問だ。かゝる點では海軍出身の山本（權）加藤（友）齋藤實の方が無難な政治家ぶりを示してゐる。それは陸軍出身の政客が積極的なやりすぎが多いのに比して、消極的な理攻めのところがあるためであらう。

宇垣の政治家的資格が問題となるのは、かゝる非軍人的、非政治家的缺陷を、兩つながら擴

充し得るや否やにかゝつてゐるのである。かゝる修業に於て最も必要とされる一貫せる政治的識見、理論を高邁な實踐で具體化してゆく脊椎骨が存在するかどうか問題である。かれの精神なる骨力がかゝる能力の存在を意味するものであるかどうか？

筆者は勿論理論的に検討された見識理論をば、かれの場合問題としてゐるのではない。ともかくもまとまつた乙、丙の識見政見とその貫徹力の存在を問題としてゐるのである。

その明證は單にかれの政治家的質量を観察したゞけでは充分に成しとげられない。

現在の政局に於てかれがいかなる役割をもち、又その役割をいかに演出し得るかどうかを見なければならぬ。従つて政局の波紋に顯隠する宇垣の姿をつきとめなければならぬ。

三、現在政局に於ける宇垣の地位

宇垣の政治的地位は昭和六年前半に於て最頂點にあつたかに見受けられる。濱口が兇弾に遭つて重傷を蒙つた後の民政黨内に於て伊澤、江木系の活躍奏功して幣原臨時首相代理となつたが、之に對しては黨内少壯派及黨内外に勢力を張る宇垣派は陽に陰に不満を洩らした。後任

總裁問題に就いては、それが直に後繼首相を意味し得る場合であつたゞめ、三派の巴狀線は想像以上に熾烈を極めたのである。幣原の議會に於ける失言問題が政民兩派の暴力的對峙の形勢を來し議會の醜體を極めたる前後某事件の危機が迫つた。當時の宇垣の聲望は各政黨總裁を凌駕するものがあり政友會は民政黨總裁として宇垣の出現することが黨内の動搖を起すかも知れないと見て、これを虎の如く恐れたものである。その牽制策として黨内の一部では宇垣推戴の取沙汰まで行はれてゐた。

けれども宇垣の地位は、軍部内強硬派に對し一方ではシンバ的であると共に、又他方に於てはこれを抑制する必要に迫られてゐたものであつて、寧ろそのデレンマに苦慮せるものと推察される。ある批評家は宇垣が政權慾のため兩刀を使つたやうに云ふが、此觀察はやゝ穿ちすぎた感がある。個人の力を過重に評價すると云ふ意味に於ても、又當時の一般情勢から見てもさう思はれる。

その後總裁問題も若槻の出現によつて解決され宇垣は朝鮮に去つて（六月十七日）彼の政治生活は一時隱遁的となるかに見えた。かれは朝鮮の一隅にあつて、九・一八奉天事變の生起す

るを見、昭和六年秋の事件を望見し、昭和七年總選舉を看過し、井上、團の暗殺から五・一五事件を経て軍の統制確立への方向轉換にも局外に立つた。

犬養内閣以來宇垣に代つた陸相荒木の方針は五・一五事件以來次第に統制確立に傾いた。皇軍はムツソリニやヒットラーの如きものゝ私兵に非ず、横の聯絡は斷じて許さずとの有名な宣言をきっかけに此方針は貫ぬかれて行つた。此宣言そのものも大庭、南、菱刈諸大將の硬論が軍參議員會議の空氣を支配し、荒木をしてこの態度表明に至らしめたと云ふが、ともかく陸相が此方針を採用するに至つた事實は、かれが此方針に基く責任を負擔すべきものとされる所以である。

非軍籍者の司法警察への引渡し、大川博士の檢擧、愛郷塾主の自首、農民請願運動の抑制、軍部人事大異動等が、政界の注目を引いたその後の主なる経過であつた。

ところがかゝる傾向の進展は右翼急進運動の退潮を導き、ファツシヨ民間諸團體への監視嚴重の度を増大した。

五・一五事件後の荒木系の立場は、昭和六年春の事件後の宇垣のそれと内容に多少の差別が

あるにしても、ほど類似せるものとなり、こゝに宇垣系の再擡頭を可能視するものを生じた。しかしながら、軍部内の歴史的動きを見ると、各時代を畫した指導者群が再起せる例に乏しいのである。此點政界に於ける盛衰の推移と可成違ふ點で、従つて、宇垣系再興説は必ずしも信じ難いものとなる。何故ならば同系統は多く將官級に集中し佐官、尉官級の壯青年層に乏しいと見られてゐるからである。

若し宇垣の進出が豫想さるゝとするならば、それは軍部内からではなしに、却つて軍部外から、即ち政黨、重臣等の側からなし得るにとゞまる。宇垣内閣説が、伊澤、富田、頼母木等民政系政客からなされ、或ひは牧野伸顯等薩派の一角から試みられ、政友會の一部にも共鳴者ありと風聞されるのはそのためであると推察される。

常識的に、宇垣は軍部によくないと云ふのは、右の風説が眞實性をもてばもつほど實證されてくるわけである。陸相荒木の統制確立方針に更に一步をすすめる要請が存在すると假定すれば、宇垣内閣説に對する反對もそれだけ熾烈となり得るわけである。宇垣が某事件關係の辯明を兼ねて上京したと謂はるゝ場合は勿論、その他數次の東上の機會に彼の努めて言明する所は、

政界に野心なし、朝鮮總督の重任にある間はかゝる考へなしとか、或は又來る度毎に政界の取沙汰を蒙るは迷惑と云ふやうな點に盡きてゐるのも、右の點の顧慮にもよると察られる。

若し宇垣内閣運動が、伊澤の一大官僚中心政黨計畫の線に沿つてなり、又は富田の政黨大同團結主義に基いてなり、各政派の便宜的妥協點として計畫さるゝなり、或ひは重臣側の希望によつてなり進捗した場合には、必ずや反對運動が発生し得ると觀測される。その結果、丁度齋藤内閣成立の如く意外なる方面の要人を起立せしめないと保証されない。

宇垣の政治的立場はかやうな政界に於ける矛盾の焦點に位置してゐる。かれの苦慮、戒心の度も通り一遍のものではない。彼の上京の都度警戒の嚴重を極めるのはかれの用心にもよるであらう。又同時に警察當局の態度からも、又政治警察の意味からも倍加される思はれる。

宇垣の政界的勢力は民政黨内にも、同黨系にも、政友會、國同の一部にも及んでゐる。又牧野その他の重臣筋にもよく、大阪實業界方面に於ても少なな期待をもたれてゐる。かと思ふと無産黨轉向派等々にも聯絡があると云ふ風に相當廣汎に互る勢力圏が築造されてゐる。浪人政客間にも宇垣は話せると云ふものが多く、その扶殖せる地盤は相當の範圍に及ぶのである。

黨總裁の最大資格たる資金の融通に就いても、あの筋この筋、少しもこまるやうなことはないであらう。

宇垣の勢力を少し具體的に述べると上記した(1)軍部内の宇垣系——南、金谷、二宮(治重)寺内(壽一)安部(信行)杉山(元)等の諸將軍が濃淡の差はあるが共に關係がある。(2)政黨内の宇垣運動としては(a)民政黨内に富田幸次郎、永井(純粹に宇垣系とは云へない)頼母木、兩川崎(克、卓吉)櫻内、牧山、小山(松壽)(b)國同系に山道襄一がある。彼は脱黨前から今日に至るまで宇垣擁立運動を行ふ。それは宇垣—安達結合運動とも見られる。(c)政友會では砂田、岡田の外秋田清が色々の意味から連絡を保つてゐる。又山本(条)が深き關係があると説くものもゐる。(3)貴族院では青木信光、溝口直亮等研究會の有力者がある。その他(4)官僚系では(貴族院にも關係があるが)伊澤多喜男、井上(匡四郎)次田大次郎、池田秀雄、松本學等である。(5)財閥では同郷の馬越恭平の外稻畑勝太郎、大倉、その他關西實業家、中京實業家を擧げ得る。(6)又今日最も注視されてゐるのは、既述した通り薩派であつて、樺山、山之内、財部等が中心で一脈牧野(伸顯)山本(權)の重臣筋にも脈を

ひくと傳へられる。

かくの如く宇垣派の又は宇垣運動者の組織網は多角的にはりめぐらされてゐるが統一的に整頓されてゐるわけではない。各が時々夫々の思惑と、目的とで運動してゐるに過ぎない。たゞ諸派の運動は政界首脳部に近いだけに宇垣運動中に於ける有力なモメントと解すべきである。かやうに支離滅裂な動きではあるが各方面の意向が間歇的にもせよ宇垣を中心にして注がるゝと云ふことは何等かの原因がなければならぬ。

惟ふにその各種運動を貫ぬく共通性は次の如き要素に歸着するのではあるまいか。

- (1) 統制方針の徹底。
- (2) 満洲建設についての資本家の協力を可能にし且つ速進すること。
- (3) 對聯盟、對列強強硬外交の緩和。
- (4) ファアツシヨ團體運動の抑制。
- (5) 議會政治擁護、政黨復活の方策。

かゝる諸要點は何も一々當人の宇垣に申込れて諒解を得ると云ふやうな形式的のものではな

いが現在の政局面に於て五・一五事件後漸次に實現し來れる中間層急進運動の抑壓線に沿ふ所の政界、財界、官界の一般的空氣を表現するものである。

例へば政友會に於ける森恪、久原派に對する鈴木、鳩山派、國同安達中野派に山する山道の態度、及び富田の民政復黨、陸軍強硬派荒木、眞崎、秦に對する溫和派金谷、南、阿部、海軍強硬派加藤(寛)末次に對する財部と云ふやうな相互關係が、政界の一角に宇垣擁立運動を孕むに至つたのである。約言すれば、内田、平沼ほど軍部内閣に近くないと想像される所の、齋藤内閣類似のものとしての宇垣内閣を考へる運動である。即ち最右の軍部内閣(荒木内閣その他)次段の内田、平沼に對立して、考案されたる第三次内閣運動なのである。齋藤、山本、清浦等と同列、同性質の内閣計畫である。政治家宇垣は果してこの計畫に乗るかどうか? 彼の肚裏は惟ふに、時機到ればと云ふにあらう。然らば時機はいつ來るか? それは宇垣自身にも運動者にも分かつてゐない。

宇垣内閣運動は苦肉政策的意味をもつ點で一部の憤慨を買つてゐる。が、さうだからと云つてその實現可能性がないとは云へない。しかし、直面する財政危機が齎すべき大衆生活の目

に見える不安焦燥を宇垣が救治するやうな政策をとり得るとは思へない。假令彼が出るとしても、政黨、財閥の危惧の念を解消し得るにとゞまるであらう。従つて宇垣内閣に多くの期待を有し得ない。と云つて、外の内閣がよりいゝと云ふ意味に於てではなく、外の内閣と同様にかかる望みをかけたくないと言ふ意味に於てである。(1932.12.8稿)

森 恪 論

森恪は終に斃れた。

病を獲て八十日、由井ヶ濱の海濱ホテルで、がむしやらの闘病記録を残したのがかれの最後の思ひ出となつた。

江木翼が死んでから幾日になるか？ 政友會の巨柱もその後を追うた。共に書記官長として著聞だつた政治家だが、江木は民政型の、法規典例に明るい官僚的畫策に水も洩さぬ質、森は

また鼻つぱりと豪膽とで政治的機略に縦横した男だ。共に民政政友の隠然たる巨柱であつた。

此の二枚がかけると、前齒の抜けた政友會と、奥齒の抜けた民政黨が残されたやうなもの、―― 二大政黨も寂寥の感なきを得ない。

行年五十、森恪の生涯は太くまた短かつた。筆者かれを見たることは唯一回、第六十三議

會に於て、内田外交に鋒をつけたときであつた。その風貌、音聲、態度には圖々しさ、線の太さ、悠々迫らぬものがあり、印象に深く残されたるものあるを想へば、かれの死はまた一抹の感慨を催さざるを得ない。その演説草稿はもつと强硬だつたのを軟げたものだが、筆太にかゝれた巻紙らしきものを繰りのべ、繰り收めて、フロックの胸を厚くはり、手を尻にあて、またテーブルに軽くのせた。しかしその手は重量を感じしめる腕の感じであつた。内容は有體に云へばたいしたものではなかつた。だが、その演説は非常によかつた。

内田外相の「焦土」を肥やし、沃野を展望せしめる育成的のものはそこにはなかつた。焦土をばいやが上に焼きつくさん破壊力を見せた。生民何の計か樵蘇を樂しまんと云ふ詩句があるが、その句味に味到するかれではなく、萬骨をも枯らさん意氣組みさへも見えた。

星亨死し、横田千之助歿した後、政友會に人を求むればまづ森恪であらう。横田千之助の死んだのは確か大正十三年暮と記憶するが、星なき後の横田、横田なき後の森と彼は謂はれた。

横田の逝つたのも、政友總裁高橋是清を擁して床次、山本（達）一派の政友本黨をはねのけて、大政友會を兩斷した大仕事の後であつた。森も五・一五事件直後平沼内閣の大芝居を演じ

て思ふやうにならず、匆忙の裡に死んだ。五・一五事件の暗雲深くして、一部には、兎角の評ある裡に、かれの精神苦の病苦を倍加するものもあつたのはかれの最大の不幸であつたらう。兆民は伊庭想太郎に刺殺された星を評して、「生ける星は追剝盜賊にして、死せる星は偉人傑士なり」と云ひ邦人の輕浮にして毀譽常無きを嘆じた。筆者も兆民居士と共に、死せる政治家の常にステーツマンにして、死せる婦人の常に美人なるを怪しむものだ。

森恪は豪勇の政客、膽力氣魄一世に鳴るもの、片々たる總理、大臣、總務の類ならざるを信ずるが、敢てかれを潔白な政治家とも時代を畫すべきステーツマンとも考へない。棺を蔽うて事定まると云ふが、少なくとも一ゼネレーションを経てその何者たるや、何を残したるか、社會が彼によりて何を寄與せられたるか、大衆がいかにかれによりて幸福を増したかを知り得て、眞に事定まると云ふべきだ。破壊？ 亦可なり。だが、歴史進化に貢獻するところなき破壊であり、強力であつた場合には、人は畏怖の念をこそ抱け、敬愛の一片だに捧げないであらう。鈴木總裁は死の二三日前、見舞ふた際、梯子段を氣をつけると森に云はれてホロリとし、死相をのぞいて又顔をそむけた。人情さこそと同感する。が鈴木の評したやうに、「千萬人と雖も我

往かん」てい的人物であつたかどうか？ 又永井拓相の評したやうに「新日本建設の闘士」であつたかどうか？ 又荒木陸相の言の如く「この難時局に至要の人」であつたかどうか？ 筆者は未だその眞偽を審かにしない。貸すに三十年の歴史を以てせよ、と筆者は云ひ度い。

幕臣にして後自由黨員だつたとか傳へられる森作太郎の二男たるかれは、學歷僅か東京商工中學を出たゞけで、三井物産留學生として上海に渡つた。山本条太郎の下に三井の一サラリーマンとしてかれの會社生活は初められた。當時日露戦争時代で、バルチック艦隊日本に接近しつゝある頃、一説によると、上海の船を全部買占めたり、澎湖島附近まで乗り出してその所在を發見して聯合艦隊に打電したと云ふが、又他の説ではバルチック艦隊の積んだ石炭の分量をしらべてコースの距離の推定からその對島海峽を通過すべきを豫報したのが真相とも傳へられる。とも角當時巧名心燃ゆるが如き森が捨身な活躍をなしたことは容易に想像される。

岩下清周の媒介で瓜生大將の娘を一度も見つたこともないのに無造作にもらつたりした壯年森の面目には異色がある。三井物産を飛び出して、原敬に引かれて政友會に入り、先輩横田の地盤栃木縣から衆議院議員に出たのが政界に入る緒で當選五回今日に及んだ。

書記官長としては伊東巳代治以來の書記長と云はれ、大臣など眼中になく、優待問題にまごついた水野練太郎、其他望月等に對しては先輩もくそも考へなかつた。

濱口が重傷の癒えぬのを江木、伊澤らが引出したときは、親屬の水町などの反對したのは親身の至情だが、中野が正面から引退すべしとやつたやうに、森も濱口、否あの傍人の態度何事ぞとやつてゐた。金創再び化膿し、眼が見えず聲によつてその人と察して談話のウマを合せた濱口のがまんは常人のよくするところでないが、卒直に引くべしとやつた非儀禮的中野、森の態度はあの社會では異數であつた。

森の檜舞臺はおよそ二回あつた。

その一つは政友幹事長たりし頃田中が急逝し、後任總裁問題で鈴木、床次が對立したとき長老の意向も、黨内の人望も床次に歩があつた。このとき森は鈴木派と諒解の上で犬養引出しを策し、單身湯河原に、當時顧問だつた犬養を訪問し、一問一答、即坐に犬養を暫定總裁にきめてしまつた。森の癖で足を無造作に組んで、横柄な調子で話しを片づけた。田中を誘引して人事施政素志とたがひ、政友會を飛び出して、驛頭においおい田中と呼びかけ、無量の感慨を催

した小泉策太郎よりは遙かに、森は圖太い。それは智者小泉と勇者森の人間の違ひで、上品じやうほん、下品げほんの區別にはならない。森のその後の犬養待遇法は強氣にすぎて少しあくどい位ひだ。

この犬養總理時代にかれの第二の檜舞臺があつた。書記官長たるかれはある場合犬養をおいて總理の如くふるまつた。犬養の人事で森の横槍に挫折したこと一度や二度ではなかつた。犬養のもとに書記官長としてゐながら、五ヶ年計畫を七年度豫算に組み入れず、八年度にも見込みのたゞない高橋に楯つき、滿洲を支那地方政權とする犬養Ⅱ芳澤外交に反對した。しかも平沼内閣を策して、五月政變説のたしかな風説さへも生じた。書記官長としての激務の外政治的陽謀、陰謀多忙を極はめ、森はなさゞるところなき男との印象をさへ深めた。

國家を憶ふ一徹と云ふか、事功をいそぐ焦燥と云ふべきかは知らないが、餘りに急、餘りに過度なかれの活躍は、やゝ悠久性を缺いた。

かれが、喘息のために闘病中四十日を椅子に倚り、「非常時に何を愚圖々々してをるか」と卅九度の高熱中にも國家を論じてゐると云ふニュースを讀んで、筆者には一種の豫感があつた。森恪の本領ではあるが、迫れるものに追はれる態度がかれにあつたと思ふのだ。そしてこの調

子は昭和七年前半からの行動によく現はれてゐた。横田がたしか、五十三歳、森が五十歳の短生涯にこめられた烈火の如き活力は、最後に近く最高潮に達したのである。それは夭折する傑物にとつての通有性であり、惜しむべき急性性であつた。

森恪は生え抜きの三井つ兒である。しかも先輩山条を凌駕して、三井との關係も深かつた。義父瓜生大將が三井重役益田孝の義兄たる關係を重要視する評者もあるが、政界入りと共に、私縁を斷つと稱して、五六年も瓜生家にゆかなかつたさうだから、かれの三井との關係は自力によると見るのが妥當であらう。しかし、その獲たる資金がかれの信用によるとは云へ、寡頭金融の資出にかゝることは否定すべくもない。太い腹に見えて、氣の小さい山条よりも、森恪がもつと活躍し得たのはなんと云つても、かれの自から奉ずることの薄さと、その捨身な態度に對する信用であつた。

塔連炭坑事件は政治家共通の無理が祟つたもので、不起訴にはなつたが、少なからずかれの痛手であつたに相違ない。ものに拘泥せぬかれも流石に辯明書やうのプリントなどを配布したところを見るとそう思はれる。

森は久原と並んで政友強硬派の巨頭であるが、共に金融の達者であつた。共同してゐるやうで實は意見は可成りちがひ、久原の協力運動にだけは反對であつた。森は策謀はやるが直截簡明で、久原は無軌道であつた。森は剛直の一本槍を武器とし、久原は多角的な算盤を獲物とした。両者はウマが合ふやうで實は合つてゐなかつたのはそのためだ。

だが、寡頭金融關係の辣腕政治家であつた點は共通で、これが、かれらの持つ社會的性質であつたことも否み難い。

かれの辯論に就いては意外に傑出せるものであることは既に説いた。だが、その文章については筆者殆んど知るところがない。況んやその見識に就いては全く聞いたことがない。

たゞ政務次官たりし加藤条四郎が企業植民としては南米がいゝが、滿洲に對する國民的意氣を沮喪せしめないために滿洲移民を奨励すべしとの議論をしたのに對して、效果なく成功の見込みなき滿洲移民など斷然反對すべしと云ふ卒直な意見を森が吐露してゐたのは事實だ。従つて具體的に個別的問題に關しての意見には非凡なるものがあつたと想像される。たゞ體系的に一貫せる理論と見識があつたかどうかは別問題だが……。

森恪の死は、政友會の動脈を切斷せる如きものがあり、此點安達中野派の去れる民政點の蒙むれる影響と甲乙なしと思ふ。

唯政友會主流の有する議會政治、政黨政治に對する見解と異説を抱くに至つたかれの最近の立場を考へると、それほどの打撃はないかも知れない。

たゞ四十名を超ゆるその一黨が、其中全部とゆかぬまでも、反鈴木鳩山の傾向のものは今後相當の問題を残すであらう。

親友鳩山は中野去りし後の民政永井の如く却つて氣は樂になつたかも知れないが、又一面寂寞の餘情なきにしもあらずと察せられる。上海時代領事官補として三井の森に親んだ松岡洋右は政友系外相候補の森なき後では、その駿足を一層のばすかも知れない。

ともかく政友會としては氣勢上の損失は偉大であるが、政策、態度の上に於ては打撃を蒙むるものではない。久原のみの指導では大謀反にまで黨内情勢を引きづることは困難で、此點、森の永眠は強硬派にとつては深甚な痛手であらう。

六十四議會を前にして、巨星森は地に墜ちた。政友會はいかなる態度に出るか、岡田海相を

通じての齋藤、鈴木の諒解が六十三議會後に實現されず、その上省内事情が主要因となつて岡田は遠からず辭職するかも知れぬ。又岡田に代つて高橋が鈴木と會見して六十四議會後に右の諒解を再生し、現實せしむるかも知れぬ。以上は多く政友會系の見込みであるが、果してどうなりゆくか？ 此際死せる森恪が生ける齋藤を走らしむる場合なしとも限らない。かれの錦囊中の祕策を知るものは誰れか？ それは恐らく、鈴木や鳩山ではなくそれ以外の森系の人々の中にあるかも知れない。……

爛熟期の政治面に於ける波瀾は本來多かるべきである。

この混亂に拍車し、これを擴大すべき一立役者を失つて、政局に一抹のものたりなさがある。かれ去つて一時的にもせよ、平坦な局面が生ずとすればかれの個人的力も亦威大なりと云はねばならない。

筆を擱くに當り、かれが、機略從横、鬪志滿腹の資質をもちながら、その地位にめぐまれざりしことは、かれの誇りとすべく、又その慰めとなり、更に一種の餘徳たるべきことを附言して置かう。(1932.12.11稿)

鈴木喜三郎論

※

※

政友會總裁鈴木喜三郎の地位は現在注目的となつてゐる。

鈴木が總理大臣になるかならぬかと云ふ個人的な問題ばかりではなく、およそ政黨總裁の地位が將來どうなりゆくかと云ふ一般的な問題がそこに横はつてゐる。政黨政治の今後、政黨總裁の未來がかれ個人の場合に凝固してゐると云つても過言ではない。個人的立場が、さうした政局全般の歸趨に應じてこれほど具體的な重要性をもつことは、滅多にあるわけのものではない。

鈴木が犬養首相兇變の後をうけて、政友會總裁となつた頃は、昭和六年春から昭和七年五月にかけて最高潮期にあつた中間層急進運動の餘燼なほ熾烈な頂點に當つてゐた。だが、かれは

政黨内閣一點張りで直進した。この鈴木の状態はかれの直情徑行の資質を最も端的に表白するものであつたばかりではなく、政黨首領としてまさに執るべき當然のものであつた。又一方その強硬なゆき方は、客觀的にも押し通せさうに見えた。それは荒木鈴木會見が、ある程度鈴木内閣の可能性を見せたからだ。五・一五事件が軍部首脳部の關知するところではなく、従つて、昭和六年九月以來又殊に犬養内閣成立以來對内政治に一致の歩調を示した軍部としては、意外な事件であつたに相違ない。それだけに、まとまつてゐた對内政治的態度が混亂を見せた瞬間がそれに現はれたわけである。このとき政友會が鈴木の強固なる意思のもとに政黨内閣への歩武をすゝめることが不可能ではないと觀察されたのは當然である。けれども鈴木荒木會見の刺戟は軍部に異常な反響を與へた。政黨内閣反對と云ふ否定的意見が俄然その勢ひを盛り返して來た。その結果、ある程度の諒解點に達したと思はれた鈴木荒木會見の結果は形勢俄然一變せざるを得なかつたのだ。

そのために、單獨政黨内閣の方針——それは安達久原の協力内閣運動を一蹴し去つた以來の鈴木犬養の根本方針であつたのだが——は、遽かに一大障礙に際會して、政局の大回轉に臨ま

ざるを得ない情勢になつた。

こゝに、鈴木及其その周囲も鈴木首班の協力内閣でいゝと云ふ態度に一步退却した。しかるに單獨内閣主張の出端を挫かれたことは、この第二線の防禦を不可能ならしめた。第一線の總崩れは第二線になだれを打つて、政友會陣は收集し得ざる状態となり、その間官僚系薩派等の暗躍が奏功して超然協力内閣成立に大勢が決した。

かくて鈴木も濫々ながら、超然内閣に協力せざるを得なくなつた。しかも内務の椅子を確保せんとする要求も齋藤のために、手紙で簡單に片づけられて退却戰の悲況益々濃厚となつた。協力派の望月か誰れかの代りに、鈴木直系の鳩山を一枚入れたことが僅かに鈴木の爲し得たるところであつた。

五月政變はかくの如く政黨政治の本旨たる單獨内閣主義とその修正運動たる協力内閣主義の相剋を現出したことと、並びに後者の勝利に終つたと云ふ點にその意味が存する。而して鈴木總裁は此の政局の轉換に一敗地にまみれた。

※

※

この五月政變は、鈴木を知る上に有力な材料となる。即ちかれは冷靜なる時局推移の觀察者であるよりも、熱烈な主張者であると云ふ點である。

田中内閣時代内相として第一次普選をかれが闘かつたとき投票日の一二日前に例の議會政治否認的口吻をもつた有名な宣言を發表したことがある。これは一面政略的意味から、民政黨の信用失墜を目標としたものであるかも知れないが、從來の鈴木の政治的意見が卒直に表現されたものとも見ることが出来る。不徹底な普選案であり、歐洲戰後反動期の、多く期待し得ない所の政治的自由主義であつたにしても、多年の普選運動に織り込まれた一般民衆の氣分が、不快なショックを内相鈴木の宣言によつて受けたことは否み難いところである。この宣言は多く都市に於て鈴木の所期に反した結果を招來するに與かつて力があつたと思はれる。

此の場合でも司法官時代の鈴木のイデオロギーが清算し切れずにあるのが、正直に現はれたもので一般の雰圍氣を測定する點で失敗に終つたと云はねばならない。

※ ※

しかしながら、此處に關して見免してならぬことは、田中内閣時代内相として嘗めた苦き經

験の結果か、かれの心境に著しき變化の發生したことである。選舉干渉の攻撃熾烈を極めたのに對し、かれは潔く責任を負つて辭職した。これは鳩山、森の忠告にもよつたらしいが、身を以て、田中内閣を救はんとしたかれの俠氣の現はれであつたと思ふ。かれが後に政友會總裁となつた素地はこの進退に基くところが多大であつた。田中がかれの自決後副總裁に押さんとしたのも黨内の空氣の然らしめたところだ。この副總裁説はそのとき實現しなかつたが、爾來總裁問題の出る場合かれが第一の候補者たるに至つただけの効果はあつた。

田中の急死後、鈴木床次が對立し、犬養が出馬するに至つたのも、畢竟暫定總定としてであつて、その背後の實勢力は云ふまでもなく鈴木であつた。犬養内閣で床次その他政友長老系と鈴木系の勢力均衡上、中橋が内相となつたのも同様に暫定的意味しか有してゐなかつた。鈴木系に近い松野鶴平が内務政務次官となつたのもその意味をよく現はしてゐる。中橋が櫻田門不祥事件の責めを負つて事件直後辭任することは實現しなかつたが、病氣の故を以て後に至つてやめた場合に、久原の横槍や、山本(悌)の東推薦(川村の代りに)等々の諸種の支障を押し切つて、鈴木(内務)川村の入閣は實現された。

これで鈴木の副總裁的地位は確定し、將來總裁たることも決定したのであつた。だから鈴木が内相になるなら、床次を副總裁にと云ふやうなプランは土臺無理があつたわけである。犬養總裁の後を繼いで鈴木が政友會總裁となつたのは可成必然的成行きであつたのだ。

殊に第三次普選即ち犬養首相のもとに政友會が空前の壓倒的勝利を占めた總選舉に於て、鈴木が勅選議員を辭して神奈川縣第二區から當選したことは、かれの政黨政治への一大躍進であつた。黨内に於て總裁に近づく一歩一歩は、この代議士當選と共にかれの政黨政治家としての經歷を次第に濃厚ならしめたものであつた。六十の手習ひと云ふか、老齡に近づいて政黨人たるかれの心境及びイデオロギーは君子豹變と見るべきものだ。現在政黨首領だから政黨内閣を主張すと見るのは當らず、むしろ政黨人としての經歷の累積がその心境を變化せしめたと思ふ。恰度長州官僚系の巨頭桂公の同志會組織の際の如きものがあると考へられる。蘇峰翁が桂の政黨政治への傾倒を説いてゐるのは信憑するに足る所であらう。桂が政黨政治の極盛時到来とする大正政變の際心機一轉したのと、鈴木が政黨政治の受難期に於て次第に心意強化したのとは非常に差があり、兩政客の人物解剖上興味あるコントラストであるが、官僚思想から政

黨的思想への轉向たる點に於てはその軌を一つにすること云ふを俟たない。

第一次普選から第三次普選に及び、鈴木が政友會總裁となるに至つた經過は同時に、鈴木が政友會化さるる過程でもあつた。

もの見える點から云へば、長州政客たる桂を推すべきだが志向の點から云へば闊達にして、淡泊な關東政客鈴木に趣きが多い。

※

※

鈴木は生粹の關東人である。川崎附近の名主の系統で、かれの祖父は悪代官と争つて牢死した人物だつたさうだ。

鈴木の性格の中、星亨、横田千之助、とよく似た俠骨が充溢してゐる。關東政客に共通した恬淡と強氣と、無理と率直とが交錯してゐる。それは官僚として、殊に司法官として終始すべき資質でないことを意味する。

かれが明治二十四年の帝大を出、司法官として官僚のコースに入つたのは、當時の帝大出の極く普通のゆき方であつた。だが、かれの政治家的素質は司法部内に於て、平沼系の中心人物

たらしめた。平沼が兒島惟謙系に對立して次第に有力な勢力をつくり上げ、政界に對しても底力あるにらみをきかせたのは人の知る所である。その平沼と併稱せられて政界一方の勢力となつたのは、實に鈴木が存在の然らしめた所だ。従つて鈴木は永い間司法部的色彩を帯びてゐた。大隈内閣時代尾崎法相の下に次官として大浦兼武（當時の農商務大臣）の議員買収事件を揚扱してかれをして退官憤死の餘儀なきに至らしめたのも、原敬内閣時代の司法次官としての活動もかれの司法部的政治家時代に入るべきものだ。又清浦内閣時代の司法大臣として、この變態超然内閣のために、選舉監視の辣腕を振つたり、既記した田中内閣の内相としての政戦も未だかれの司法官的臭味を脱せざる時代であつたと思ふ。

だが、それ以後のかれの政治生活は徐々に政黨政治化して行つた。平沼が、舊來のまゝ官僚的存在として一貫してゐるのは全くちがつてゐる。平沼が隱然たる重味をもつて、大久保甲東的の趣きを見せてゐるのに反して、鈴木は陽性の親分膺を次第に露出してゆき、西郷南洲的なゆき方をしてゐる。

森恪が犬養内閣當時から、平沼内閣の猛運動を試みてゐるが、鈴木はこれに賛意を表しては

るなかつたと思はれる。殊に齋藤内閣成立の後に於ても、森恪の外、菊地（中將）や野田蘭藏の平沼鈴木の提携運動にもウンと返事してはゐない。

平沼とは兄弟のやうな間柄だが、それは個人的關係で、政友會總裁として政黨政治を守つてゐる公の立場からは、この提携に賛成し兼ねると云ふのがかれの腹であるらしい。

平沼の企圖すと見られてゐる超然的な強力内閣は、鈴木が立つてゐる單獨政黨内閣とかなりの隔りがある。平沼が山本權兵衛内閣に司法大臣となるまで、大臣となることを遠慮する氣持ちをもつてゐたと傳へられる鈴木であるけれども、今やはずきりした對蹠的立場に立つに至つたやうだ。

昭和七年末から昭和八年初頭にかけて、政黨聯立の運動が次第に擡頭して來た。政友會の秋田清、民政黨の富田幸次郎、國盟の山道襄一、浪人の小泉策太郎、秋山定輔等々がそれぞれの視角から、この聯立運動を起しつゝあるやうに思はれる。

が、これに對しても鈴木は明確に肯定の返事を與へてはゐないやうだ。政友會内には相當の人物で鈴木のこの頑固な態度に不平をもつてゐるものもあると聞いてゐる。けれども、鈴木の

この態度は、昭和六年末の協力内閣反対以来筋の通つたものと云はねばならない。唯政權にしびれを切らしてゐる政友會黨員の結束が果して永きに耐えて鈴木の主張を支持するかどうかが問題である。

齋藤内閣成立のときでも、鈴木が若し協力に反対して、政友會から閣僚を全然入れないと突張つたら、協力派が殆んど全部分裂し去る危険があつた。嘗つて清浦内閣成立のとき床次、山本（達）一派が政友本黨として分離したやうな危機が再來したに相違ない。

今後とてもその情勢に變りはない。齋藤内閣の後に同種類の協力内閣が出現した場合、同様の波浪が政友會に迫るべきことは容易に想像し得る。

此場合に於ける鈴木の様態は森恪の企圖したやうに、矢張り協力に引ずられるものと豫測せざるを得ない。

かと云つて單獨政黨内閣をすぐ實現せしめることに對しては、軍部になほ難色がある。それは政黨領袖の人々と支那政治家との關係に就いての風評やら、政黨腐敗に對する一般の不人望が背後にあると思はれる。

又、政黨聯立については、數量に格段の相違ある政民國盟の關係から見ると、無意味に近いし、又各政黨各々の思惑があるのを思へばなかなか障碍が多い。たゞ政黨の聯合により政黨政治について一種の精神的示威と云ふ點では多少の意味はあらうが……。

政友會が巨大なる三井財閥の背影をもち、絶體的量的勢威と、強固な地盤網とを有しながら、此の苦境に永く沈淪せざるを得ないことはいかなる理由に基くであらうか？

これは總裁鈴木に與へられたる最大の宿題である。現在に於て、政民兩黨の牽制のために、地方當局の行政は比較的に中和的公平の傾向を示すらしい。これは無爲の齋藤内閣の消極的存在理由の一つとされてゐる。

又黨内代議士中には、内閣をとつても、大臣や次官等にならなければ大したたいゝこともないと云ふ氣分もある。特にいゝことがあつてはたまつた話ではないが、從來通りうまいことが出来にくいと云ふ豫感は相當強いに相違ない。

かやうな政黨の悩みは屋臺の大きいだけに政友會が一番ひどいであらう。殊に昭和八年度下半季に現在のインフレーションによる空景氣がその社會的影響を次第に深刻にしてくる場合

に、何人が自信を以て政局を擔當し得るかは更に大きな難問題であらう。その頃は、建設期の滿洲問題の困難が具體的に直面し來る時期でもある。

政友會總裁としての鈴木の本格的な苦心も政權が來るかどうかと云ふことよりも、かゝる政治的な、近き將來の問題解決をいかにすべきかと云ふことにありと想像する。從來、政治家は多く、政局擔當の前に責任のある政治上の言質を與へないと云ふことを以て巧妙な態度と考へてゐた。が、現状はそんな吞氣な時代ではなくなつた。

大衆が政權の異動に就いて關心を抱くのも、それが、どこにゆくかと云ふことではなくて、次の擔當者が具體的にどうするつもりなのかと云ふことにある。

鈴木總裁に對して、大衆の發せんとして發する能はざる無告の聲も、實にこれに外ならぬと筆者は考へてゐる。

鈴木が起つかどうかも、この一般的の疑問に對して、彼れがいかに、答へるかに先づかゝつてゐると思ふ。(1933. 1. 15)

高橋是清と云ふ人物

※ ※

政友會幹事長の山口義一が黨費の集金に行つたところ、金なんぞあるものかと答へて、山口をして嘔然たらしめた。

高橋留任決定の際、鈴木、高橋會見が行はれた。留任の辯はさて置き、鈴木さん一つ無任所で入閣して見てはどうかと無造作にやつてゐる。辭職を斷るのも、黨費を謝絶するのも全く同じ流儀であつて、湖上にうつる飛雁の影を看過する姿である。漂々乎たる風貌は禪味と云はんよりも寧ろ仙味に近い。もう俺は生きるのが厭になつたと、のこのこ大海の靜海波の裡に姿を没し去つたたしか李太白當りの心境に近いものがある。

※

※

山口が詰問的な勢ひで、留任せる高橋のところに押しかけたときも、騒いだり昂奮したりしてはかへつて政友會のために損になるぞよとたしなめてさへる。黨略も齒がたゞず、言質も證據にならぬところがこの老翁の身上である。

※

※

一體高橋が齋藤内閣に藏相になつたのは、齋藤がきまつてから、その懇請によつて入閣したと云ふやうな普通の慣例によつたものではない。西園寺元老が後繼内閣奏請のときまづ最初に會つたのが高橋で、齋藤をお推舉申し上げる前に高橋が新内閣の大黒柱としてとどまるべきことの諒解が済んでゐたのである。しかもその際高橋が西園寺に云つたことは、政友單獨内閣では時局の收拾は遣りにくい、やはり舉國的形式でないといけなだらうと云ふにあつたらしい。政友會の連中が手ぐすね引いて、どう云ふ元老の話だつたか、とその内容をきゝたがるのに對しては洒々乎として、なにたいしたことでもない、今日は一寸自動車のタイヤがパンクしてねいやはや困つたよと他愛のない答へ、これには政友會の一流どころも脈をひきかねて變な顔をして引き退る外はなかつたと云ふ。

高橋のかゝる態度は、なにもかれの個性が人並以上に非常に卓越した人間であることを立證するものとばかりは云へない。かなり異數の經歷とその間にデッチ上げられた特種のメンタリティーが超俗的風貌と心境とをかれに與へたことは云ふ迄もない。が、從來ならばかゝる政治家的資質は舊國民黨領袖たりし大石鑿鑿居士のやうに政治家として不遇に終はるべき傾向のものである。鳥居小彌太ほどの羈氣もなく、武富時敏ほどの見識人格も高橋にはないから、その不遇隠棲の場合は到底鳥居、武富ほどの香氣を帯びることはむづかしい。まづ大石の野狐禪味を凌駕し、ぶうぶう慷慨しないだけが取柄だと見る程度であらうと思はれる。

※

※

それなのに、高橋の無軌道的心境がものを言つて、大政友會に反撥を許さず、その不平不満、悲憤慷慨が却てかれら自體の内部崩壞の因をなさんとする趨勢を生ずるわけは、やはり政黨政治の頽勢如何ともすべからざる所以の然らしむるところであると思ふ。

即ち超然主義の、換言すれば舉國的傾向の波濤がこのダルマ翁を押し上げて、大政黨の頂門の一針たらしめつゝあると見るべきである。従つて大政友會も、高橋翁を恨むことが出來ず、

恨むとすればこの趨向を的とせざるを得ない。高橋の舉國主義的態度に組み入るものは黨外のものだけではない。三土、望月、山本（条）岡崎らの舊政友系、野心充滿、權略縱横の久原系も黨内に蟠居して、高橋を支持する氣勢さへ起り得るのである。

高橋は齋藤内閣の大黒柱である、かれがやめれば内閣は倒れる。平閣僚の辭任と同一に取扱へない點があつたのだ。その高橋の辭意に絶對信頼を懸けて、内閣の總辭職を待望したのが政友會の一般方略であつた。

だが、之だけで政友會内閣が後繼者として出現すとの自信を抱くのは政友會の大きな誤算であつた。政策と主張の、國民大衆を牽引するに足るものがあつての上ならともかく、一個人の言質を頼りに熟柿の落下を待つのが、いかに政團として不見識の限りを暴露せるものなるかは多言を要しない。個人の意向は政治情勢の變化で可變的のものである、この個人の心緒を動かすべき大勢に對する工作を漫然として看過して、確信ある見透しをつけ得る筈のものではない。

高橋翁の心氣轉換は政友會の此の虚を衝いたのである。

※ ※

高橋留任の一般的根據は政治的大勢の然らしむる所だ。が、強ひてかれ自身の特質にその原因を求めらば、かれのもつ經濟的知識にあつたらう。外國から、國際經濟會議まきの方に開かれんとするに當り、貴公の自重協力を待つとの投書の來たことは高橋をして氣をよくさせた。自然發生的にさう云ふものが舞込んだか、何等かの示唆に基づいたかは知らないが、翁をして氣をよくさせただけは否み難い事實だ。翁に似合はず、その文書を印刷して知己方面に配布したなどは、そのいゝ氣な程度を知るに足りる。

※ ※

だが、およそ、政治は禪味や詩境とは違つて、組織力と、政策實現の能力が基本をなすものである、従つて高橋式存在は政治的中心勢力たり得ないものである。かれが眞に舉國一致主義と協力主義の信奉者であり、そのオルガナイザ的才幹であるならば、六十四議會に當つても、その意味で政友會を説服し引ずる筈である。それをしないで、曖昧な意味深長のやうな諒解と思はせるやうな言質を與へ且つこれを覆へしたのは、漂逸と評することは出來ても、一貫せるステーツマンの態度とは、どうひいきみに見ても云へないことである、鈴木一派が正面から政策

に基づく闘争をしないで、隱微の裡に高橋の辭職齋藤の桂冠を欲した態度、高橋のいはゆる、『倒閣の道具』に使ふ態度に對する嫌惡の情は、自然な真情の流露であるには相違ない。だが、此の間、政黨政治への復歸と舉國內閣延命との政治的信念の動搖が認められ、政治家的態度としての不信用が暴露されたことは否み難い。

※

※

此邊にかれのルンペン的人格と經歷が多分に織込まれてゐることが認められる。若き清青年の奔放な私生活がそこにある。箱屋の生活もあれば、一朝目ざめてみればアメリカの奴隷に賣られてゐたりして、無邪氣だつたり遊蕩兒だつたり、さまざまな放浪的側面をさらけ出してゐる。淺薄な成功宗信者は黒子も笑くぼで、えらくなつた人物の缺點までも長所のやうに思はれ、色を好んだり、大酒をしたりするのが英雄だつたりするのである。だが、高橋翁の場合の如きも箱屋や奴隷にならなかつた方がより以上の高橋が出来上つた筈であつて、これはむしろかれの經歷上の汚點であるに相違ない。こんな苦境或ひはのんき生活からくぐり抜けての、して行つた點でその突破力を賞嘆すべきだと云ふにとどまる。

高橋留任前後に、どことなく蕩兒の茶羅つぼが現はれてゐると思はれるのは、あながち酷評に過ぎるとは云はれまい。國家非常時だと形式ばつて威張らず、道具に使ふのが怪しからぬとつむじをまげた點が却て此の人の爛漫たる資質を現はしてゐると思ふが。

※

※

かゝる政治家的風格は過渡期の氣儘人として、なごやかな微苦笑に價しても、決してがつちりしたステーツマンシップの體現者として尊敬する價值はないのである。その意味で責任ある政局の中心者たり得ざる高橋であると思ふ。

※

※

自然生の風流政治家、悲境期の樂天財政家これが高橋といふ政治家の本質であると思ふ。一本調子の、侃々諤々の、嚴正型が日本政客のよき典型であるが、その間に伍してかれが柔軟性の茫邈たる風格を把持して獨歩してゐることは、かれをして特異の存在たらしめる。荒木型に對しては、絶妙の對蹠的人物である。ルンペン性もこゝまで大成すれば偉とすべく、自然性の無礙なる成長も又好ましきものと云ふべき乎。

鳩山文相論

……京大事件側面観……

鳩山文相の瀧川教授休職處分は學園の死活問題にまで發展した。單にそればかりではなく文化問題一般に關聯し、その影響するところは非常に廣汎である。

鳩山が此の擧に出るやうになつた動機は種々あるが、その最も重要なものは、某々極右思想家連の詰問的態度、右翼團體の迫威等に現はれたファツシヨ的風潮にあつたと見られてゐる。鳩山に對する怪文書はしばしば裏面的に流布されたらしく、その多くはかれの私行に關するものであつたらしい。それはかれが大政友會の華やかなる中心人物たる政治的地位に對する攻撃を意味するもので、政黨内閣阻止運動の卑近な現はれだと解せられる。

本來かれは文相として不適當な人物である。

批評としてさう云ふことが言はれてゐるばかりではなく、實際かれ自身が、入閣の當時文相

はこまると思つてゐたと傳へられてゐる、齋藤内閣成立の際、協力運動派の望月圭介が目ざされてゐるのが望月が斷つたためと、鈴木總裁がその忠實な代辯者が必要としたために鳩山が入閣したのだ。だから鳩山は、文相としての抱負經驗をもち人格學識の適格に基づいて入閣したのではない。むしろ、政友幹部派鈴木系の政略上、その派の御目附役として割込んだものと見るのが妥當な見方である。政友系で強ひて文相の適任者を求めるならば、水野鍊太郎がある。水野は田中内閣の文部大臣であつた。かれは官僚型の利口者で、朝鮮政務總監時代南大門の爆弾事件のとき齋藤總督が腰を浮かしかけた夫人を引きとめて馬車から動かなかつたのに、彼れ獨り總督を置きざりにして逃げ走つたりした。加藤友三郎内閣の内相もしてをり、加藤の歿後殘務處理中例の大正十二年九月一日の大震災で、鮮人蜂起の虚報を公式に傳播して大慘事を引き起してゐる。又昭和三年の政略的な大學彈壓にも三・一五事件共產黨云々を口實にして、後で平氣で、議會に於てその關係に基づく教授罷免ではないと聲明してゐる等々の事例多き水野であるが、それでも、公平に見て、鳩山よりは文相として適任者であると云ひ得るであらう。又鵜澤聰明あたりなら相當の文相たり得るかと思はれる。

だから鳩山が文相となつたのは、文相として適當な人物を政友會内から人選したと云ふよりも、上述したやうな黨略的見地に基づくものだ。かれ自身は『スポーツを語る』を著したり、神宮外苑に始球式をあざやかに演じたり、書記官長室にゴルフ道具をならべてはゴルフに熱中したりして頗る朗らかな一面をもつてをり、リベラリスト的な風貌を見せてゐる。この風格は一面かれの本心の流露であるが。他面淺薄な人氣策にも役立つた所の政治家的ゼスチュアでもあつた。

此の種の風體の人物には、どうしても薄つぺらな方面の存することを免れ難いのであつて、之がまたかれのチャーナリズム人氣に投じた所以でもあつた。此陰鬱な就職難世相に大量失業生や失業生の卵を前にして、陽氣なスポーツ的な身振りだけでは文部大臣はつとまらない。そこでなにかやらなければならぬ。だが心から學生層の、又卒業生否失業生の苦境を打開して就職難に進出せしめる政策は一個の文相の力ではどうにもなることではない。そのため教育行政は積極性を持ち得ない。却て消極的な抑壓的な政策が賦課されざるを得ない。極右の一部の迫力があり、又宮澤某の衆議院に於ける質問があり三室戸某の貴族院での質問のなざるゝに及ん

で、鳩山の心境はその指さされたる方向に轉向せざるを得なくなつた。しかもこれによつて、かれの、或ひは政友幹部派の政治的立場打開の方策となさんとすとの風説さへも起つて來た。京大事件の一原因がこゝに存することは多言を要しない所だと思ふ。京大事件が文部省、京大の確執である以上、單に文相の心境だけが原因だとは云へない。京大側に於ては瀧川教授の著述が他の緣由になつたことは云ふ迄もない。

文部省は大學の監督官廳であり大學はその監督下に職務を遂行する機關である。その職務遂行は大學令に基づき研究及び教育の衝に當るわけである。大學令は周知の通り明治十九年の『國家の樞要に應ずる學術技藝を教授し及びその濫奥を考究する』とあつたのが、大正七年、『人格の陶冶及び國家思想の涵養に留意すべきものとす』と追加補充されたのである。大學令の本旨はだから(1) 國家樞要な學問研究(2) 國家思想の涵養(3) 人格の陶冶の三點に要約される。

大學の職員はその職務執行に當つて、この大學令の規定を守る官吏としての義務がある。これは當然なことである。だが、その義務は、一々、その時の政府、又は文部大臣に伺ひを立て、

一々その意見をきき、鼻息を伺ひつゝ履行され得るものでもなければ、かくの如く執行すべきものではない。學者として眞に大學令の趣旨に沿ふ所以だとの良心及び研究上の判断に基づいて職務を遂行すべきものである。これが大學令の基準に従ひ、官吏としての教授が職務に當るべき根本的態度である。

この良心及び研究に基づく判断が、大學令の下に規律さるゝ學問の自由と呼ばれる。又これに則つて大學が進みゆくことが學府の獨立と稱せられる。この自由と獨立なくして、一々、時の當局者の解釋とお思召しに媚びてゆく者は御用學者、提灯學者と指稱される。

(1) 國家に須要な學問に就いても、當該政府の政策的な見解や、當面の必要と見る所と、學問にたづさわるものとの見識には開きある場合が多い。例へば失業者大群の統計的數字のきめ方に違ひが出来る。その救済方法についても、まあ食へないでも靜かにしてゐると云ふ場合と、早く失業者救済をやらぬといかぬと云ふ考へ方の差が生じてくる。即ち科學的觀測に於てもその政策的處置についても幾多の食ひ違ひが生れる。又私有制を治安維持法中に入れることの立法論としての可否だとか、私有制が永久不變か、幾百年の將來には變るかも知れぬと云ふ

觀測の相違も生れて来る。又

(2) 國家思想の涵養にしても、命令服従關係を最も重點と見るか、團體生活上の基礎の深く且つ堅い融和關係に力點を置くかの見識上の異同も起り得る。更に、

(3) 人格の陶冶にしても、現實主義の功利的な俗吏型を劃一的に要求する見解と、少しは骨力のある國家社會の進歩のために役立つやうな人間をつくるのが急務だとの考へ方が對立してくる場合もある。

國家の進歩發展に役立つ學術、及び思想、人格等は、多く、提灯學者型の充滿せる學府よりは、少し位の批難があつても獨立自由の學風から生れ得ることは、初期の慶應義塾や早稻田學園に徴しても明らかである。大學の獨立、研究の自由と云ふと、當局はいかにも大學令違反の反逆思想のやうに見ることが多いが、それは過りである。大學令の精神解釋の相違にすぎない場合を當面の政略や、當該政府の見解に基づいて、反逆的に取扱ふのは早計であるからだ。もし大學令の解釋が常に時の政府、時の文相の考へ方以外に出づべからずとすれば、かゝる文部行政は俗吏のやうな大學生と教授團の生産に役立つとも、決して學問の進歩や國家生活の發達

には貢献しないであらう。

瀧川教授の刑法讀本は發禁になつたから、その内容に就いて論ずることは許されてゐない。だが、外の著述論文演説等に就いてその思想一般を推察すると、姦通罪の問題でも男子の姦通を矯正すべしとの道德思想が含まれてゐるのであつて、決して風教問題について暴論をしてゐるものでないことがわかる。又立法論として、かゝる問題は社會道德の方にまかせてはどうかと云ふ思潮も含まれてゐる。又内亂罪は處罰すべきものだと言ふ大前提は屢々説いてゐる。ただ内亂罪を舊刑法が名譽刑で罰し、新刑法で禁錮とするに至つた立法理由の説明の部分が不充分であつた場合が多いやうだ。又教育刑主義が、出獄後就職不可能のため、その目的を達し得ない弊害を伴ふことを屢々批評してゐるが、これも不用意で且つ誤解を招き得る言辭を戒めれば足り、此の問題が社會一般の重大關心事たるべきことは云ふを待たないのである。筆者は瀧川教授に面識がないからその人物如何を知らない。が、その論著等により推察すれば直情的な自由主義的批評家であると考へてゐる。

言辭上の重大過失が、内務行政の對象となつた場合とか、又は司法權發動を見た場合には當

然その制裁をうくるが、そうでないのに文部行政權が此の際休職處分をとることの可否は疑問の餘地ありと思ふ。醫科の學者が藥物の研究をやる。毒藥も對象とならう。工科の學者が總ゆる發明品研究で、人間に危害を生ずる危険もあり得る。これを一々取締まるることが當を得ないやうに、法、經、文の學課に於ても、餘り神經質に干涉することは角を矯めて牛を殺す場合あることを注意すべきで、人文の發展國家社會の將來の進運を阻害することなきことを留意すべきである。

現行大學令下に於ける大學の獨立、研究の自由は上述したやうな内容をもつものである。この主張は獨り筆者の一家言ではない。一般輿論もその軌を一つにする。學問の研究は當然に各種の反對説の對立存在を前提とする。思想統一が當局者の學說内容の一律化を意味するならば、大學の滅亡であると共に、學問と眞理の刺戟である學說の内容を大學令第一條によつて判斷するのは、國家が最高學府として認めたる帝國大學に課されたる使命であつて、黨人大臣やその屬吏に決定さるべきではない。大學教授が文部省管下の官吏であつても、文部大臣が學說如何によつて教授の身分を左右せんとするのは不穩當にして不適當である』(東朝五・二二)

との議論もその一つである。又『真理の研究および発表を一概に壓迫するのは亂暴である。一時はある方面の便宜主義からこれを壓迫するとしても、時間のテストは遂にその黑白を批判し、無思慮な壓迫を槍玉に擧げずには置かず』結局かゝる壓迫は『大局から見れば一國民もしくは人類全體の進歩が停頓阻害される場合もないではない』（東日五・二一）と云ふのがその二である。かゝる自由究學の根本論を離れて、さし當りの當局の處置に就いても穩當を缺くもの少しとしない。（一）發刊後一年後の發禁を問題にせること、（二）且つ發禁が内務行政上の處分として妥當だとしてもそれが直に著者の教授としての一資格を左右すべきことなるかどうか疑問であること、丁度嫌疑により檢學された學生が直に、學校行政上、放校に處すべしと斷じ難きと同じである。このことは學府に於ける研究、學校に於ける教育が一般行政行爲とちがった特種な性質を保有することを立證する。よく司法、警察當局等にて學校に於ける大量的學生處分に對して慎重を要請するのを聞くのも、その意味であると思ふ。又（三）大學官制に於て、總長が『高等官の進退に關しては文部大臣に具狀』しとあり、その具狀に基づいて文部大臣の處置の行はるべきことが期待されてゐるのであるから、總長の具狀なき文相の處分は

官制違反となると考へられる。（四）しかも文部省内に於て處置に先だち大學反對せば閉鎖も辭せず等々の徒らに挑發、挑戰的放送を行ひ監督官廳としての慎重と思慮に缺くるものもあつた。これらの諸點は文教上の又文部行政上の、處置に於ける缺點として第二段に指摘せらるべきであると思ふ。

吾人は（一）大學令解釋に基づく研究自由、學府獨立の根本理論並に（二）教育行政上の處置の當否をば以上論じ來つた。が更に（三）政治的判斷に於て文相の責任を糺さざるを得ない。先づ

（一）國務大臣として自己自身の見識に出發せりや否や。これは既述した問題發端に關聯するところ多大であつて、鳩山個人が國務大臣としての責務に耐へ得るや否やの問題となる。又その處置手続きに於ける法規的、技術的失體に見て文部行政長官として適否の疑問が起る。更に

（二）鳩山文相が齋藤内閣の一員として、高橋藏相辭職問題をめぐり政友會の倒閣運動に惠心せることの可否如何？これは京大事件に關係があるわけではないが政治家たる鳩山文相の態度

として論ずべきである。國務大臣として國策上意見の對立ありし場合には他の全閣僚の意見に反對するも可なりである。かくてこそ國務大臣としての職責に忠實なるものである。然るにかかる政策上の對立意見に基づかず、漫然と一閣僚の生理的原因による進退に關聯して後繼内閣運動に一脈氣息を通ぜるかれの全行動は甚だしく輔弼の重責に反する。閣僚としての、官吏としての服務規律の精神にも叛くものである。

吾人は既成政黨流儀に辭職を勸告するものではない。唯國務大臣の心情の著るしく低下したること、殊に文部大臣なるものが伴食大臣視され、教育學問に對する基本的見識の著るしく下落せる當局者多きことの事實を指摘せんと思ふのみである。

五月二十八日早慶野球を文相が見物し、早稻田フアンの文相は早稻田の敗北に切齒して、ゴルフの要領で早大打者に教へたいと豪語したとかゴシップが傳へてゐる。筆者は少しも個人の趣味生活に對し干涉の言辭を好むものではないが京大三千の學生が教育閉塞により湧き立つてゐる際この管轄下の國務滯滞を對岸の火災視する心情の緩々たるに驚かざるを得ないのである。これによつて見ても筆者は文相鳩山が國務大臣としての地位をいかに省察し、いかに、處

理せんとするかの苦衷を察することを得ないのである。……

政治家としての鳩山が、いま、大政友會鈴木系の駙馬として鈴木政黨内閣運動の中心人物たることを知る。その方策の一つとして、京大問題を援用し、一部の時流に投せんとするの機略を有するものとの世評を眞實とすれば、その短見たることを指摘せざるを得ない。積極的の政策の有無、包括的な見透しの存否こそ急務なのであつて阿諛追隨は寧ろ政黨政治家鳩山の顛落の第一歩だと斷ぜざるを得ない。

歷史的人物篇

——其他雜篇——

歷史人物篇

——其他雜篇——

張良論

一、坑にされたインテリゲンチヤ
の群れ

「焚書坑」と題する章碣の詩がある。

竹帛烟消帝業虛、關河空鎖祖龍居、

坑灰未冷山東亂、劉項元來不讀書。

日頃愛誦するところの詩句の一つであるが、簡にして要を得、史實を摘記したるを妙なりと私は思つてゐる。

書物に紙を用ひたのは後漢の頃がはじめて、秦、前漢頃迄は竹簡木皮をつないだものを書と爲してゐた。この竹帛を焚やしたのであるから、さぞ景氣よく、燃えたことであらう。

始皇三十四年李斯一書を上げて建白したのがことのはじまりである。『今諸生不_レ師_レ今、而學_レ古以_レ非_レ當世_レ惑_レ亂黔首_レ（人民のこと）、臣請史官非_レ秦記_レ皆燒_レ之、天下有_レ藏_レ詩書百家語_レ皆詣_レ守尉_レ、雜燒_レ之云々』と李斯は云つた。今の書生どもは古のことばかり學んで當世即秦の御代をけなしてゐる怪しからん徒輩である。主な本は沒收し、下らぬものは焚いてしまへと云ふわけである。

なかなか徹底した思想取締りである。今の學生は外來思想にかぶれて大衆を惑亂する。あれもこれも輸入禁止で、これもあれも發禁沒收といふわけである。古を學ぶと云つても必ずしも保守的と云ふわけではない。秦政批判の標準と理想とを古代夏殷周三代のさんらんたる文化の裡に求めんとするのである。先進諸外國の社會過程と、將來の進歩過程を究論してやまぬインテリゲンチヤのむれと、時代を異にするとも、その趣きを等しうするものだ。

尤も當時の讀書子にも相當インチキながをつて、始皇が長生不死の藥を求めたのに對して大船十艘に童男童女各々五百人、金銀珠玉飲食器用の類を満載して、臣に授け賜はば東海の邊で必ず探し求めて参りませうと、もつともらしく船出して、そのまゝあと白浪とドロンを極め

た。これは徐福と申すふとゞきものである。驚いたのは始皇で、徐福を探して参れと詔をうけて出かけたのが盧生と云ふ學生で、一生懸命で山東の海邊まで來て見ると、烟波渺茫そのつくるところを知らぬので、弱わつてしまつた。弱わり切つて大岳山中に乞食仙人に會つてお託宣を承はると、天心録祕訣と云ふ本をくれた。

これは大本教の筆先のやうな蝌蚪文字でよくわからぬが、むりに讀んで見ると秦を亡すものは胡なるぞよと書いてあつたと云ふ。

始皇が大將單蒙恬をして人夫八十萬を率せしめ萬里の長城を築いたのはこれからのことだと云ふが、これは俗説であてにはならない。

しかし、かう云ふインチキな學生がゐるので、土臺讀書生と云ふものは邪魔くさくなり、この使ひに行つた盧生を筆頭に侯生その他四百六十人を坑にした。一説によると始皇が瓜を驪山の硯谷に種ゑ、その瓜が冬實つたのを諸生に令して見學させた。めづらしい瓜だとか、いやまやかしだらうとか云ひ乍ら、油斷をして見てゐるところを、悉く坑に投げこんでしまつた。『以_レ土皆壓死』すといふから随分ひどいことをしたものである。

かういふことまでしたが、祖龍居は空く鎖ちられ、始皇帝崩じ、焚書の坑灰のさめきらぬうちに山東亂れて義兵が起つたといふ。——これが章碣の詩の意味である。

そして、かくして起つた劉邦及び項羽は元來不_レ讀_レ書者であるといふのである。——私がひそかにこの詩句を愛誦措かざるものあるは實に此の最後の句あるによる。

横議至らざるなき處士は坑にされ竹帛は烟消した。が、その坑灰冷えざる中に、ろくに本も讀んだこともない二個の自然人が、立ち上つて暴秦を打倒したのである。

※

※

亡秦は處士の理論によつて培はれた大衆の意識を背景とする。が、立ち上つた所の實踐家はやむにやまれぬヤケクソな卑近な動機に基くのである。

先端を切ると云ふことを、『陳涉、吳廣たらん』といふが、あの二人のせんせいなどは秦の士卒九百人を預る貧乏少尉どころである。その頃盜賊などはびこつた山東、山西、河南、河北等に出むいてゐたのが、大雨に遇つて途に手間どり、斬罪に處せらるゝ恐れがあつたので士卒を語らつて亂を起したのである。漁陽に擧兵し陳の國に至るころは數萬の勢になつてゐる。

この二人はすぐ平定された。しかし沛の豊邑の劉邦字は季と云ふ男は、隆準龍、左股に七十二の黒子ある異相で、廣く人を愛し、施を好む谿達大度であつて、これが樊噲と云ふ暴力團と結盟して一角の顔役である。しかし、家業不_レ修酒色を好み、諸人に輕んぜらるゝ無賴漢であつて、たれも後に漢の高祖になるなど考へてもなかつた。かれも驪山の麓に造られる始皇の陵に沛縣の人夫を引き具してゆく筈のが、バラバラ逃げ出すものが多く、罪に問はれるのを恐れてヤケクソになつたのである。豊西の澤中に白蛇を切つたのはこのヤケクソまぎれにやつた疔癩であつて、それから急に元氣になつて反逆者の大將になつた。沛縣の小役人蕭何、曹參など後世著明の宰相連はこの直後彼に味方してゐる。

項羽は楚の大將項燕の後で楚が秦に亡ぼされた復讐に叔父項梁と共に會稽に旗上げた。

※

※

この劉、項が後に漢楚の大小争闘を試みて劉邦の勝に歸し、漢の天下がかくて出來上るのである。劉邦元來、遊惰無賴、無學ものなのに天下を併呑するに至つたのは何故か？

それは天下の狀勢が秦の滅亡を豫定してをつたからである。そして、またこの滅亡の契機を

シツカリ把握して、新興勢力の據つて立つべき戦術を指呼し得る戦略家が、劉邦を援けたからである。

この卓越せる戦略家こそ、わが張良に外ならない。かれは、始皇によつてうちもられたるインテリゲンチヤの一人である。このすぐれたるインテリが、透徹せる頭腦と、細心の方略を以て、劉邦を援け暴秦を滅したのである。

二、張子房の時代、封建制より中央集權 國家への轉換期——

張良とは、そもいかなる人かを説く前に、私は、少しく、あまり固くならない程度で、亡秦興漢の社會狀勢を語らう。

黃帝堯舜の傳說的時代から、夏殷周三代に至る恐らく三千年に亙る時代に於て、支那に漠然ながら成立してゐた制度は、不完全なる特種の封建的制度であつた。周時代に公侯伯子男の所謂五爵の諸侯を建て内政をととのへ外族の侵入にそなへたのが、この制度のはじまりである。

諸王侯や家臣が共に武人であるところの歐洲や日本の封建制度とは可成り違つた點があるのであるが、世襲的諸侯のもとに主従關係で結ばるゝ家臣が、各々分封知行を領してゐる點では大體似てゐるのである。この特種の封建君主が戰國時代所謂六國の抗争となり、この制度最後の闘争をやつてゐたのである。この制度が滅亡して行く原因の一つに、かやうな六國抗争の戦禍に耐へがたく、生活の基礎を破壊された黔首の大衆的苦惱が横はつてゐたことは云ふ迄もない。しかしいまかやうな支那上古特種封建制の倒壊を經濟的に解説する場合でないから、割愛して行かう。

唯かゝる六國諸王侯の抗争が、特種の才能を重用し、先秦時代の絢爛たる學術、思想及人材旺溢の時代を招致するに與かつて力のあつたことは、一言しなければならぬ。何故ならばこれが人物としての張良を生んだ客觀的條件の一を形成するからである。

六國を亡滅せしめて、強引に天下を平定した秦の帝業はこの封建制度の清算過程に外ならないもので、この始皇の專制的君主政治は古き制度をその彈壓の鐵蹄のもとに踏みじつた。かくして生れたものが、秦の中央集權國家であり、封建制を清算したる所の郡縣制度であつた。

ギリシヤ古代文化の次にローマの世界國家が成り立つたやうに、東方に於ける中世的世界國家こそ、この秦の立國に外ならないのである。始皇を中心とする王權が極度に專制化され、伸長し六國の敗殘者が忿憤に燃えたのは、かやうな時代的趨勢を物語るものである。そしてまたこの條件こそ、張良をして秦に對して決死的反逆をなさしめた原因の第二のものである。

秦の政治的原理は、申不害、商鞅の流れを汲む所謂刑名學である。法律の桎梏を以てのぞみ愚民政治に徹底し、舊制度下の滅亡六國を威壓屈從せしめる事を目的としたのである。張良が當時の新興社會思想たる黄老學徒であつた以上、この法律萬能政治に對して死闘すべき地位にあつた。これ張良が秦に反逆した第三の原因でもあり、條件でもあつた。

興漢の政治家として著明なるものは大抵この老子の道を信ずるものであつた。好んで書を読み黄老の言を修むと云はるる丞相陳平、清靜以て天下を治むることをモットーとする丞相曹參をはじめ汲黯、田叔皆然りであると謂ふ。而して、張良はその大先達であつた。

當時戰禍數十年、塗炭の苦しみの裡にあつた大衆がいかにこの老子の道を唱和せるかは容易に想像し得る。だから秦の刑名思想に對する黄老學説は、資本主義に對する社會主義のイデオ

ロギー對立と同等に深刻なものであつて、この鬭争ありたればこそ、興漢の大運動がほゞいはる民衆運動たり得たのである。

と云つて、秦の焚書は、信長の門徒攻撃のやうに、統一國家成立時の免れがたき虐政であつた。始皇が天下の書を盡く燒棄し去つたと見るのは寧ろ過りで、阿房宮に藏した圖書は莫大なもので、劉邦が先づ關内に入つたとき、蕭何が眞先きに『秦丞相御史律令圖書を收めて之れを藏す』と史記蕭相國世家の段に見えてゐるのはその證左である。秦時代の挾書の禁が解かれたのも秦始皇焚書の後、二十二年、漢惠帝の四年のことであると云ふから、戰亂の後とは謂へ、處士横議の餘弊は相當深刻なものがあつたのであらう。

秦より三國時代に互る支那極盛期、西晋より隋に至る中衰期から唐時代の復興期を包含する支那中世時代が、この秦、前漢の時代に劃期されてゐるのだから、此の時期の變動が思想的に、また社會的に、いかに深刻なものであつたかゞ想到され、秦の暴政も、故なき彈壓でなかつたことを恕し得る。謂はば漢は、火中に粟を拾つたもので、秦始皇が郡縣制度確立のためにあらごなしをしたあとで、割りのいゝ歴史的役割を占めたものだと言ひ得る。

秦時代に於ては郡縣の行政區劃に分ち、秦王がこれを直轄する中央集權制度であつた。反之、漢時代は徹底的の封建制度擊滅を緩和して、郡縣封建併用を行ひ、郡の外に國を置いて、これに諸王侯列侯を封じてゐる。しかしこれは名義だけの、政治的實權のない空位であつた。だから漢は、六國時代の反動を巧みに緩和して、郡縣制を成長せしめたものと見る事が出来るであらう。

三、張良と劉邦

張良字子房、韓に事へて五代宰相たる家門の人である。

だからかれが始皇滅韓の復仇を願念とするのは當然である。また後に再起した韓王を亡ぼした項羽を敵視したのも無理からぬことだ。しかも黃老學徒にして、俊豪雲の如き當時の人材中一際光芒ある存在たるかれである。これ等の諸條件がかれをして秦顛覆に蹶起せしめたのは決して偶然ではない。

かれは、時代推移の洞察力に於て、その變革の意思に於て、當時のインテリ型の中で比肩す

るものがない。勿論、かれがいかに有能の逸材であつても、また彼の扶けた劉邦が英明の質だとしても、時代自身の轉換期に際會してゐなかつたならばその成功は望み得べくもない。

杜牧之の阿房宮賦（古文眞寶、乾）に『六王畢、四海一』と始皇の霸業を詠じたくだりに、『滅六國者六國也非秦也、族秦者秦也非天下也』と云つてゐる通り、秦自體にも亡滅すべき内在的原因があつた。張良が昂然として、始皇無道にして男は耕すことを得ず、女は織ること能はず、父子夫婦わかれ離れて、我は北の方長城を築き、東は大海を填め、五嶺を修し、阿房を建て、焚書坑儒、大逆を肆にして、民しばらくも安んぜずと痛罵するのは、秦自滅の内在的原因である。秦を興したものは彈壓主義の刑名主義であり、また之れを亡すものも刑名主義に外ならぬ。頭を交て物語るものすら市に引出して誅するほどの暴政であつた。

賈誼の過秦論（續文章軌範評林）にもあるやうに、『秦王懷貧鄙之心。行自奮之智。不信任功臣。不親士民。廢王道。立私權。禁文書。而酷刑法。先詐力。而後仁義。以暴虐爲天下始。』と云つた有様だ。しかも二世がこれを改めるどころか、『重之以無道。壞宗廟。與民更始。作阿房宮。繁刑嚴誅。吏治刻深、賞不當。賦斂無度。』であるから、強弩の末勢や

知るべきのみである。

かゝる内在的崩壊原因の外に、賈の所謂『山東豪俊遂竝起而亡秦族。且夫天下非小弱也。』とあるやうに、専制治下の被壓迫大衆弱きに似て弱からず、いつかは必ず反噬し來るべく、それに革命家竝起するあり、矛盾は擴大してアンシャン・レジームの打倒に終はるべき趨勢にあつた。かやうに内部的矛盾が醗酵して外部的にこれを打倒するに至つたのである。この情勢こそ劉邦張良を英雄の士たらしめた客觀的事情なのである。

しかもその擧兵の陣頭に立つものは、プロレタリアートの出である。その叛亂は筵旗の大衆的武装である。賈誼はその状を『躡足行伍之間。初偪起阡陌之中。率罷散之卒。將數百之衆。轉而攻秦。斬木爲兵（武器）。揭竿爲旗。天下雲集響。』應と描寫してゐる。蓋し名文である。

かゝる客觀的狀勢ありたればこそ張良は成功したのである。乍併、かゝる客觀的狀勢をばモツブの妄動たらしめず項羽の如きボスの蠻行に終らしめなかつたのは、一つに戰略家張良の頭腦である。

蘇老泉の「高祖論」に『漢高祖挾數用術。以制一時之利害。不_レ如_二陳平_一。揣_二摩天下之勢_一。擧_レ指_レ搖_レ目。以_レ却_二制項羽_一。不_レ如_二張良_一。微_二此二人_一。則天下不_レ歸_レ漢。而高帝乃木強之人而止耳』とあるは正鵠を得てゐるであらう。

しかしまた蘇老泉の云ふ通り、天下已に定まり後世子孫之計をなす際には、陳平、張良智の及ばざるところは、高帝がこれが規畫處置をつけ、後世の爲す所を曉然として目其事を見て、これを爲すやうに明瞭に仕置いたのは高帝の叡智である。『蓋高帝之智。明_二於大_一而暗_二於小_一。至於此_二而後見也_一』と云へるのである。後に述べるやうに、張良を用ひた高祖には張良を抱攝するだけの宏量あることはたしかである。が、乍併、蘇老泉のいふ高帝の大智とは王朝存續の大計を云ふ。例へば周勃は重厚にして少_レ文、劉氏を安んずるものは必ず勃ならんと呂公に言つた點、或ひは崩御に臨んで曹參、王陵の順位に宰相にすべしと言ひ、且つ王陵のときは陳平と二人を宰相にせよ、陳平だけでは智餘りあれども政を一人に屬し難しと云へる點などその大計と云へば云へるであらう。また韓信が高祖を評して、自分は百萬に將たるも、帝は十萬に將たり得る位だが、しかし將に將たるは帝の威大なところであると言つた點などは、高祖の宏量と

その大計を髣髴せしめてゐると思ふ。

と言つて、私見によれば、高祖を張良以上の人物と観る考へは少しも當つてゐないと思ふ。それは何故か？これを明らかにするのが私の張子房論の一つの目標である。そのために、私はなほ張良を語る必要がある。

張子房は戦略家であり、智謀の士である。このことには少しの疑がない。戦略家は總大將よりもえらくないと誰れしも云ふであらう。乍併私をして曰はしむればこれは小兒的論理だ。暫らく待たれよ。私はこれ等小兒論に訓ゆるところがあらう。

繰返して曰ふ、張子房は戦略家である。が、併しかれば決して權略家ではない。虚靜的政道の信奉者として、全社會の靜謐の外のぞむ所がない。かれの目的とする所はその一身の榮達權勢ではない。塗炭に苦しむ黔主に安住の地を見出さんとするにある。と云つて、また、淺薄なヒュマニストでもなく、マソヒズムの如き受難病患者でもない。仙に歸することによつて己れを全うする賢者でもある。

先づかれの劉邦に従つた目的が英雄崇拜や、利己榮達にないことを注目しなければならない。

二世皇帝の三年、沛公劉邦がまだ秦を攻めてゐたころ、酈生がはじめて張良を推薦する。經濟の才を抱き湯の伊尹、周の呂望にも劣らず、若しこの人を得玉は、秦の破れざるを患ひ玉ふこと勿れと云はれて、沛公大いに乘氣になる。その頃張良は韓に仕へてゐるのでよその家臣を横取りするわけである。酈生の計略で、沛公は韓王に秦を滅す義軍を起したのだから糧五萬石を送れと申し込む。韓は一度秦に亡ばされいま秦の頽勢に新しく立ち上つたばかりだからそんな餘力はない。そこで張良を派して言譯けをしようとする。このとき蕭何曹參等は沛公と共に張良をひつぱりこんだのである。張良はその際はずきりと韓の爲めに仇を報ずるために君に従つて其の志を遂げんと曰つてゐる。

また、沛公が項羽に先んじて入關し秦を亡ぼしたとき秦の子嬰玉璽を沛公に授ける。沛公は咸陽宮に入つて、三十六宮、二十四院、蘭室椒房、瓊樓、玉宇、盡善盡美なるを見、后宫に腰を落つけてしまつて、重寶、錦繡、狗馬に目を奪はれ、紅顔の美女數千人に魂宙外に飛んで、『われ此に在つて人心を安じ、諸侯に相争ふこと無からしめん』と宣うたのである。このとき張良は『殘暴を除く者は、身儉素を行ふべし、然るに此に留て樂をなさんとし玉ふは、此れまさに

秦の無道を繼ぐものなり』と直言してゐる。

また、遙か後、漢楚の對立のときに蘇東坡の、『當_三淮陰（韓信のこと）破_レ齊而欲_三自王。高祖發_レ怒。見_ニ於辭色。』と云へる如く、また史記評林列傳第三十二の淮陰侯列傳中にも、『漢王之困_三固陵。用_三張良が計。召_三齊王信。遂將_レ兵會_三垓下。項羽已_三破。高祖襲奪_三齊王軍。』とあり、張良の私心なき卓見は劉邦の慾張りを制しその足を躡んでこれをたしなめてゐる。

更にまた、漢の天下となつたとき、張良は滅秦の目的の一であつた故國韓のためと云ふ唯一の私心をすら抛ち、六國の子孫を侯として封建制を強度に復活せしむる方法をとらず、劉氏の一族を封じて王とする中央集權制をとつてゐる。

その際諸將恩賞に不滿のものが動搖したときに、劉邦しよすん雒水の敗軍のとき項羽の臣にして、劉邦を追撃これつとめ、ために、後、漢に降りしも高祖のひどく憎惡してゐた所の雍齒を忠臣なりとして侯に任じ、その際項羽の臣であり乍ら高祖を扶け降りし後も高祖に愛せられてゐた丁公を不臣なりとして罰せしめ、行賞の公平ぶりを發揮して臣下の動搖を防いだのである。

最も注目すべきことは、韓信謀反の後張良は病に託して閑居し、人生を白馬過隙の如く觀じ

一切の功名を浮雲の往來するが如く見て、王爵をうけない。その子張辟の不平に答へて、富貴榮華をいましめ、

『我いま醉裏の乾坤、壺中の日月を弄び、雲水の閑なるを愛して、江湖の瀾きに笑傲し、獨り一室に坐して終日萬慮を消し、寂寥の濱に處ると云ども、胸中快く樂み、藜藿の食を甘と云ども、物外に逍遙として心を寵辱の間に驚さず、身を利名の中に苦しむることなく、靜に老子の玄虚を養ひ、萬物の自得を觀じて、眞を保ち精を養て天年を樂み、汝等をして安く家業を治めしめ、永く朝廷の良臣たらしむ』と道破してゐる。

後更に蕭何が一時獄に下れる後は益々いやになり、留侯をも受けず終南山に入る。その飄々然と立去るを高祖は嘆息目送久しうしたと云ふ。これは韓信、英布、彭越等の元勳が相ついで誅せられたのいや氣がさしたのと、呂后と戚姫の太子争ひのとき太子をかへぬ方がいゝとの見地から唐宜明、綺里季、崔少通、周元道の四賢人をすゝめたので、こんな閨閥の争ひにまきこまれて罰など喰ふのを馬鹿くさく思ひ、この四皓を供つて入山したのである。

以上高祖と張良との接觸の主なる切斷面を、私は呈示し得たと思ふ。國家を鎮め百姓を安じ

兵糧を運送して三軍を養ふことは朕蕭何に及ばずと云ひ、百萬の勢を率て、戦へば必ず勝ち、攻れば必ず取ること、朕韓信に及ばずと言ひ、張良に對しては籌を帷幄の中に運らし勝を千里の外に決する深謀を稱する高祖の宏量なることは否み難い。

けれども、張良の志は社會にあつて、私利になく、古來革命家中にもこの位る清澄な人物は少ないと思ふほどだ。高祖をこれに比せば如何？ 獨りあらしめば、かれ畢竟木強人である。無頼ルンベンの質、よほどしめつけておかぬと阿房宮に入つて美女にうつゝを抜かすのである。一つは彫琢の美玉、他は混濁の大地。一つは完成されたる先秦のインテリゲンチヤ、他は大いなる自然人である。

かれ高祖は大自然人である。大自然人なるが故に俗人間的であると同時に超人間的である。幸田露伴翁嘗つて頼朝を論じて顛落する大石に比較せられたと記憶する。私は、高祖を敢て自然現象に比する。惟ふに古來英雄は非人情である。焚書坑儒の始皇は蘇東坡、始皇論にある如く『雷電鬼神不可測識』ものに似てをり、項羽は子嬰を殺し秦の墓を撥き、阿房を焼き、その上秦の降卒二十萬を新安に坑殺するの亂暴人である。高祖も功臣誅戮のレコード・ホールダ

アとして古今に冠絶する人物である。項羽は兵卒が病氣をしたからと云つて泣いて慰撫し懇切に至らざるなく、婦女子の如き微細なる感情家のくせに、大きな賞與を與へ得ないケチン坊である。高祖は寛仁大度かと思ふと、すつかり働きあげた年期奉公を一朝にしてボンと首にして平氣なものである。共に奇妙不可思議な存在ではないか。

かゝる自然物の如き怪物の間にあつて、首尾一貫、理路整然、張良の如きは蓋しめづらしい。かれは自然現象に似、われは社會理想の使徒である。高祖は超人情、非人情、張良は人情の極、社會正義の爲人である。かれは大いなる私心の團塊。われは虚靜無私の神仙である。

高祖を大なりとすべきであるとしても、だからとて、張良を小なりとすべきではない。彼此共に別種、異質の獨立人、道合して共にし、合はずして去る。高士大海に舟遊するが如きもの乎。

少なくとも、私には、張良を想ふときは興漢運動は社會改造の如く映じ高祖を見るときは王朝革命に類するものあるを感じるのである。

四、張良と韓信

韓信は淮陰人也。始爲布衣時。貧無行。不得推擇爲吏。又不能治生商賈。常從人寄食。人多厭之者。と史記列傳にある。人の尻馬にのつて飯食にありつかうとねらふ、だらしのない男であつたらしい。漂母にめしをめぐまれたり、股下より出て、蒲伏したのは餘りにも有名な話である。この股くぐりの話しはほめる人が多いが、私は餘り感心してゐない。私ばかりではない。たしか蘇老泉であつたか、……韓信は股までくぐつて忍耐したがその立志の動機が一身の榮達にあつたから慾で動き終はりを全うし得ないのだ。これに比して張良は志が韓國の復仇と安民にあるから大きな忍耐力をもつてをり、その身をも全うしたのだと云ふ意味のことを論じてゐたと記憶する。

韓信が齊を平定したときその宮殿の高樓、層臺、金銀、珠玉を鏤て華麗なのを見て、莞爾と笑つて喜んだ。蒯徹の計を用ひて、劉邦に齊王たらんことを求め、高祖をムツと怒らせてゐる。幸ひ今楚の亡びぬ先きに韓信が叛いたら大變だと云ふ張良の深慮から韓信は齊王たることを

許されて夢中になつて働き項羽を平定する。その後になつて高祖は『將軍功高く威重ければ、小人に猜み妬まれて永くその位を得ること能はじ、早く元帥の印を還し楚の地を鎮守し、全く君臣の義を得て子孫萬世の業を修せよ』とアツサリ韓信を楚に左遷してしまふ。このとき韓信は手足の措くところを知らず、『大王臣を齊王に封じ玉ひてより年久し、今若し改め封じ玉はば甚だ宜しき所に有らず』と不得要領な抗辯しか出來てゐない。後叛意を抱いて誅せられるに至つたのも已むを得ないとは云へ悲惨ではないか。

軍略的力量と材幹に於て韓信の右に出づるものはない。かゝる卓絶の素質が、低調小兒の如き利己心と結びついて淮陰公韓信の本質を形成してゐるさまは寧ろ奇妙なほどである。慾の深い凡夫の韓信である。そしてその強慾を實によく利用したるものが、わが張子房である。劉邦が張良の智と樊噲の勇により鴻門の會に危機を脱し蜀に入るとき張良はよき大將軍を得る爲に一時劉邦に別れる。そのとき范増が項羽にいくら推薦しても、韓信は項羽の下に執戟郎以上には昇り得なかつた。かれは『梁間の巧燕住まりて多時ならず』と云つて去らんとする心があつた。子房は韓信が刀劍を愛することを知り秦の宮中で得た寶劍でかれを釣つてゐる。三振りの

劍があり、一は天子の劍で白虹紫電と稱し、仁孝聰明敬剛儉學の八徳ある人に既に賣つた。それは劉沛公である。その二は宰相劍で龍泉太阿と云ひ、忠直明辨恕容寛厚の人、蕭何に賣つた。第三の元戎劍は干將莫邪ととなへ廉果智信仁勇嚴明の大將を得て賣らうと思ふが、今日まだ人を得ない。それであなたをその人と見込んで賣りに來たのだと、うまく持ち掛けてゆく。

「わしは無名の小子だ。その上買ふ金がない」
「いや將軍の胷中に養ふ所は孫子吳子にも過ぎてゐる。たゞまだ好君に遇はぬだけだ。千里の馬も伯樂に遇はねば槽櫪の間に駄馬扱ひされるが、一旦伯樂に遇へば千里の麒麟となつて、絶塵追電天下無雙となるのだ。將軍も好君に遇へば元戎となつて、變化風雲、振動天地。坐鎮中原。享九襲榮。人臣の貴を極めるであらう。今日のやうに碌々してどうする。」

韓信は榮譽權勢を思つて、フラフラとなり、その上寶劍がたゞでいいと聞いてはもうたまらぬ。終に説服されて劍を收め割符をもらつて褒中へ赴くことになる。そして他日軍を東向するときは雞頭山、孤雲兩脚山、から陳倉、斜谷に出る捷徑をとれと計を餞けされてゐる。

韓信は才幹拔群、張良は思慮卓絶互に兄弟たり難きものである。公平に見れば、力量に於て

韓信が一步優れてゐるかも知れない。しかも憐れむべし、利に出づるものは、刑に死し、義に出づるもの仙に歸するのである。

即ち、大史公『日假令韓信學道。謙讓不伐己功。不矜其能。則庶幾哉、於漢家可下以比周召太公之徒。後世血食(祭らるゝこと)矣。不務出此。而天下已集(平定之意)。乃謀比逆。夷滅宗族。不亦宜乎。』(淮陰侯列傳)

五、實踐的黃老の學徒

張子房は蘇東坡の留侯論によると、その特長は忍耐の強い點にある。かれ子房は、狀貌婦女子の如く、面美玉の如くである。そしてその内面に強靱無比の忍耐の意力を藏してゐたのだ。韓生の評した如く楚人沐猴而冠する項羽とは正反對の爲人であつた。高冠を戴き博帶を著くる韓國宰相千金の子である。かれは柔よく剛を制する所謂柔道の士であるが、これは全くかれの黃老學に出づる。かれが口癖のやうに『老子玄默の術を倣ひ、莊子が放蕩の遊びを學び、箕山の巢許、首陽の夷齊が跡を追うて名利を罷て雲水を好み、是非を避けて山林に入、仙人を尋て

妙論を聞かんと欲す』と言つてゐるのは、決して出まかせの道士の口説でなく、本質的のかれの志向を物語るものである。

かれは病身であつた。老莊虚靜に執したのも、かれの生理的要求でもあつたかと思はれる。だから、かれは、蕭何のやうな七面倒な宰相の役にもふむきだし、三軍を叱咤する韓信の眞似も恐らく出来ない。これかれが謀士として帷幄の人であつた所以である。この點これ等すべてを兼ねる諸葛孔明に稍劣るとも考へられる。しかしこれは先漢の方が、蜀よりも人材多く分業的になつたためとも考へられる。

かやうに張良が病身白面の人であつたからと云つて、決して普通の長袖者連に伍すべきではない。其の膽大なること斗の如きものがあつた。

若かりし張良は力士蒼海公を雇ひ、始皇が陽武縣博浪沙を巡狩するとき、百斤の鐵鎚を投下せしめてその暗殺をはかつてゐる。このことは彼が放浪時代の企てであるが、此人にして此事ありの嘆聲を發せざるを得ない。乍併、この位るな爆發力ありたればこそ、かれが後世の忍耐力和、遂行力などが養はれたとも謂ひ得る。老莊學徒たる張良にこのアナーキステックな行動あ

ることは、一面少しも不思議ではない。またかれにこの博浪沙の一撃あることはかれに對する無限の魅力を感じしめる所以でもある。

蘇東坡が評するやうに、子房が忿々之心を忍びず、匹夫の力を以て、一撃の間に逞しうせんとした。此の時かれの死せざりしは不思議な位で、間髪を容る能はざるもので『蓋亦危矣』と云ふべきである。『千金之子。不_レ死_ニ於盜賊。何者其身可_レ愛。而盜賊之不_レ足_ニ以死_一也。』と云ふべきである。子房蓋世之才を以て、伊尹大公之謀を爲さず、而特に刺客荊軻聶政之計に出づるのは少しく不適當であつた。こゝにかれが僥倖にも死なずにすんだればこそ圯上老人の不遜の態度を忍び得たのである。……と東坡は留侯論に切々として説いてゐる。

張子房が、下邳に黄石公に會ひ、泥中に履を拾はせられ、下男あつかひにされながらよく忍んでこの老人から太公望が兵書を授けられたと云ふ傳説も一つに、其後の張良が忍耐力をたゞゆる寓話であらう。そして張良が功成るの日、天谷城の東に黄石を發見せば余と思へとその老人が云ひ、果して言の如くであつたと云ふのは、かれの學ぶ所が黃老之學であつたことを意味するのであらう。

張良の黄老學は博浪沙の一撃を初めとして恐ろしく實踐的なものであつた。かれの生涯の努力はその實踐的努力にあつた。殊に劉邦左遷入蜀のとき、單身歸京して三箇の計を成就するあたりは、後世、草蘆を出づる際、天下三分の計を立てた臥龍に優るとも劣らぬものである。項王をして都を彭城に遷させ、關中を殘し留めて大王の都を建つるの地とすること、天下の諸侯に説て楚に叛き漢に歸せしめ項王西征の心をなからしむること、興漢の大元帥を求めることがその三つの方略であつた。そして別れてから獨斷で蜀の棧道を燒く、漢王も士卒も歸東の不能を知つて叫喚してさわぐのを、張良にことづかつた蕭何がかれ等を慰撫してゐる。それは、漢王に東歸の意なしとのカムフラージのため、三秦王(楚が秦の三將を漢の押へに封じたるもの)を油斷せしめるため、味方の兵東歸の不能を知つて離散せず、諸侯争うて戰ふことあるも、我兵を盜むを得ざらしむるための四つの利があると説いてゐる。

惟ふに張良が大計中最大なものはこの三計であつたらう。張良が水ももらさぬ謀計の中には頗る雅趣に富み、飄逸味のあるものも多い。九里山に項羽を圍んだとき、張良は洞簫を吹奏し戀郷の悲歌を唱和し、楚の兵をして望郷の情に耐へざらしめてゐる。その響清和、一高一低五音

不亂、六律和し、露の梧桐に落ち。風し瑤珞を送るが如く、鶴の九臯に喚き、漏の銅壺に滴るが如くであつたと云ふ。ために楚の兵大半散亡し項羽も終に窮命するの外はなかつた。四面楚歌の計がこれである。曾子固「虞美人草」の詩に、(古文前集による)「三軍散盡旌旗倒。玉張佳人坐中老。香魂夜逐劍光飛。」と虞美人の自刎を詠するくだりはこの場の光景である。因みに虞美人草とは虞姬自刎の墓上に咲いた草花の名であると云ふ。

司馬遷が「項羽贊」に「自矜功伐。奮其私智。而不師古。謂霸王之業。可以力征。經營天下五年。卒亡其國。身死東城。尙不覺悟。而不自責過矣。乃引天亡我非用兵之罪也。豈不謬哉」とあるは、項羽が剛強の自滅を説き盡したものである。そしてまた張良が柔よく強を制する黄老の奥儀を思はしめるではないか。

東坡も留侯論中に「項籍唯不態忍。是項百戰百勝而輕用其鋒。高祖忍之。養其全鋒。而待其弊。此子房教之也。」と。謂つてゐるのである。

張良の黄老學說の最もよく現はれてゐるのは、蕭何と共に沛公入關のとき秦の苛法酷律をやめて法三章を發したことであらう。

人を殺すものは誅し、人に傷つけ盗みするものは輕重を論じて罪に行はん、この外秦の法度を全廢すると云ふのである。これは虚靜の爲政に近きものではないか。社會科學の整備せられたるものでも、現實のみを見る俗眼からすれば到底行はれ難きが如くである。が、前漢のとき法三章の如き黄老説の實施せられたるを思へ！

項籍は詩となり、劉邦が帝となるも、張子房は飄々乎として四皓と共に終南山に仙となる所
以も、じつにもこの黄老説の結實せる所以か!? (1931. 3. 7 擲筆)

諸葛孔明の人格

一、前書き

支那文化に於ける武侯諸葛亮の存在は、ギリシヤ文明に於けるソクラテス、プラトーン、アリ
ストールの如きものがある。今日世界的文化の水準下に埋没して、群少人物が右往左往する半
植民地支那を目睹する者にとつては、懸隔の餘りに甚しいのに驚く。封建的土地制度やその
上に立つ督軍的政治制度が根強いかと思へば、資本主義の新興途上にあり、その上共産黨の蟠
居せる現代支那は歴史上最も複雑混亂せる實狀にあるから、その舞臺上に踊る三種三様の諸人
物も徒らに多種多様で、深き根柢ある素養、資質をもつてゐないのも無理ではない。この錯綜
せる難局を底の底から救済するやうな人物が若し現はれたとすれば、それは驚異すべき歴史的

巨人であり得ると思ふ。しかし今はその片鱗だに現はれてゐないやうだ。かゝる時代に孔明の人物を顧望して見ることは、單に歴史的回顧の趣味とのみ云ひ得べからざるもので、その資質、その含蓄はヤング・チャイナにどれだけ内的の教養を與へ得るか計り難いものがあらう。

筆者も少年期の憧憬を此人に注いだ。三國志を通讀反復十七・八回に及んだ。そんなものを讀んで馬鹿と云はれやうが、空想と云はれやうが、田舎生れの鈍根はへこたれず、今だに愛讀書とし時に讀み返し讀み返せざるにあらぬ。現代支那人への示唆はどうでもいゝが、筆者はあくところなく此人物を反芻することをやめない。何かに役に立つと云ふやうな氣分ではない。何らしら打れるものがそこにある。この人を考へずにはゐられないものが常にひそんでゐる。年齒と共に、不斷に、感心する内容が變化しては來る。が、關心は深くこそなれ稀薄になることがない。

従つて、人物論俎上に拉し來ることは、實は適意ではない。その中が俎上に餘りあつて、こなせないばかりでなく、論じ去り得ないものが残るからである。だが、私は、自分の今の年齢

に於て、一度試みて見よう。それも録事の程度で。

いつの日か、二度三度更に繰返して見ることを豫想しつゝ。

二、孔明の家系、人物、學識及びその思想

孔明の生れたのは後漢孝靈帝光和四年であるから日本紀元八四一年西曆一八一年である。死んだのが蜀の建興十二年日本紀元八九四年西曆二三四年である。従つて没年五十四歳の短命である。劉備の三顧をうけ臥龍の草廬を出たのが二十七歳であるから、活動期は二十六、七年の間にはすぎない。

諸葛氏とは春秋時代の宋の景公の大夫瞻葛氏の訛りとも云ひ、葛氏の屬とも云ふ。瑯琊諸縣に住みし葛氏と云ふ意味で諸葛と呼ぶとも傳へ、又秦末の葛嬰なるものの子孫諸縣侯に封ぜられたためかく呼ばれたとも謂はれる。孔明は後漢の諸葛豐の家系と云ふから相當の門閥の出である。山東省に生れたが幼にして父母を失ひ、(父は珪と云ふ) 縦父玄に従ひ荊州に移住した。今の湖北省附近であつた。玄は荊州の牧、劉表に仕へたが孔明十七歳のとき玄變死し、由來孤

獨の裡に半耕半讀の貧困生活を過した。湖北省襄陽の西方隆中、樂山の山ふところ、泉流の淙淙、處林の深々たるところに草堂を結んで閑居してゐた。巖峭の聳立するあたりはがれが梁父吟を誦し、琴線を弄び、讀書に身をやつしたところである。隱士崔州平、徐元直、孟公威らと交はり、啓誨さるゝ所多かりしと云ふが、當時夙に德操の氷鏡の如き明智と、龐士元の鳳雛の如き才幹と併稱され臥龍としてその大英才をたゞゑられてゐたのであるから、雞群中の一鶴たりしことは疑ひがない。

汝南靈山の鄧公玖や武當山上の北極教主の如き仙人に三歳祕録、六甲祕文、五行道法を學んだと云ふが、これは張良の黄石公と同じで、傳説的説話と見るべきであらう。しかし、その思想的教養中に荆楚の老莊思想が多分に存したることの示唆にはなると思ふ。

かれの著作は後人の擬作が多いが、傳ふるところによると、武侯戒(一卷)、武侯儒家集誠(二卷)、十六策(一卷)、八務七戒六恐五懼、論前漢事(一卷)、貞潔記(一卷)、陰符經註(一卷)、將苑(一卷)、琴經(一卷)、兵法(六卷)、漢書音(一卷)、八陣圖(一卷)、渭南祕訣(一卷)、行軍指掌(二卷)文武奇編(二卷)、五行雲霧歌(一卷)、十二時風雲氣候(一卷)、占風雷雨電(一卷)、年代風雨占(一

卷)、兵書手訣(一卷)、六軍鏡心訣(一卷)、平朝陰符二十四機(一卷)、武侯相山訣(三卷)、武侯相書(一卷)、大明堂鑑(一卷)の類がある。兵法、天文、道法等に亘る。

かれの思想は、孔孟の經學に、管晏の功利主義、申韓の法治説、孫吳司法等の兵術を兼併し、これを老莊の超絶せる哲學で包んでゐる。その規模頗る雄大であつて、これを待つて始めて、

蜀の建國も、強大なる魏、堅固なる吳との角逐もなし得たるものと思ふ。

蜀の建國が最も遅れたのと、領土及兵力とも魏の十分の一にすぎず、山間の僻地なるため糧食も少なく運輸の便も悪く、人材も比較にならなかつた。そのために孔明の治政には苛法酷律の傾向があり、刑名説に傾く感があつたが、これは蜀の國情の然らしむる所に基くと云はねばならぬ。邊陲新附の領域に、寡兵を以て立國せるものの、己む難きところであつた。

その斷罪の趣きも、遮民に寛濶であつて、上司將領に嚴格であつた。しかし、それすらもその發意するところが公平無私の心境に基くがために、被處罰者も少しも怨恨を抱かなかつたらしい。孔明無二の親友馬良の子で、孔明が自分の子のやうに可愛がつた馬謖が街亭の一戦に軍令に叛いて敗退するや、泣いてこれを軍法に問ふた。斬られた馬謖も「明公諤を見ること猶ほ

子の如く、謾、明公を視ること猶ほ父の如し」……「謾死すと雖も黄壤に恨みなきや」と少しの恨みもとゞめてゐない。此の敗戦のとき面白いのは、軍書に明通した學者の馬謖が無謀の敗をとつたのに、無學文盲で讀める文字が七つか八つに過ぎない王平が全軍の潰亂を喰ひとめてゐることである。この經驗家を添え、嚙んで含めるやうにした軍令を破つた馬將軍の罪過は重からざるを得ないのは當然である。而も全軍失戦の責を負ふて孔明自身丞相をやめて、右將軍に貶して法を明らかにしてゐる。

又孔明に嚴罰された李嚴も、孔明死後、痛嘆の極、病を得て死歿した。廖立も賊子扱ひにされ平民の列に下されたのに、號泣措くところを知らなかつた。彭承も誅せられたとき「足下は當世の伊呂」と敬重してその命に服してゐる。

感令の行はれたこと武侯の如きは極めて稀れであつて、武將を統括する上にも少しの危氣をも示さなかつた。

豫州にあつた劉備が人材を求むるに急であつたとき、徐元直が孔明を推舉した。備が君連れて來いと云ふのに、元直は自身お出でにならず駄目ですとの答へた。備は三度び臥龍居を訪

問した。此時備と共に黃巾賊平定の義兵以來血盟して寢食を共にし、戰陣に死生を共にした關羽及張飛はひつくくつて往かうとて草廬に放火せんとまでいきまいた。孔明が天下三分の大計を立て、三顧の禮に酬ひ、草廬を出でて翌年、早くも軍師となるや、これら猛者連は承知しないで事毎に孔明を青二才扱ひに輕蔑した。これに對し備が吾れに孔明あるは猶魚の水あるが如しとの一言に屈し、自來孔明の人物才幹は全く諸將を敬服せしめるに至つた。勳等地位などに單純に心ひかるゝこと多き武將間の軋轢の如きもよく制禦することを得た。五虎將軍の一人馬超の重用さるゝに際し、關羽が荊州の大守であるながら武を比較せんと申送つたのに對しても、髯の絶倫超群なるに及ばずと返答して、關羽をひげ扱ひしながら、丸く收めてゐる。揚儀と魏延の對立だけは生前救治し得なかつたが、これは謀叛骨のある延の牽制策であつたと思はれる。しかも死後巧みに延の反謀を制紂する方策をのこしてゐる。

孔明の刑罰手段と、統制方法はかくの如く透徹せるものがあつたが、これと云ふのも、一にかれに私心なく廉潔比儔なき人格の致すところであつた。

陳壽の云ふやうに、百姓を撫し、儀軌を示し、官職を約にし、權制に従ひ、誠心を開き、公

道を敷いたのも、大半かれの政道が高遠なる人格と卓絶せる才幹から出たからであつた。人がかれに王と稱すべきを勧めたのに對しても、吾れ本東方の下士、誤まつて先帝（備）に用ゐられ、位人臣を極め祿百億を賜ふ。今討賊未だ效さず、知己未だ答へず、而して自から貴大なるは其の儀に非ざるなりと云つて肯じなかつた。

これは、劉備が關羽の葬合戦に巫陵、夷陵の邊りで吳の陸遜に大敗し、白帝城に殂せんとするとき、わが嗣子輔くべくんば之れを輔けよ、若し其の不才なる、君自ら取るべし、と云つたのに對して力を竭し之れに繼ぐに死を以てせんと答へた頃からの一貫した心理の現はれに外ならない。

その五丈原に死んだとき、『臣が家、成都に桑八百株、薄田十五頃あり子孫衣食自ら餘饒あり。臣が身、外に在り、別の調度なく、時に隨ふの衣食悉く官に仰ぐ、別に生を治めて尺寸を長ぜず。臣死するの日、内に餘帛ありて外に盈財あらしめて、以て陛下に負かざるなり。』と上表してゐるのは、いかにその生活の簡素なるかを示して餘りある。

實際、妾に着換一枚なかつたと云ふのが、この大宰相の家庭生活であつた。妾のあつたのは

その時代に當然のことで、別に異とするに足りない。「慾を少なくし心を清くし、己を約して民を愛し」とは暗主劉禪に表した最後の言葉であつたが、かれの治政の根原的鐵則でもあつたのである。六尺の孤を託すに足り、大節に臨んで奪ふべからずと云ふやうな道義的の文句は、倫理的な意味のみによつて存するのではなく、古代的君主制に於て二代以後の政治的原理であつたからこそ倫理的意味があつたのだ。そして孔明は方にこれを實際に體現してゐたと曰はねばならぬ。此邊孔明の思想に孔孟的影響の著大なるものあることが觀取される。

孔明の思想人格及學識はおよそかくの如きものであつた。

その才能は多岐、多彩で往くとして可ならざるはない。『今天下三分し、益州疲弊す。此れ危急存亡の秋世』云々と名文として知らるゝ出帥すしの表に見ても卓絶せる文章家たること明らかである。又彈琴の雅味にも徹し筆、跡、丹青亦見事なものであつたと謂ふ。書生時代から羽扇綸巾の隱士の風流に安んじだし、丞相の位にあつても、葛織きびらおりの簡單帽に素木の駕籠で戰場を往來した。趣味の人としても雅懷の極地に達してゐたことがわかる。特に大言壯語することもなく、奔放な行藏もない。謹嚴、儉素な普通人にすぎない。悪いことを改めて、謹しみ深かつた平凡

人にすぎない。かれの學識、思想、趣味、文章、道義から政治、軍事に至る迄、奇なく矯なく坦々として流水のやうに素直で且つ自然であつた。統治者としても特に威嚴をととのゑたわけでもなく衆と忌むなく、功を録し瑕を忘れるだけの心構えであつた。

平易平明に徹底せるものが、最大の偉人型をつくる。従つて偉人と云ふもよし、普通人と云ふもよし。どうしても云へるものが、人物の完成型であるかと思ふ。怪力亂神を語るものは、人物を知る資格はない。自然生の資質と努力この外に何も無い。非凡たらんとのみ試みる人物型には、無理が多い。これも一種の偉人型と云ひ得るが、萬人の愛敬に價するかどうかは疑はしい。不人情と云ひ難きも非人情たるを免れない。従つて孤高、狷介、超人間的自然物の感觸がある。その子孫も多く斷絶して滋味に乏しい。

孔明の子孫は多産にして繁榮とは云ひ難いが、相當猶餘力を存してゐる。實子瞻は後、軍師將軍になつてゐる。孔明は彼に君子の行、靜を以て身を修め、儉を以て徳を養ふと訓え、澹薄でないと志が明らかにならず、寧靜でないと遠きを致すことが出来ぬと云つてゐる。學問は靜かでなければ駄目、學なくば才を廣ふすることが出来ず、惰慢だと研精を怠るし、險躁だと理治

し得なくなるとも説いてゐる。此の子供ば、董充が蜀を打破するとき琅瑯王にしてやると誘はれたが峻拒して戰艦の中に死没した。外に養子喬（甥に當る）があつた。

瞻の次兄京（長兄は尙）は後晋時代廣州刺史に用ひられてゐる。

孔明（亮）の兄弟はどうかと云ふと、兄の瑾は吳の要人、弟の均は同じく蜀に仕へた。瑾の

長子、格は陸遜の次に吳の大將軍になつた。格の吳軍と戦つたこともあ

又亮遠縁の諸葛誕は魏にあつて、明帝の頃征東大將軍になつた。格の吳軍と戦つたこともあ

る。格及び誕二人ともその終はりを全ふしてゐない。

三國抗争のとき諸葛氏が各國に於て、時代は少しちがふが、要人として樞要の地位を占めた

のは奇と云ふべきである。その中孔明諸葛亮最も優れたるは云ふ迄もない。

三、軍略家、軍政家としての孔明

遲塚麗水氏の入蜀記に、孔明用ふるところの釣鐘様の一種異様の兵器のことがあつたと記憶してゐる。之は聽音器の類ひで多分地に埋めて、敵兵の襲來を豫知したものであつたやうに思ふ。

通俗三國志などに見ると、地表を縮めたり伸ばしたり頂度孫悟空のやうな妖術を用ゐるやうに書いてあるが、あれなどは荒唐無稽の空言である。當時の科學と學術の最大限を集積し、これに發明の才を加えて、工夫せる兵器に驚くべきものがあつたのを誇張したものであるに相違ない。

木牛流馬と稱する動物の形體をした運搬機をつくつた。多少自動的のところもあつたらしく、山間の險路の運輸困難をこれで緩和した。

又連弩と云ふ連發の弓器をつくつて蜀軍の精銳部隊を編成した。

又衝車しゅうしやうていなる攻城戰に用ふる櫓をもつくつた。更に、敵兵の襲撃を防ぐ、鐵蒺藜てつしかりいなる鐵製の障礙物や、鐵甲てつかぶとやうの滿袖鐵鐵帽や、竹槍の類をも使用した。これらが、青龍刀、弩、弓、刀等のみに依存した當時の武器に比し異色あるものであつたことは多言を要しないであらう。

これに應じて連弩士隊を組織し、野蠻人を飛軍に編成し、又散騎武騎等斥候、急襲用の騎兵隊を結成したりした。

戰術としては八陣として有名な大部隊の陣形を編み出した。これは中央軍を中心に八軍列を

圓形に直形に、或ひは方形、曲形、銳形に配する陣立てであつたらしい。

孔明は單にかゝる技術的な點ばかりではなく、戰場におけるかけ引きに卓絶せる手腕を示した。南蠻を制御したときの七禽七縱の如き最もよくその自由自在なる出沒を示してゐる。孟獲なる野人豪傑を相手に七度捕虜とし、七度これを許した馭引の巧妙は寧ろ小説的でさへある。

この征戰にて注目すべきことは戰に戰略的妙味だけではない。その對南戰爭は今の貴州、雲南から廣西南部に互つたやうだが、これら植民地に對して、武斷政策によらず七禽七縱の平和政策で臨んだことは最も注目すべきである。従つて、雲南の夷人どもははじめて農桑をはじめ氏姓を得たし、又貢賦を行つて、蜀に臣從した。故に官吏を派遣して遠隔の異なる習俗の民衆を無理に統治することをしないで、主腦者だけを成都に居住せしめ、自主主義を採つたのである。

そのため失費を防ぎ北伐を一貫した國是とすることが出來たのである。

戰略家軍政家としての孔明の活動は、劉備に屬してから終始變はるところがなかつたが、殊に備の死後、蜀吳同盟を強固にし、五度北伐を行つた後半期に最も著しかつたと云へる。刻苦精勵、陣中巨細と云はず獨裁して終に「病膏肓」に入つてまた起たざるに至つた。屢々咯血して

あるから肺病で斃れたかと思はれる。この晩年に於ける祁山を中心にした幾回かの攻防戦は、華々しさに乏しいが、頗る微密な進退の妙を極めてゐるやうに思ふ。

孔明の戦略家、軍政治家としての威大さはそれらの才幹が常にかれのステーツマンシップと不可分に結合してゐるために發揮されたのである。

かれの南征は北伐の準備であつた。その北伐は吳との同盟の確乎たる政策の基礎なしには行はれなかつた。

更に溯つて、新野を追はれ曹操百方の大軍が怒濤のやうに急追し流離遁竄の窮地に陥つた劉を助けて、吳の魯肅、周瑜と折衝して互角の同盟を結んだことは臆て荊州の一部を得て、鼎立の第三帝國を建設する方策に基くのである。當時劉軍の兵力は約二三萬で、吳の水軍數萬と同盟するだけの力をもつてゐたことは確かであるが、その地盤は荊州の一角に足をそばだてゝゐるやうなものだ。鄂縣の樊口にわづか足溜りを得てゐた敗殘の一軍團に過ぎなかつた。この地盤で對等に吳と聯絡し得たのは、一握の兵力ありしと、巨大なる人的要素、——即ち孔明の智略と關、張、趙の武略とにあつたと言ふも過言ではない。この國策が果然、赤壁の鏖戦、烏林

の急追撃として知らるゝ華々しき大會戦と結びついてゐるのである。

曹操が長江を前にして、統一の業一舉に成らんとし、敢へなく蹉跌したのも此一戦であつた。「對酒當歌、人生幾何、譬如朝露」と、「吟じ月明星稀、烏鵲南飛、遶樹三匝、無枝可依、山不厭高、水不厭深、周公吐哺、天下歸心。」と詠じた赤壁の賦も此際の名詩として知られる。

火攻は孔明、周瑜の一致せる戦術であつた。北方山地大陸の北軍は江上の生活に馴れず、大船の舳艫を相接して、僅かに安坐してゐたのが、吳の黃蓋の擬降せる火船のために焼打ちされてしまつた。

孔明の戦争は常に確立した政治的見透しによつてなされた。この役後荊州の大半を攻略し、堅くこれを守つて、龐統をして成都進撃の功を收めしめ、かれが中道に斃れし後、荊州を關羽に托し堅く守るべきをいまして西進し、終に蜀の基礎をつくつた。

かくて、三國鼎立の目算を如實に具現し得たのである。支那大陸はゲオ・ポリテイクの觀點から見ても三分的地勢を示してゐる。それは今日に於て

もほゞ相似してゐる。北方による日本、長江以南に據る英米佛、西方奥地を中心とするソヴェットの對立状態であると大觀し得るからである。この形勢は古來稍その規模を一つにする。周時代、周は西支那に興つて、東北の殷に對し、南方には荊蠻が蟠居してゐた。春秋時代にも秦は西方に、南方に楚、北支那は齊、晋、宋によつて代はる代はる支配されてゐた。戰國の頃も五國が中心となり、西に秦、南に楚があつた。秦の統一後衰亡に及んでは、漢高祖は漢中を本據にし、項羽は南方から秦に迫つた。その直後も、項羽は南に、韓信は山東に據り漢中の高祖と三派對峙した。

従つて漢の到壞期に於て、曹操の壓倒的努力と孫權の堅韌なる地歩が長江の南北に併立した場合、残されたる根據地は中心地荊州（湖南湖北）の半ばと益州（四川）を中心とする漢中その他西方地域しかないわけである。この大勢を知るだけは一通りの當時の知識階級の者でも出來たことも知れない。だがこれを實際化する事は、孔明の智能手腕のはじめて能くしたところである。

蜀は今日でもそうであるやうに、鹽位が主要産物である。此外鐵、織物、馬位りの産物しか

當時なかつた。孔明は鹽、鐵等を官業經營に移して、吳と交易して國富をはかつた。

しかし、平地少なく糧食乏しく、經濟力貧弱なる上、人口も少ない。従つて、人材、兵力ともに、魏吳に遙かに及ばなかつた。だからとて、そのまゝでゐたら、魏に壓倒し去らるゝ危険があつた。『才弱く敵強きを知り』ながら却つて屢々北伐せざるを得ず、戰禍重疊の裡に、五丈原に病弱の勞體を朽ちしむるに至つた。戰國の常として是非もないが、かれをして統一的古代國家の大宰相として治政に専念せしめばその治績は蜀の丞相としてのそれに幾倍したかも知れられなかつたであらう。

巨星地に墜ちて後も、後圖を誤まらず蔣琬を中心に、姜維（護軍）揚儀（長史）費禕（司馬）らの文武官をして、死せる孔明、生ける仲達を走らしめて、危急を救ひ、蜀の存立を約三十年間可能ならしめたのである。

※

※

春秋、戰國から三國にかけて支那古代文化、思想の百華繚爛たる時代であつただけに、人物も實に豊富である。

孔明はその中にあつても智力、力量、人格の冠絶せるものであつて、當代の文物教養が凝固して此人物を爲したときへ思はれるほどである。

かれが仁愛の劉備と事を供にしたのは、備の人を容るること深く、自からに經營の才のないのとよく合致し、知音の感深きものがあつた。ゆめと、曹操の權謀機略縱横なものを本質的に憎悪する感情のあつたゆめであらう。漢室を興すと云ふこともあつたに相違ないが、劉姓であつたとは云へ、蓆を織り、履を販^ひいだかれに忠誠の念を抱いたゆめではない。備は漢の景帝の子靖山の末流のそのまた枝屬の果てと自稱するが、これは多くあてにならない。矢張りこの寛恕なる一偉丈夫と共に天下を定め春秋戰國以來の社會的混亂を救はんと欲したるためであつたと思はれる。膝を抱いて琴を弾じたこの高朗明潔な青年が、一度立てば三分の計たちまち成るのも、この意氣投合と、眞摯なる熱意との終生を貫流するものがあつたがためだ。

その天分は、彼自から比べてゐた樂毅、管仲に寧ろ勝れてゐる。兩者の教養事蹟は霸道の補佐であつた。治政に於ける管仲は卓越せるものがあるが、軍事、政治、文學の多方面の才能と人格の超絶せるは遠く孔明に及ばない。

又韓信、張良、蕭荷に比しても、孔明のもつ内容はこの三者を兼ねてゐる。かれは、治民、興國、立身、王佐の生涯の事業を、百般の事務に當つて、完成したのである。張良は謀臣、蕭何は後方勤務の良臣、韓信は百萬の將たる大將軍でそれぞれ分業的人物であつたが、孔明はこれらを獨りで兼行した。

三國時代の三奇として、武將に關羽、奸雄に曹操、賢相に孔明ありとする。

それぞれ比肩するに足るが、就中、孔明に人物の完成美があることも否み難いであらう。

※ ※

人物畫家はその對象を描寫せんとするとき、その人物にかなわなるときは決してよくかけるものでないそうだ。筆者も孔明を論じて決して盡し得たりとは思はない。たゞ、叙述の端緒をこれによつて得れば望み足りるとする。(追記、白河鯉洋先生の「諸葛孔明」は類書中の壓巻であることを、此稿を草しつゝ痛感した。訓えらるゝところ多かりしことを附言して置く。)

人間としてのマルクス

※ ※

マルクスが馬になつた。と云ふと、讀者は一寸意外に思ふであらう。が、それは事實である。マルクスはその娘の馬になつて、ロンドンのハムステッド・ヒースで、もう一人の娘をのせたヴイルヘルム・リープクネヒトの馬と競馬をやる。騎兵戦もやる。あるときは、モール（黒人の意、マルクスの浅黒い顔色と眞黒な髪とに與へられた子供達の仇名）が馭者臺になり子供を肩車にのせて、エンゲルスとリープクネヒトが二頭立ての馬になつてハイ、ハイ、ドードーをやる。

そして『子供達は兩親を教育しなくてはならないものだ』と口癖にしてゐた父マルクス——そして同志の間でも三十にして『父マルクス』と敬愛されたマルクス、アーガイル公爵家の縁

邊から出て、マルクスのために一切を棄てたエンニの夫としてのマルクス、親友エンゲルスと一身同體であつたマルクス、また獻身的にマルクスの家族の世話をしたヘレネ・デムードのことども、……人間としてのマルクスが最もよく描かれたるヴイルヘルム・リープクネヒトやボル・ラファルグの思ひ出は知る人は既に知つてゐる。

しかも、革命家としての、思想家としてのマルクスをも髣髴せしめるエンゲルス、レーニン、ルクセンブルグ等の諸論文、——これ等を輯録したのがエンゲルスの有名なる、Karl Marx's Denker, Mensch und Revolutionär. 近頃その邦譯が秋田篤氏によつて完成され、希望閣から出版された。

それを再讀してマルクスの底しれぬ偉大さに打たれる。萬國の労働者を團結せしめんとする革命家マルクスは比較的周知である。しかし、人間としての、また學者としてのマルクスはまだ餘り知られてはゐない。『學問的な目的に没頭し得るほど恵まれたものは、また人類のためその知識を提供することにおいても第一着でなくてはならぬ』と云ふ學徒マルクス、——その勉強は早朝から夕刻に及ぶ。往々夜を徹する。その書齋に於ける勉強、ブリテイッシュユ・

ミュージアムに於ける研究。書齋のすれ切れた絨氈、亂雑だが利用にまで整頓された書籍、：かれにとつては休息が寧ろ例外的時間であつた。

ハイネとゲーテを暗誦しシエクスピア、ダンテを極め、バルザックを愛するかれ、その語學力はすべての歐語に通ずと云はれ『一つの外國語は生活の闘争における一つの武器だ』と云ふかれ。

新しき時代のバイブルとも云ふべき資本論は、かゝる深く廣い知識の根にある科學的分析と綜合の天稟から生れ來つた。

かれは非常な愛煙家である。『資本論は私がそれを執筆してゐるあひだに葉卷に費しただけの費用を、決して償ふことはなからう』とかれは云ふ。

私もいまバットをふかしてゐる。しかし、それは煙草をのんでゐると云ふだけである。勉強は少しも出來ないのである。

たゞ、裨益する所多大であつた、秋田篤氏のこの翻譯に對する感謝だけは怠つてはならないと私は思つた。

マクドナルド

マクドナルドはスコットランドの漁村（ロシマウス）の生れ小學校を卒つたゞけの苦學力行の人。二十歳前ロンドンに出て勞働をやつたり、小僧になつたり、クラークになつたり、辛苦を経て今日に至つた人である。一九一一年に勞働黨の創立者ケア・ハアデイの後を襲つて黨總裁になり、後失脚したが、一九二四年第一次勞働黨内閣の首相一九二九年第二次内閣首相となつた。

※

※

かれが失脚したと云つたが、それはやむなき失脚であつたらう。歐洲大戰に際して非戰論を最後まで唱へ、牢獄に投ぜられさへしてゐる。

しかし、最近の政變における失脚——それは形の上では名譽ある聯立内閣の首班であるが内容的の根本的の失脚である。「政治的自殺」であるとは公平な觀察であらう。

一千二百萬ポンドの赤字補填のため、失業保険の減額や、一般経費の大節約を迫られてゐる財政的事情——そこにイギリス資本主義の國際的危機を孕んでゐるのだが——これに處するためにかればあらゆる犠牲を忍ぶ意圖であると云ふ。

労働黨に與へた親書に『國家の利益のために一時的にもせよ黨を困惑せしむる恐れある決意』を遺憾とすると云ひ『銀行の魔手』の動けることを否定してゐる。

が、歐洲大戰へのイギリスの參戰も國家の利益、國家の擁護の旗幟の下になされたのではなかつたか？ 恰度財政の窮乏を主として失業保険、俸給減額等々勤勞階級への轉化によつて解決せんとする財政策が「國家の利益」の名に於て執られんとしつゝあるのと同斷ではないか？ 何故に資本課税など労働黨本來の主張によつてこの難局を切り抜くる方策に出で得なかつたか。それこそ國家の名に於て、勞農勤勞大衆の名に於て主張せらるべきことなのだが。

※ ※ ※
しかしかゝる疑問は、出すだけ寧ろ野暮だと謂ふ。何故か？

米國金融資本がイギリス政府のほしがる短期クレジットを設定するに際し、失業保険の如き冗費を節約すべきことを條件にしたがこれに對し、マクドナルド、スノーデンが全く屈服するに至つた事情が餘りに周知のことであるからだ。霸權を喪失したイギリス資本主義がアメリカのそれに屈從せざるを得ざること、その屈從のイギリスに於て政權を繼續するがためには、この屈從に屈從する必要があること、これも亦周知の結論でなければならぬ。

※ ※ ※
かやうな屈從の屈從としてマクドナルドの所謂「人間内閣」(人材内閣)は成つた。しかし人間内閣は労働黨内閣の廢墟の上にこそ成立つたのだ。

マクドナルドは古武士の如くこの廢墟の上に立つてゐる。しかし、それは城を枕にする古武士の面影ではない。マケテドナルドとイギリスの労働者が云つたかどうかは知らない。が、いかに馱ジャレのすきなイギリス人でも、労働者の死活問題と見てゐる。

小にしては、イギリス労働者政治戦線の大異狀である。また大きく云へばレーバリズムの無力を全世界の社會運動に向つて完全に放送した事になる。

シュトレーゼマンの雄辯

國難と云ふ言葉が流行する。しかも、その頃の獨逸は、ほんたうのどん底であつた。大戦の悲惨なる影響が漸次その凄味を示してゐた。一九一三年に二萬五千移民を出した獨逸は、一九二三年には十萬を超える移民を押し出してゐた。人口の一割と。一割七分の土地を失ひ、原料品中最も重要な石炭は約三分の一を減じ、鐵礦は四分の一、亞鉛礦は三分の二を奪はれたばかりではない。産業の停頓、輸出入貿易の半減、殊に悪いことは、これ等の經濟的悲境の表徴として、マルクがどんどん下落して、取引を破壊し社會を混亂の淵に沈めて行つたことである。戦ひに喪はれた數百萬の壯丁をうらやましめるほどのフンガー・ノートが暴風の如くに襲ひ、既にマルクの下落で一面資本家は五十億金貨マルクの債務が消散したのに、生活の基礎を失つた小資本家階級とワイマール憲法で得た権利の空文を抱く勞働階級とは喪家の犬の如くならしが巷に溢れた。

められたのである。而も農産物は品目により一九一三年に比し二割五分から六割の減收を示し殊に都市の食料不足が甚かつた。ザクセンの小學兒童の虛弱者三割であつたのが今や七割五分に達したのにもその一斑を窺ひ得るのである。そして五百萬ほどの全失業、半就業者群が巷に溢れた。

一九二三年は、かくの如き年であつた。全獨逸の血の滴るを聞くとさる詩人が嘆じた。新年匆々巴里會議は決裂した。佛白兩軍は『軍隊保護の下に技術委員會をルール地方に派遣する』口實の下に、一月十一日にエッセン方面に侵入するに至つた。ラインの保證占領に、今やルールも加へられた。單に經濟的、政治的占領ではない。あらゆる種類の社會的、人間的冒瀆が露出せられたのである。そして獨逸は――。

一月の十四日は全獨逸の忌みの日であつた。その朝早くから伯林はどん底の坤きを、既に發してゐた。ケーニツヒ・プラッツは見渡す限りの灰色の人の波であつた。先輩O氏、K氏、とS君ともども十萬に餘る人渦に唯もまれるばかりであつた。中央黨首領ウイヘルム・マルクスの演説をその渦卷きの裡に聞き得たのはその時であつた。Nieder mit Frankreich! Franlöz

on 一と叫ぶ民衆の怒濤に比して、その餘りに、靜かなる演説は寧ろ意外の感を催したのである。彼が裁判官上りの、舊教黨首領たるためばかりではあるまい。型の如き佛國攻撃に過ぎぬその演説に、一種の力を感じしめたのは、それが大衆の地に這ふやうな坤吟であつたためであらう。淳々として説き来り、説き去ると云つた風な克明な彼の演説は、國粹黨の音頭をとれるラインの守りの合唱に變はつて行くのである。人崩れに押されつゝ、ラインゴルドの前まで来たとき、ラインの守りで元氣づいた彼等のデモンストラチオンの行列が、我々四人に「ヤップ」と浴せたのは餘興にもならぬことではあつた。けれども、アレキサンダア・ブラッツ近くで行はれる一月七日のI、K、Pの嚴肅、靜謐な *Erkämpft das Menschenheit* の合唱の餘韻と、路傍の異邦人たるO氏の肩をニコニコし乍ら叩いたりしたことを、ふと思ひ出してゐた……

ルール占領は獨逸を更により以上の困厄に陥れた。『大きな無意義』とロイド・ジョルヂをして曰はしめたばかりでなく、列國の識者階級は反感をもつた。英國労働黨は二月二十二日異議を唱へ、フランス急進社會黨首領エリオも三月二十九日ルール占領につき政府の闡明を求めてゐる。獨逸が國を擧げて反抗したことは *Frankreichs Ringen um Rhein und*

Ruhr と云ふセリースのバンフレットをはじめ反佛宣傳は、小冊子にビラに遺憾なく行はれた。獨逸の政界は幾變轉したが、カップ・プツチ、スバルタクスの二個の叛亂は極右極左の彈壓に歸着し、左、右、中間の所謂 *Koalitionspolitik* が指導的役割りを占めてゐた。エルツベルグ、ラーテナウの暗殺は共和國擁護運動を刺戟し、佛國の侵略に對しては消極的抵抗が試みられ祖國擁護がなされたのである。クノー内閣は前年十一月十四日、ウイルト内閣崩壞の後をうけて成立した。微力な内閣であつたけれども、大體この政治背景に立つて内外の難局に直面すべく運命づけられてゐた。外相ローゼンベルグが三月二十七日消極抵抗の繼續と賠償問題解決のため國際委員會設置の必要を聲明したのは、此の國難に處するクノー内閣の方針に基いたものであつた。四月十七日、I君、S君と共に、議會見物を試みて偶然聞き得た討論は、かゝる一般的情勢のもとに展開せられたものである。消極抵抗の繼續、獨佛國際平和條約、賠償金額支拂方法に就いての、前日のローゼンベルグ外相の見解に對する諸黨派代表の意見の開陳である。小雨がわびしく降る寒い日であつた。ゾフィー・プラッツで落合ひ傍聽席から、思ひの外狭い議場を見下ろしたのは、民主黨のゴットハインが「*Freie Deutschland*」と叫んでその

演説を結び自黨の拍手裡に降壇した頃であつた。見渡せば演壇より向つて右から、獨逸國粹黨、獨逸人民黨、中央黨、民主黨、社會民主黨、共產黨の順に居ならぶ。二十人位ゐるの婦人議員が先づ目につく。殊に六十五才を越ゆる白髪のクララ・ツェトキンが共產派の眞中で遠い耳を傾けて辯士に聞き入る様子は一種の感を催はす。獨逸人民黨を代表して、グスタフ・シュトレーゼマンがその一分刈りの頭で、巨體を演壇に運ぶに及んで、滿場その雄辯に靜聽しはじめ。豊富な聲量と、明快な論旨はその赭顔と巨體と相待つて非常に練達な勢力家たるを思はしめる。「佛國の侵略政策」を痛罵し、「ライン、ルール占領による全獨逸國難」を絶叫して抵抗の必要を説くのである。彼は伯林、ライプツヒヒ大學に學び製造業組合の書記等を振り出しに、實業界政界に地歩を堅め、人民自由黨の首領として戰時中、極端な併合政策を主張し、革命後も人民自由黨右派を糾合して獨逸人民黨を組織し、蒙塵後のウイルヘルム二世に對し王政主義的な賀詞を送つたりしてゐるが、聯立政策の一分子として次第に大勢に順應し、社會民主黨とも提携するに至つたのである。その雄辯と精力と練達は、オツポチユニズムと相待つて彼をして次第に政治家として有力ならしめた。後にドウズ案、ロカルノ協定の成立、國際聯盟加入等の成績を殘

さしめたる準備は、恐らくこの頃から出來てゐたであらう。

正確な舊い型にはまつた議會演説であり、その内容も大したものではなかつたが、その雄辯は議場の注意を吸収するに充分である。「*Sehr gut! sehr wahr!*」の賞讃の叫びが、急に立ち上つた瘦體、白髪の一老人の怒號によつて、黙らされてしまつた。その爲めに捲き起つた賛否の、叫喚混亂は一時シュトレゼマンを立往生せしめた。獨立社會黨が社會民主黨と前年合同を決議した際一人獨立社會民主黨にとゞまり、世人の所謂「二人黨」または「レーデブア黨」の首領として頑張つたゲオルグ・レーデブアこそ、この老人に外ならなかつた。七十三才の高齡の彼が顔を眞赤に染め、議席に突立ち卓を叩きながらシュトレゼマンと應酬した姿は、森戸氏の所謂、舊時代の「悲壯なる英姿」ではあつた。獨立社會民主黨から共產黨に加はつた、若き、ワルター・ステツカーがシュトレゼマンに代るや、議場は無殘にもがら空きとなり、私語雜談にざわめく。その論旨が政府の政策の非難攻撃に終止したことは云ふ迄もないが、その辯論は決して成功とは云へない。軽い、さばがしい演説であつた。……此の *Koalitionspolitik* の一場面は、共和國の確保と共に資本主義の復興を豫示し、獨逸革命が、「芝生を踏まず」に市

街戦が爲されたと謂はるゝやうに、經濟組織にふれずに終つたことを意味するであらう。そしてその事は復興獨逸の方に辿つた道であり、又國際情勢上も聯立政策を是認す可きであると考へる。唯筆者は、國民主義的感情があれほどまで熾烈であつたのに、ファッシスト運動がものにならなかつた點に興味を感じてゐる。その年の八月ライン、ルール占領地に探検旅行を試みたとき、この國民的感情は觸目悲慘の狀況のもとに於ても感情の範圍にとゞまり決してそれ以上のものでないことを觀取し得た。デュッセルドルフの自治行政大學のクンブマン教授が余の肘をつかんで訴へたところの佛軍行政の暴狀が、却つて、いづれの側の國民主義的支配の永續をも可能ならしめぬと云ふ觀察の一つの示唆であつたことを附加して置かう。(1929.2.3)

人物春秋完

(兩角製本)

昭和八年七月十七日印刷
昭和八年七月二十一日發行

人物春秋

定價壹圓五十錢

著者 佐々弘雄

發行者 山本三生

東京市芝區新橋七の十二

印刷者 君島潔

東京市小石川區久堅町一〇八

東京市芝區新橋七の十二

發兌 改造社

振替東京八四〇二
電話芝(43)二二二一四

刷印社會式株刷印同共

版權
所有